

叡智を生きる

他者のために、他者とともに

LIVING IN WISDOM

for others, with others

...

上智学院 カトリック・イエズス会センター〈編〉



上智大学出版
Sophia University Press

叡智を生きる

他者のために、他者とともに

LIVING IN WISDOM

for others, with others

...

上智学院 カトリック・イエズス会センター〈編〉

上智大学出版

Sophia University Press

『叡智を生きる』（新版）刊行によせて

ここに新しい形で『叡智を生きる』を皆様にお届けできることは、大きな喜びです。前版は上智大学100周年、同短期大学部40周年、上智社会福祉専門学校50周年を記念して刊行され、以来5年間、「Men and Women for others, with others」という教育精神と上智建学の理念を伝える有益なメディアとなってきました。その間、2016年4月に、同じイエズス会を設立母体とする栄光学園、六甲学院、広島学院、泰星学園の4学校法人と上智学院との法人統合が実現し、400年の歴史を重ねたイエズス会教育の伝統を核とする7校を設置する一つの学校法人として、新たな歩みを始めました。それに対応して『叡智を生きる』も刷新することになりました。

この本を手にとって、上智のすべての学校が、世界のイエズス会系学校と志を一つにして追求しているミッション（使命）の歴史的起源、そしてまた、教育・研究・社会貢献の活動をとおして人類世界の向上に貢献する現代的ヴィジョンの理解を深めてください。

上智が依って立つキリスト教的人間観は、人間を全体として完成させるという統合的人間観であり、学校としても中等教育機関から高等教育機関へと繋がる一つのプロセスを重視します。創立者の一人ダールマン師が当時のイエズス会総長ヴェルンツ師に宛てて1906年末に起草したと推定される覚書にも「イエズス会の仕事はむろん大学だけに限られるものではない。さもなければ、これは胴体のない首であろう。規模の大きな中学校とりっぱな大学、これが究極の目標でなければならない。ある程度まで、そしてある意味において、中学校すなわちウンターおよびオーバー・ギムナジウムが日本においても、将来われわれの教育使命の最も重要な要素とすらなるのである」（『上智大学史資料集』第I巻54頁参照）と記されています。最近始まった上智学

院の新しい形が創立期のビジョンに結ばれているのを知って、今の私たちもまた100年を越える上智の歴史という鎖の一つの輪を形作り、先へと継承する使命を担っていることに、思いをいたさないではられません。

新しい『叡智を生きる』が上智の起源となるイエズス会教育についての理解を深め、さらに創造的な歩みの原動力となりますように、願っております。

上智学院理事長
イエズス会高等教育担当理事

佐久間 勤

目 次

巻頭言 『叡智を生きる』（新版）刊行によせて 上智学院理事長、イエズス会高等教育担当理事	佐久間 勤…… 1
第1章 創立期のイエズス会学校を訪ねて ——学校教育という使徒的活動へのイグナチオの想い——	高祖 敏明…… 5
第2章 “手頃さ”と“貧しい人のため” ——現代イエズス会教育のヴィジョンの源泉と方法——	松村 康平……21
第3章 日本のイエズス会学校	
■前史としてのキリシタン学校……………	35
■上智大学の創立……………	36
■中等教育の開始……………	43
第4章 現代を切り開くイエズス会教育	
■東ティモールにおけるフロンティアの教育プロジェクト ——聖イグナチオ学院と聖ジョアン・デ・プリトー教育大学——	浦 善孝……53
■これからのイエズス会教育：課題と将来的なビジョンに対する期待	マイケルR・ポリート……67
第5章 今日のイエズス会高等教育への挑戦 ——深みのある、普遍的な、学識ある奉仕職をめざして——	イエズス会前総長 アドルフォ・ニコラスS.J.……85
編集後記……………	234

●メッセージ	上智大学長	曄道 佳明 …… 38	
	上智大学短期大学部学長	山本 浩 …… 39	
	上智社会福祉専門学校 前校長	高山 貞美 …… 42	
	六甲学院中学校・高等学校 前校長	古泉 肇 …… 45	
	栄光学園中学高等学校校長	望月 伸一郎 …… 47	
	広島学院中学校・高等学校校長	三好 彰 …… 49	
	上智福岡中学高等学校校長	大石 英雄 …… 51	
●コラム I ……	18	●コラム II ……	41

Contents

Foreword	Living in Wisdom: Concerning the New Edition Chancellor of Sophia School Corporation, Trustee for Jesuit Higher Education Tsutomu Sakuma, S.J.⋯	109
Chapter 1	Visiting the Jesuit Educational Institutions at the Time of their Foundation —The Vision of Ignatius Concerning the Educational Apostolate—	111
Chapter 2	“Affordability” and “For the Poor” —The Origin and Method of the Vision of Contemporary Jesuit Education—	133
Chapter 3	Jesuit Schools in Japan ■ Pre-history of Jesuit Schools in Japan ⋯	151
	■ The Founding of Sophia University ⋯	152
	■ Beginnings of Secondary Education ⋯	160
Chapter 4	Jesuit Education: A Gateway to the Current Age ■ A Frontier Educational Project in East Timor —St. Ignatius School and St. John de Britto Institute—	171
	■ The Future of Jesuit Education: Challenges and Promises of a Vision	191
Chapter 5	Depth, Universality, and Learned Ministry: Challenges to Jesuit Higher Education Today Superior General of the Society of Jesus	211
Editorial Afterword	Adolfo Nicolás, S.J.⋯	235

● Message

President of Sophia University	Yoshiaki Terumichi ⋯	155
President of Sophia University Junior College Division	Hiroshi Yamamoto ⋯	156
Former Director of Sophia School of Social Welfare	Sadami Takayama S.J. ⋯	159
Former Principal of Rokko Junior/Senior High School	Hajime Koizumi ⋯	162
Principal of Eiko Gakuen Junior and Senior High School	Shinichiro Mochizuki ⋯	164
Principal of Hiroshima Gakuin Junior and Senior High School	Akira Miyoshi ⋯	166
Principal of Sophia Fukuoka Junior-Senior High School	Hideo Oishi ⋯	168

● Column I ⋯ 131

● Column II ⋯ 158

(S.J.: イエズス会員)

第1章

創立期のイエズス会学校を訪ねて

——学校教育という使徒的活動へのイグナチオの想い——

上智学院前理事長 高祖敏明

学校法人上智学院の三つの高等教育機関と四つの中等教育機関は、いずれもカトリック男子修道会のイエズス会を創立母体ないし経営母体としている。

イエズス会はロヨラのイグナチオを中心にして誕生し、ルネサンス後期の1540年9月に正式な修道会として認可された。イエズス会は「西洋教育史上に不滅の足跡を印した」(岩波版『教育学辞典』)と評価されており、その発展ぶりに注目すると、初代総長イグナチオの逝去当時(1556年)48校であったイエズス会コレギウムは、決定版「イエズス会学事規定」(Ratio atque Institutio Studiorum Societatis Iesu, 1599)が完成した直後の1600年に245校を数え、1640年には521校に達している。

「学事規定」は、急激に増えるコレギウムの各地での実践を慎重に吟味しながら、イエズス会学校としての基本的性格と基本方針を定め、その水準を一定以上に保つための教育体制を提示したものである。イギリスの政治家・思想家フランシス・ベーコンは、発展を続けるイエズス会学校の教育について、「すぐれて有用性に富んでいる」と高く評価している(『学問の進歩』1620年)。これ以降も、1710年には612校、1749年には669校にまで増大している。なお、1600年以降の数字には、ヨーロッパを中心としながらも、日本(セミナリヨ、コレジヨ)を含むアジアや中南米に開設されたコレギウムも算入されている。

しかるに、イエズス会は元来、キリストの「福音」の宣教と信者の司牧とを主要任務にした修道会であり、学校教育を第一の任務とする教育修道会ではなかった。教皇パウロ3世がイエズス会を正式の修道会として認可した朝

書『レギミニ・ミリタンティス・エクレジアエ』（1540年9月27日）には、この会の設立目的が次のように定められている。

イエズス会が設立された目的は、とくに公の説教、および神の言葉を告げる務めに従事し、種々の霊操を与え、またキリスト教的な博愛・慈善の業を果たし、とりわけ子どもや無学な人々にキリストの福音を教え諭し、さらに告白やその他の秘跡を授けてキリスト者を力づけ、こうして人間が実生活の面でも、キリストの教えを理解する面でも進歩するように、そしてキリストへの信仰が広まるように努めることである。

したがって、本来イエズス会の任務は、説教、教理教育、霊操の指導、博愛・慈善の業、告白や他の秘跡の授与に従事することである。子どもや無学な人への教理教育や民衆相手の説教も担当する点で、宗教教育の一端を担うにしても、コレギウムや大学での講義や学問研究は会の任務に掲げてはいない。歴史上先行する修道会、たとえば、フランシスコ会やドミニコ会などは、哲学と神学を中心にした学問の研究と教育に携わり、その発展に貢献してきた。アルベルトゥス・マグヌスやトマス・アキナス、ボナヴェントゥーラやロジャー・ベーコンらがその代表的人物である。これに対しイエズス会は創立当初、そうした活動を自らの使命とは考えていなかった。むしろ、会の基本的性格を定めた「1541年の会憲」は、「本会においては、学問研究も講義も担当しない」と明確に否定していた。

ところがイエズス会は、それから10年と待たずに、つまり、イグナチオが初代総長でいる間に、当時はおもに聖職（志願）者が学ぶものであった哲学と神学ばかりでなく、一般青少年を対象にした人文学の分野をも含めた学校教育に、それも授業はもとより、学校の管理・運営にも積極的に取り組むこととなった。

では、この否定的態度から積極的取り組みへの方針転換は、なぜ、どのようなプロセスで生じたのだろうか。それを明らかにするために、創立当初の

イエズス会コレギウムが四つの段階で形態や性質を変えていった歴史をたどってみよう。

イグナチオは、宣教や司牧の使徒的活動を適切かつ効果的に果たすためには、当時の最高レベルの教育を身につける必要があることを自覚していた。その背景には、そうした教育を十分身につけていなかったために、人々への信仰生活の指導が異端と疑われ、人文学と哲学・自由学芸、神学の勉学課程を修了するまでその種の活動を禁じられたイグナチオ自身の痛い経験があったこと、そして、創立当初の同志たち全員がパリ大学で学び、マギスターの学位と大学で教授する資格を得ていたことがあった。

早くも1540年春、イグナチオは人文学、哲学・自由学芸、神学等の必要な勉学を修了していない会員（神学生）をパリに送った。彼らはイエズス会員専用の勉学の家としてのコレギウムで共同生活を営みながら、その地の大学に通って講義を聴き、勉学の指導を受けるのであった（第一のタイプ）。

これを皮切りに同種のコレギウムが、会員数の増大と各方面からの寄付・寄進の増加に助けられて、数を増していった。1542年にポルトガルのコインブラ、イタリアのパドゥア、ベルギーのルーヴァン、44年にはドイツのケルン、スペインのバレンシア、翌45年には同じくスペインのガンディア、バリャドリッド、さらに46年にはイタリアのボローニャ、スペインのアルカラと、イギリスと東欧を除く当時のヨーロッパの主要な大学都市に相次いで開設されていった。

この対内的養成機関は、修道会たるイエズス会の家であり、専ら勉学に従事する養成途上の神学生会員のための施設——とはいえ、養成段階の進んだ会員ないし終えた会員が院長（Rector）や養成担当者（Formator）として彼らと共同生活を営んでいる——であって、会員以外の共住は許されていない。ここでは、復習（repetitio）などの学生自身による共同学習や自習等は行われていたが、当時の大学やコレギウム（学寮）で普通に行われていた講義（lectio）、演習（exercitia）、討論（disputatio）等は一切開かれていない。院長や養成担当者のほとんどが人文学関係の教師免許や哲学・自由学芸の教授資格を有しているのに、若手会員は地元の大学に通って学び、指導を受け

るのであった。イエズス会の創立目的への型どおりの忠実さを、ここに読み取ることができる。

ところが1545年11月、この年の春に開設された、スペイン東部の地中海に面したガンディアのイエズス会コレギウムで、哲学・自由学芸の教授資格をもつ会員が、後進の神学生たちに論理学、形而上学、倫理学などの哲学・自由学芸の一連の講義を正規に授け、演習等も指導することになった。対内的な一種の学校という性格を加えた、第二のタイプのコレギウム誕生である。これは、神学生が通学できる有力な大学が、ガンディアにもその近郊にも存在しなかったからであった。

その1年後の1546年10月、ガンディアのコレギウムは、さらに第三のタイプへと変容していった。神学生を対象としたそれら哲学・自由学芸のコースに、聴講を希望していた会外の一般青少年が正規の学生として受け入れられ、講義、復習、討論などの授業に参加し始め、対外的な学校という新しい性格をもつに至ったのである。これは、フランシスコ・ザビエル（1506～52）たちが関わったインドのゴアの聖パウロ学院での試みを別にすれば、イエズス会員が会外の青少年に定期的かつ正規に講義を授け、その教育を担当するようになった最初の事例である。ただし、参加した一般学生はごく少数であり、あくまで例外的な扱いに留まっていた。

その1年程あとの1547年12月中旬、イタリア南部シチリア島のメッシーナの参事会代表が、シチリア領主・スペイン副王ジョアン・デ・ベガの認許状を添えてイグナチオに手紙を送ってきて、10人の会員を派遣して当地に新しい総合教育機関（ストゥディウム・ゲネラーレ）を開設し、その運営も担ってほしいと願った。イグナチオはこの要請に対し当初は消極的で逡巡していたが、翌48年1月上旬にはその受諾を決め、中旬には参事会と副王とに正式な受諾書を送った。こうしてイエズス会は、一般青少年を第一の対象にした学校（第四のタイプ）づくりに積極的に取り組むこととなった。

実際、初のイエズス会学校の開設に向け、イエズス会は並々ならぬ意気込みをもって準備に励んでいる。聖ニコロ教会の校舎への改装改築や会員宿舎の確保など、参事会や副王と交渉して環境を整える一方、経験豊かなヒエロ

ニモ・ナダル（初代院長）やドイツで活躍していたペトロ・カニジオなど、派遣する会員を入念に抜擢し、10人を2月にローマに集めて一種の適性検査と教育実習を実施し、その能力と技量を確認させている。

「私たちは……ローマで各自に、それぞれ自分の習得してきた学問を教える実習をやらせてみました。つまり、ラテン語を学んだ人にはラテン語を、論理学を修めた人には論理学を、また自然学を履習した人には自然学を、そしてスコラ神学と実証神学（*theologia positiva*）を修了した人にはその科目を、各自が学修したものにしながら、あるいはひとつ、あるいは複数にわたって教えさせ、次いで一人ひとりに説教も実際にやらせてみました」という具合である。その上で、一人ひとりの担当できる科目とその力量とを伝える教員推薦状をメッシーナに送るほどの、念の入れようであった。

こうして48年4月24日、文法・人文学（*studia humanitatis*、下級コレギウム）、哲学・自由学芸、神学（両課程で上級コレギウムを構成）という段階的な三つの課程を備えた、本格的なイエズス会学校が開設された。校舎の改修が間に合わなかったため、正式な開校式は10月に延期されたが、その間、「開校案内パンフレット」を作成して広報に努めたり、教育方針や各課程の教育内容と教育方法などを整備していった。このメッシーナの学校は、1548年11月16日付で教皇パウロ3世より学位授与権をもつ大学への昇格が認められ、正式に権威づけられた大学となった。

このようなメッシーナでの学校開設に示されたイエズス会の学校教育への積極的態度は、これ以降さらに強化される。49年には同じシチリアのパレルモに同種の学校が開設され、以降、イグナチオが逝去した年（1556年）には、ヨーロッパに限っても48校のイエズス会コレギウムが開設されており、第四のタイプの本格的な対外的学校は、そのうち36校を数えた。それもシチリアやイタリアはもとより、スペイン、ポルトガル、フランス、ベルギー、ドイツ、ボヘミアへと広がっていた。実にその原型となったのがメッシーナの学校であり、それをさらに発展させ、モデル校として開設されたのがコレジオ・ローマーノ（ローマ学院、1551年2月開設。後のグレゴリアナ大学）である。

第1表 メッシーナのイエズス会コレギウムのクラス編成と主要な学習内容（1551-2年頃）

上級コレギウム	神学課程 (4年)	{ ①トマス・アキナスの神学大全 ②聖書と『神学大全』との関係 ③聖書（新約と旧約） } の3講義は4年間継続 他に教会法、教会法令・教皇文書等の実証神学、良心問題（カズス）、ヘブライ語等を学ぶ	
	哲学課程 (4年)	形而上学クラス	この間、幾何、天球論・宇宙論、三角法、遠近法、音楽論、天体運行論等の数学関係も学ぶ
		倫理学クラス	
		自然学クラス	
	論理学クラス	弁証論、範疇論等の思考の規則、オルガノンを学ぶ	
下級コレギウム	修辞学クラス	修辞学上の規則・作法・技法の学習と実習的体得	
	人文学クラス	ラテン人文学の読解や味読、ギリシア語文法と小作品	
	上級文法クラス	講文法、韻律、言葉のあや、配語法、正書法と作詩作文	
	中級文法クラス	{ 2 1 } (進 度別 段階 的区 分)	文法、詩・手紙・劇の模範的ラテン文の朗読と暗誦、作詩作文
			このクラスよりすべてラテン語で説明、文法より高度なラテン語文法、簡単な作文
初級文法クラス	4	『ドナトゥス』によるラテン語文法の学習	
	3	より高度なラテン語文法、簡単な作文	
	2	ごく初歩的なラテン語の読み書きの習得	
	1		

〔出所〕 Hannibal du Coudret, *De Ratione Studiorum Collegii Messamensis* (1551); Jerolamo Nadal, *De studii generalis dispositione et ordine* (1552).

〔注〕(1) 良心問題 (casus conscientiae) とは、司牧上の問題の種々の具体的ケースを取り上げてその解決を図るものである。

(2) 下級コレギウム、つまり文法・人文学課程は、いわゆる課題主義による進級制をとっている。

では、イエズス会コレギウムの原型と見なされるメッシーナの学校には、どのような特徴があったのだろうか。イエズス会の本来的任務から見て、そこにはどういう意義が見出されていたのだろうか。

最初に、この学校の1551年～52年頃の「クラス編成と主要な学習内容」を整理してみると第1表のようになる。そのもとでのおもな特徴は、以下のようによまとめられる。

(1) 下級・上級のコレギウムを構成する各クラスで「パリ大学の教えるや

り方」(modus et ordo Parisiensis)を採用していること。それが、クラス編成が曖昧だったり、学習課程に難易の順序が欠けていたり、授業への出欠が自由であったりした、他のさまざまな地域のやり方と比べてもっとも適切で有効な方法と認められているからであった。

この「パリ方式」は、具体的には、①諸学の土台として、適正かつ適切に読み、話し、聞き、書くの言語能力(当時はラテン語)を十分に身につけること、②生徒の学力や進度に応じて段階的にクラスを編成し、それぞれが専従の教師によって指導されること、③生徒は、段階的クラスを無視して授業を受講するのではなく、一時一教科主義で下級から順次段階的に学習していき、在籍するクラスの学習課題を習得してはじめてその上のクラスに進級できること、④講義形式の授業を授けるだけでなく種々の演習も加え、復習、討論、暗誦、朗唱、作文等の、生徒が中心になって行う学習方法を特に重視すること、⑤生徒には勤勉な授業出席が求められ、教師の勝手な都合や地域の偏った習慣、また生徒の気まぐれによって、むやみに授業が休講とされてはならないこと、の5点を特色としていた。

実際のところ、メッシーナの学校は、文法を初級、中級、上級の3クラスに分け、ギリシア語やヘブライ語のクラスも開設していた(第1表を参照)。そのうち、たとえば人文学クラスの授業では、生徒はかつて文法クラスで学習したエラスムスの『手紙の書き方』をより詳細に研究し、手紙を書く場合の規則や慣例を把握する。次いで、キケロの『親しきものたちへの手紙』を読み直し、エラスムスの提示する規則がどう活かされ、どのような表現で飾られているかを洞察し、皆でそれについて討論する。こうして両者を丹念に読み比べることにより、実用的な手紙の書き方を単に身につけるのみでなく、文章に対するセンス、理解力、思考力、批判力、表現力等の練磨もなされるのであった。

次の修辞学クラスでは、ローマの修辞学者クインティリアーナヌスの『弁論家教育』*Institutio oratoria*、およびキケロの『ヘレンニウスへの修辞書』*Rhetorica ad Herennium*などを使用して修辞学上の規則・作法・技法を学習する。生徒は同時に、キケロほかの模範的演説を何度も朗読して暗誦し、

声音や動作もつけて実演も行う。そのみか、毎週1回自分で演説草稿を作成し、教師の指導を受けつつ推敲を加え、コンテスト形式で各自が演説の実地練習に臨む。こうして、「正しい言葉づかい⇔正しい思考⇔正しい生活態度」と連続的に捉えられた「雄弁」という教育目標の達成が目指された。

なお、各文法クラスと人文学や修辞学クラスに共通する特色ある学習方法は、次のようであった。①毎日、それぞれのクラスの程度と進度に応じた内容の作文 *compositio* が課されたこと、②学習した内容の定着を図るため復習 *repetitio* が重んじられたこと（授業は前日に習った事柄の復習から始まり、毎週土曜日の午前中は、各クラスともその週に学んだことの総復習に当てられていた）、③生徒の学習意欲を鼓舞し、その自発性と学習効果を高めるため、一種のゲーム的要素を取り入れた討論 *disputatio* やコンケルタティオ *concertatio* と呼ばれる時間が授業に設けられたこと。ここでは、平日の午前中の授業の最後の30分、および土曜の午後に実施され、各クラスとも生徒がすでに学習したことを土台に、④教師がクイズ形式で繰り出す質問に生徒が答える、⑤クラスを二分して質問側と回答側とに分け、生徒同士のグループ対抗で質疑応答を行う、⑥数人の生徒を指名し、クラスの他の生徒が投げかける質問に答えさせる、といった方法がとられた。

一方、上級コレギウムでは、まず4年課程の哲学・自由学芸コースで、論理学、自然学、倫理学、形而上学、それに数学関係の諸学を研究する。その目指すところは、雄弁の中身を形成するべき知恵 *sapientia* と知識 *scientia* の習得である。たとえば、第1年目は論理学クラスで、後に続く哲学・神学研究が豊かに結実するための大切な道具、つまり、思考の原則を体系的に学ぶ。しかし学生たちは、講義をただ聴講するだけではない。なかでも、その日の講義終了後の復習や討論の時間には、教授の指導を仰ぎながら講義内容の消化と深化に努力を傾ける。このような講義・復習・討論がひとまとめになった学習方法は、以降の哲学課程と神学課程（4年間）においてもそのまま踏襲された。

上級コレギウムの最高段階は、キリスト教的な知恵と知識のより深い理解と習熟を目的とする神学課程で、学生たち（ほとんどが聖職者を志す）には、

①トマス・アクィナスの『神学大全』 *Summa theologiae* を順を追って講じるもの、②同じ『神学大全』を聖書の立場から見て、その関連性を解説するもの、③聖書自体を新約と旧約にわたって講説するもの、の3講義が4年間連続して授けられた。それ以外にも、教会の種々の教令や教皇文書、教会法についての講義も行われ、司牧実践問題 *casus conscientiae* (種々の具体的ケースを取り上げて司牧上の問題の解決を図る) の授業も開かれた。さらにヘブライ語は、聖書を学ぶのに有意義とされ、ラテン語・ギリシア語の習熟度が高い学生を対象に教授された。

(2) よい生活習慣の形成と宗教的・精神的な心の生活の向上が重視され、人文学的教養と雄弁、知識と知恵の習得を目指した知育と統合される形で、キリスト教的な知恵と敬虔の実践的体得が目標とされていること。具体的には、①ミサに毎日参加する、②毎週金曜日に教理教授を受講する、③毎日、自らの心と暮らしぶりの究明を行う、④月に最低一度は告白(罪のゆるし)の秘跡を受ける、⑤日曜日の公開説教を聴聞する、⑥一日の授業の開始時と終了時に「主の祈り」や「アヴェ・マリア」等の祈りを唱える、など。

(3) 教員構成が実に多彩で、その背景も多様性と国際性に富んでいること。実際、出身地を見ると、スペイン、フランス、イタリアのほか、ドイツ、オランダ、フランドル、サヴォアと、あたかも西欧各地の代表者が集められたかのようで、メッシーナに来る前にそれぞれが学び、あるいは教鞭をとった大学やコレギウムに注目すると、パリ、ルーヴァン、ケルン、パドヴァ、ボローニャ、アヴィニヨン、ガンディア、コインブラという多様性があった。

そのほか、(4)教師の生きた模範や感化による人格形成の重要性が自覚されていたこと、(5)勉学生活における休暇 *vacatio* の必要性が認識されており、上級文法クラス以上には明確な休暇の規定が定められていたこと、(6)新学年の開始時(10月初め)には公開の学習発表会が開催され、コレギウムの教授陣による公開講義、各クラスの生徒・学生たちによる公開討論会、演説、作詩作文の朗唱などが実演されたこと、(7)授業が無償であったこと、等々であ

る。このうち無償制は、「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」（マタイ10章8節）という福音の精神を生きるものであったが、結果的にコレギウムの門戸を広く市民に開放して、知恵と知識の宝庫を人びとに開くことになった。



メッシーナ修道院の門

こうしてメッシーナのイエズス会学校では、16世紀当時の人文学的教養に哲学的な自由学芸一般の教養、それにもし可能なら神学的教養をも身につけた人物、知恵と知識、敬虔と雄弁、一言でいえばキリスト教的ヒューマニズムを体得した人物の育成が図られた。この学校に学ぶ青少年が、これらを体得した人物となり、

一方では、自分たちの所属する社会と文化に有能な一員として積極的に参画し、福音的な愛と正義に基づく世界の建設に貢献すること、そして他方では、それらの献身を通して、この世においても来世においても救いに到達できるようになることが期待されたわけである。

このような期待と実績とに呼応する形で、イエズス会の目的規定そのものも手直しがなされていく。1550年7月21日、教皇ジュリオ3世がイエズス会の基本的性格づけを再確認した勅書『エクス・ポスキト・デビトゥム』では、「イエズス会が設立された目的は、とくに公の説教、種々の講義、および神の言葉を告げる務めに従事し……」（太字は引用者）と、イエズス会がコレギウムや大学での講義を担当し、学校教育の一翼を担うことが新たに明記された。つまり、教皇もイエズス会も学校教育という活動に、「人間が実生活の面でも、キリストの教えを理解する面でも進歩するように、そしてキリストへの信仰が広まるように努める」という、宣教や司牧と並ぶ使徒職的意義を見出し、学校教育（大学での教育と研究も含む）を自分たちの果たすべき重要な使徒的活動の一つに位置づけたのである。

このような転換は、イエズス会の「初心」に反するようにも見えるが、実

はこの「初心」の根底にあったイグナチオの人間理解からすれば、当然の転換でもあった。

イグナチオの人間理解は、「今までの服を脱ぎ、キリストの服装と武器を身につけることに決めた」人生の方向転換後に、祈りと苦行を重ねたスペインのマンレサでの修行を通して深められた。彼がそこで体得したものをいくつか整理してみると、次のようである。

- (1) それまで「神」と呼ばれる存在は天の彼方におられる尊い方と思い込んでいたが、その神は聖書が教えるように、今もいつもこの私と共におられること。そればかりか、イエスが「父」と呼ぶこの神は「創造主」として、天地万物の創造世界と具体的な歴史の歩みの中に、そして一人ひとりの人間の中に現存しておられ、愛と慈しみをもってその人と、人類世界のために働いておられること。しかも、父である神のこの愛は、その御子イエス・キリストの人となりと言葉、その生涯（特に受難と復活）に示されていること。
- (2) 人間は、そのようにすべてのもの、出来事、隣人の中におられ、常に私とともにいて共に働いておられる神を探し出し、その神の働きかけと招きを見出して、そうした歩みの妨げとなっているものを取り除きながら、その招きに心を開いて自ら進んで従うことによって神と人々に仕え、それによって救いを全うすべき存在であること。
- (3) ただしその際、神は、人が単なる罰への恐れや自分本位の打算から仕えるのではなく、人間としての自由な決断によって神の愛に応えることを望まれること。そこで人間に必要なのは、さまざまな内心の慾情や歪み、また、自らのこれまでの経験や受けた教育、および社会的な風潮や習慣によって曇らされた自分の心と言動を浄化し、同時に、自由で責任を担う判断と決断を行える自立した人格へと導いていただく（聖化される）ことであり、まさに神は一人ひとりをそのように導かれること。
- (4) 逆に「神の似姿」である人間は、このような神からの働きかけを受け、浄化と聖化という全人間的な革新を通して真に「神の子」と成り得るの

であり、人生途上の大きな岐路に直面して、内的、外的な影響を被る中で自らの心に生起するいろいろな思いを冷静に凝視し、吟味してその動き方を見極めることによって、自分が本来選び取るべき道（神が望んでおられる御旨）を選定できること。また、この選んだ道を誠実に生きるよう努めることが神の愛に應えること——これがそのままキリストのまねびとなる——であり、それは人々と社会への奉仕となって現れること。そしてこれが、人間の「救い」へと通じる道筋であること。

こうしてイグナチオは、自分の招かれている道は、決して世捨て人となり、隣人や人間社会と没交渉に生きるのではなく、浄化と聖化による回心の道を歩み続け、「神と人への奉仕」に役立つ生き方をすることだと自覚していった。その際、まず自分自身が「マジス（より大いなる）」自由と責任をもった自立の人格になるよう努めて初めて、隣人と社会とを福音的に変革する原動力となり得るのであり、熱意と使命感のみでは、自分にも社会にもかえって害を及ぼすことになりかねないことも学んでいった。

このマンレサ時代を振り返ってイグナチオは、「この頃、神はちょうど小学生の先生が子どもを教えるように自分を教え導かれた」と述べている。教育の観点から見て興味深いのは、彼が言葉の真実な意味で、「神こそが人間の教師である」こと——これは聖書の伝統に通じる——を経験的に学んだ点である。言い換えればイグナチオは、イエスの「わたしは道であり、真理であり、いのちである」（ヨハネ14章6節）という言葉が、人の人生と生き方にもつ意味と力を体験的に悟り、「真理はあなた方を自由にする」（同8章32節）の深い意味を味わったのであった。

彼は、マンレサでの内的経験を中心に、後年の種々の体験も加味しながら、「自分の役に立ったことで、しかも同時に、他人にも役に立つと思われるものを」書物にまとめ、『靈操』と名づけた。それは、散歩したり駆けたりして身体を鍛え、整えるのが「体操」と呼ばれように、この書が、自らの心と暮らしぶりの糾明、黙想、観想、口祷、念祷などの霊的修行によって「靈魂を準備し、整えるあらゆる方法」を含んでいる手引書だからであった。

実際、ザビエルらの最初の同志ばかりでなく、イエズス会員はすべてこの『靈操』をとおしてイグナチオの「巡礼」を追体験し、それによって自己変革と生活の刷新を図り、イエズス会の精神を体得しようと努めてきた。その意味で『靈操』は、内的にも人間的にも一層自由で自立的な人格を育てる、一つの人間教育のプログラムといえる。この『靈操』には、いくつかの特徴的な教育原理を認めることができる。たとえば、以下のものである。

- (1) 教育はそれ自体が目的ではなく、それによって人が本来の生き方を身につけ、人生の意義を全うするための手段である。そのため教育は価値観の育成を含み、学習者の世界観や人生観に方向づけも与える。
- (2) ただしこの価値観の育成は、外からの注入や押し付けであってはならず、本人がより一層大きな自由と責任をもって自らの人生を選び、設計し、それを生きていけるような、自立的な人間の育成こそがその目標である。そこでは教育全体が学習者中心に組織される必要があり、本人が主体的な学習意欲に目覚め、学習途上の自己点検や自己修正をも習慣化して、自ら継続的に成長していける力量を身につけるよう導かれることが肝要である。
- (3) このため教育の方法も内容も、また学級や生活指導なども、この目的と目標をより効果的に果たせるもので構成される必要が一方にあり、同時に、それを学習者の発達段階、学習段階などに応じて段階的に構造化していく必要もある。
- (4) 反面、この構造化は教育を硬直させるものであってはならない。むしろ学習者の「年齢や教養や知力などに応じて」教育活動が個別化され、多彩な方法と内容を用いて学習者自身の自己活動や自らによる発見を促進すること、また、学習者が自分の頭と心とからだの全体を働かせるような、全人格的な学習活動を引き起こすことが重要である。
- (5) したがって教師は、学習者との間に個人的な信頼関係を築き上げながら、人生の経験者および同行者として、模範を示すとともに種々の指導と助言を与えるが、学習者が自立するにつれて次第にその役割は小さく

なっていく。教師の与える評価も、学習者が評価の意味とその方法を徐々に習得し、やがて自分で自分を教育する道へと進み、自己評価できるように育てるためにほかならない。

- (6) 以上の事柄に唯一の固定的な回答はなく、イエズス会の「マジス」の精神に呼応する、常に「よりよい」道を求める絶えざる改善改良が教育という営みには欠かせない。

これらの原理は、上述のイグナチオの人間理解とともにイエズス会学校の発展を支える基本精神となり、400年を超えてイエズス会教育に受け継がれていく。現にこれらは、『イエズス会教育の特徴』（1986年）にも流れ込んでいくのである。

●コラム I

わずか30年余りの短い存在であったが、セミナリヨでは、キリスト教信仰と西欧的人文学の統合が図られ、それに『太平記』などの日本の古典文学の学習も加えられた。音楽やスポーツもカリキュラムに組み入れ、休暇の規定も定められていた。なお、パウロ三木は安土セミナリヨの1期生であり、天正遣欧使節の伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルティノ、中浦ジュリアンは有馬のセミナリヨの生徒であった。



地球が丸いことを解説するための図

他方、コレジヨでは、ペドロ・ゴメスが1590年代にラテン語で著した教科書『講義要綱』と、その日本語訳版が用いられた。三部構成の第一部は「天球論」で、日食や月食の原理を説く天文学、地球論、気象学と、教皇グレゴリオ13世の改暦（グレ

ゴリオ暦、1582年)などを詳説し、第二部「人間論」では、トマス・アクィナスの「アリストテレス靈魂論注解」をもとに理性をもつ人間の独自性と尊厳を説明している。第三部は「真実ノ教」と題した神学で、トリエント公会議で承認されたキリスト教の教義体系の概説であるが、日本の文化や伝統への適応も考慮されていた。総じて、当時の西欧世界と同じレベルの教育がなされており、部分的にしる「南蛮学統」として江戸時代に伝えられていった。

また、コレジヨでは、天正使節が持ち帰った印刷機を使って、いわゆるキリシタン版が刊行された。それらは、キリシタンの宗教書、教理書ばかりでなく、『日葡辞書』（1603-04年）や日本語の辞書『落葉集』（1595年）などの辞典類、『エソポのハプラス』（1593年）や『ヘイケの物語』（1592年）などの文学書など、100種類も数えたと推察されるが、現伝するのは30数種のみである。コレジヨに付設された画学舎も特筆されていていいであろう。



天正遣欧使節が持ち帰ったグーテンベルクの印刷機（複製）
写真提供：天草コレジヨ館

第2章

“手頃さ”と“貧しい人のため” ——現代イエズス会教育のヴィジョンの源泉と方法——

広島学院中学校・高等学校 前教諭 松村康平

はじめに

「手頃さ Affordability」と「貧しい人のため for the Poor」だよ」。2016年夏、筆者はシカゴにいた。そして、新しくできたアルバ・カレッジで働くイエズス会の神学生エリック・インメルの車に乗り込み、リトル・イタリーと呼ばれる地区にあるイエズス会修道院から、シカゴ中心部にある彼の職場に向かう途中で次のような質問をした。「イエズス会教育の将来的なヴィジョンはどのようなものになるのだろうか」。すると彼は、先の二つのこと、「手頃さ」と「貧しい人のため」という言葉を口にしたのだった。アメリカ合衆国をはじめ、世界においてイエズス会学校はいわゆるエリート校として位置付けられ、知られている。実際、日本においてもかつてイエズス会学校では「社会的リーダーの育成」が目標として掲げられていた。事実、多くの卒業生は社会的に重要な役割を担い、リーダーシップを発揮しながら活躍している。しかし、このような社会的「エリート」「リーダー」といったニュアンスや、世界のイエズス会学校での位置付けと、先のエリックの答えとの間にはある種の温度差のようなものが感じられるのではないだろうか。だが一方で、エリックの語った言葉はイエズス会教育の大きな転換点の先にある正当なヴィジョンであり、実際、世界中のイエズス会教育はこの二つの言葉にあらわされるようなヴィジョンを共有し始めている。以下において、このヴィジョンの源泉と方法、そして具体的な展開としての事例に触れながら、現代のイエズス会教育を探訪してみたい。

I. 現代イエズス会教育の源泉——Men and Women for Others

現代のイエズス会教育の大きな転換点であり出発点は、1973年に当時のイエズス会総長ペドロ・アルベ神父がスペインのバレンシアで開かれた「第10回ヨーロッパイエズス会卒業生大会」における講演の中で語った次の言葉であった。「今日、私たちの何よりも大切な教育目標は、他者のための人間 men-for-others の育成でなければなりません。すなわち、自分自身のためではなく、神とそのキリスト——全世界のために生き、そして死なれた神人 God-man——のために生きる人間、最も小さな隣人たちへの愛を含みぬ神の愛など考えることさえできない人間、人々のための正義を生じさせないような神の愛など茶番だと心底納得した人間です」。上智大学をはじめ、日本のイエズス会学校の学生・生徒、さらに教職員はこの「他者のための人間」というフレーズを幾度となく耳にするだろう。また、それぞれの学校で行われている教育プログラムやカリキュラムの根本にはこれが常に意識されている。

アルベ神父がこの言葉をイエズス会学校の多くの卒業生たちの前で語ったことは大きな意味のあることだった。彼は先の言葉を口にしたあと、次のように問いかけたのだ。「まず、こう質問させてください。私たちイエズス会員は正義のために教育してきたでしょうか」。彼は、それまでイエズス会学校での教育の中で、多くのイエズス会士たちから薫陶を受け、既に社会の中で活躍していた卒業生たちの前でこのように問いかけたのである。そして、それまでイエズス会学校で行われてきた教育に対して内省を促すかのように、次のように続けた。「あなたがたも私も知っています、あなたがたの先生であったイエズス会員の多くがこの質問にどう答えるかを。彼らは、全き『真摯』さと『謙遜』さをもって、『私たちはそうしてこなかった』と答えることでしょう。教会が今日、『正義』や『正義のための教育』といった言葉に賦与している意味のあらゆる深みを鑑みるなら、私たちは、あなたがたを、正義のために教育してはこなかったのです」。彼はこの講演においてイエズス会教育の方向自体を大きく転回しようと試み、「正義」という言葉の

旗のもと、教育事業全体の舵を大きく切っている。

アルベ神父の語る「他者」は具体的である。それは現代世界の中で、貧しく、抑圧された人々であり、彼の語りの中には具体的に目の前で苦しんでいる人々の顔がある。その人々の正義のために働く人間、それこそがアルベ神父が示す「他者のための人間」にほかならない。しかし、アルベ神父はなぜ卒業生に対して、それまでの教育における欠けているところを強調するかのような問いを投げかけたのだろうか。以上の問題意識を念頭に置きつつ、以下において、イエズス会教育の変遷を、「無償の教育」という理念と、アルベ神父の足跡という二つの側面からたどりたい。

■ 1. 「無償の教育」と「学費」

先のアルベ総長の問いかけの背景を探るため、現代のイエズス会学校を「無償の教育」と「学費」という観点から少し概観してみたい。イエズス会の創立者であり初代総長であったイグナチオ・デ・ロヨラの時代に設立されたイエズス会学校は当時からそこで行われていた教育や授業に関して評判がよく、また同時にそれらを寄付などによって運営し、無償で提供していたということには大きな意味があった（前章参照）。当時のヨーロッパ社会では、教育は必ずしも一般民衆に開かれたものではなく、限られた社会階層の人々に与えられるものであった。初期のイエズス会学校はそれらを無償で提供することにより、より広範な社会階層の人々へと教育を浸透させる器となったのである。

しかし、そのような無償による教育の提供は次第に実現することが困難となっていった。イエズス会は1773年に当時の社会情勢、特に教会と国家との間における政治的な要因などから各国において追放や弾圧を受け、クレメンス14世はその勅書『ドミヌス・アク・レデンプトル』においてイエズス会を禁止することを公にし、会は解散に追い込まれた。そのため、多くのイエズス会学校は閉鎖される事態となったが、1814年には弾圧の嵐は静まり、ピウス7世の『カトリケ・フィデイ』によってイエズス会の復興が許可された。しかし、実際的な教育事業の復興は、容易なものではなかった。イエズス会

が解散させられていた40年余りの間で、近代国家が形成されていく過程にあって、教育をめぐる状況も変化していた。国家主導の国民教育が浸透して行く中で、イエズス会学校は私立学校として運営されることとなったのである。そこでは、無償で一般学生を受け入れるという理念の実現は困難な状況となった。特に1820年代以降のアメリカにおけるイエズス会学校では学費徴収の可否が議論され、1833年、当時の総長ヤン・ローターン神父は一般学生から学費を徴収することを、アメリカにおいてやむなく認めた。その後、イエズス会学校はアメリカをはじめ世界中で拡大していった。拡大の一途を辿るイエズス会学校は、もちろんイエズス会員だけでなく、会員以外の一般教職員との協働によって運営されていった。現在においては周知のようにアメリカにおいて学費は上昇の一途をたどり、イエズス会学校もまた学費を支払うことができる社会階層の家庭の子弟が通う学校となっていった。

■ 2. アルペ神父のまなざしと招き

このようなイエズス会教育の状況に対してアルペ神父はどのように感じていたのだろうか。彼の半生に触れると、先の「他者のための人間」という言葉の源泉を垣間見ることができ、また彼自身が「ジグザグの道」と呼ぶ体験の中には、現代世界の変遷、さらには日本とイエズス会との深いつながりを見出すことができる。

アルペ神父は1907年11月14日、スペインのビルバオで生まれた。彼は、入会以前は医学を志し、将来は優秀な医者として働き、多くの生命を助けることが囑望されていたが、1927年スペインのロヨラでイエズス会の修練院に入り、イエズス会士の道を歩むこととなった。しかし、ほどなくして1932年には政府の脱カトリック的政策のためスペインからイエズス会士は追放され、ベルギー、オランダと移動を経て哲学と神学の勉学を続けた。その後、アメリカ合衆国において神学の勉学を修了し、医学を志していた経験から「精神医学」の領域で少し働いた後、1938年には日本に渡り、山口の教会で働きはじめた。しかし、その間にはスパイの嫌疑をかけられ、処刑されるかもしれないという恐怖の中で、1か月程独房に収監された経験もしている。1942年

には広島・長東にあった修練院の修練長となり、日本において修練者・神学生
の育成につとめた。

1945年8月6日8時15分、彼はいつものように長東の修練院にいた。原爆
が投下され、爆発した瞬間のことについて、アルベ神父は次のように綴って
いる。「8時15分、マグネシウムのフラッシュのような突然の閃光を見た時、
私はもう一人の司祭と一緒に自分の部屋にいた。私たちはびっくりして、何
事が起こったのかと飛び上がった……3秒か4秒かが永遠に感じられた（「ペ
ドロ・アルベ　ーイエズス会士の霊的な旅—ジャン・クロード・ディーチ
S.J.との自伝的会話」緒形隆之訳、教友社、2015年、p.188）。その後、彼は
仲間のイエズス会士とともに広島市内で負傷者の手当を行ったという。被爆
から20年後の1965年に、彼がこの時の体験を次のように振り返っていること
は印象深い。「世界初の原子爆弾の炸裂は、歴史を超えた現象に変わっていた。
それは思い出といったものでも、時を刻みながら経過していく歴史でも
なく、歴史の外側に置かれたいつまでも続く生々しい出来事である。……そ
れは時間とは無関係であり、動きを止めた永遠に属している。なんとという悲
しい永遠であろうか！（同上、p.211）」。

戦後、アルベ神父はイエズス会の日本準管区長、後に管区長に任命された。
そして彼は、第27代総長ヨハネス・バプティスタ・ヤンセンス神父の死去に
伴い、1965-66年に渡って開かれたイエズス会第31総会において総長として
選出された。この時期はちょうど第二バチカン公会議（1962-65年）が開か
れていた時期と重なっていた。この公会議はそれ以前までの世界・世俗社会
への対立的態度から転回し、「現代社会の要請への適応」「刷新」が大きなテー
マとされていた。イエズス会もそれに呼応するように、アルベ総長のもと大
きな転回を迎える。1974年には、アルベ神父は会の刷新を目的として第32総
会を開いた。そこでは、とりわけ「信仰の奉仕と正義の推進」がイエズス会
の現代的なミッションとして示され、会のすべての活動において重視される
べきであるとされた。彼は冷戦下における世界の動乱を体験し、その大きな
対立の中で苦しむ、貧しく、抑圧される人々とともにあり、世界について思
い巡らし、まなざしを向けていたのだった。彼は、現代世界が必要とする「二

つの可能性」について次のように述べている。「一つは、必要な変化をもたらすのに最も影響力をもつ人々が回心することであり、二つ目は、不公正な構造を力づくで破ることである」。彼は「回心」や「正しさ（正義・公正）」といったキーワードを強調しつつ、常に個々人の内面の問題と現代社会との深いつながりを意識している。

今一度、アルベ神父が「他者のための人間」という言葉を、イエズス会学校の卒業生を前に語った講演に戻ろう。アルベ神父は上述の経験を背景にして、先のイエズス会教育のあり方に方向転換を迫るメッセージの後に次のように続けている。「私たちがあなたがた [卒業生] に与えた養成が全面的には間違っていなかったとしたら、私たちはあなたがたに、変化への有効性と開きの精神を伝えているはずです。それは、聖書的な言葉で言えば、「回心」なのです。……私たちは、内的な回心のみについて言及するだけでは不十分です。私たちは、自身の歩みと自身の存在すべてが神へと立ち返ることに励み続けなければなりません。今私たちは、立ち返り、変容しなければならないのは、私たちの世界全体であると気づくようになりました。それはすなわち、個人的回心は、社会の変容からは切り離され得ないものだということを意味しているのです」。アルベ神父は「エリート」や「リーダー」といった社会を牽引する者として養成されてきた多くの卒業生の前で、そのイメージを越え、社会の中へと、さらには世界の中へと飛び込み、貧しさや苦しみの中にある他者と出会う者の養成というヴィジョンを示したのである。現代のイエズス会教育は、まさにこのアルベ神父の言葉に即している。

Ⅱ．イエズス会教育の方法

「私たちが理想とするのは、知的に有能であり、絶えず成長することを志し、信仰深く、愛情に満ち、神の民への惜しみない奉仕によって正義を実現することに自分を捧げている、調和のとれた人物です（166番）」。第29代イエズス会総長ペーター・ハンス・コルベンバッハ神父は、アルベ神父が語った「他者のための人間」というイメージを具体的に補完するように、イエズス会教

育が目指す人間像をこのように表現した。

先に触れた1973年の「第10回ヨーロッパイエズス会学校卒業生大会」で語られた「他者のための人間」というイメージは、1980年にローマで開かれたイエズス会中等教育の集まりで行われたアルベ総長の講演においてさらに深められ、イエズス会の現代的ミッションとイエズス会教育との関係性がさらに具体化された。しかし、翌年の1981年にアルベ総長は倒れ、次の総長の選出のために第33総会が開かれ、新総長としてコルベンバッハ神父が選出された。彼はのちに「他者のための人間」に「他者ととともにwith Others」を加えて、1986年には、『イエズス会教育の特徴 *Characteristics of Jesuit Education* (以下『特徴』と記す)] がまとめられ、イエズス会教育の新たな指針が打ち出された。さらに1993年、このような『特徴』の理念を、教育現場で用いるための具体的な教育方法を示すために『ともに歩む指導法 *Ignatian Pedagogy: A Practical Approach* (以下『指導法』と記す)] がまとめられた。以下においてこの二つの文書の特色をみてみたい。

■ 1. 『イエズス会教育の特徴 *Characteristics of Jesuit Education*』

『特徴』は先にみた、アルベ神父のヴィジョンに従って、イエズス会教育をイエズス会の現代的指針へと合致させるとともに、かつてのイエズス会教育における「誤解」への修正を促した。すなわち、イエズス会教育の目的は「社会的経済的エリート」を育てることではなく、「社会に仕えるための指導者」を育てることにあると示したのであった。特にその中で強調されているのは「他者に仕える人 *Men and Women for Others*」「貧しい人への深い関心」、また卒業後も引き続く「生涯学習」である。

『特徴』は、イエズス会学校では、生徒のあふれる才能をどのように用いるべきかを次のように示している。「イエズス会教育は、各自の才能が伸びるべき賜物であることを生徒に気づかせます。その才能は、自己満足や自己の利益のためでなく、神の助けによって人間共同体を築き上げるためのものです。生徒たちは、神への愛の発露として、与えられた才能を他者への奉仕のために使うように励まされます (82番)」。イエズス会学校で学ぶ者は、そ

の才能を「他者への奉仕」のために用いるべきであるという。ここで言われる「他者」とは、もちろんアルペ神父の「他者のための人間」に由来している。そのため、『特徴』で示される「他者」という視点も「貧しい人」へと向けられていく。「今日の世界の現状を踏まえ、また特に貧しい人に愛と関心をもったキリストの招きに応じて、教会と同様にイエズス会も、貧しい人を『優先させる選択』をしています。貧しい人とは、経済力のない人、障害をもった人、社会の片隅に追いやられた人、そして、あらゆる意味で人間らしく生きることができないすべての人を意味します（85番）」。

さらに、『特徴』では卒業後の観点、すなわち卒業生が生涯に渡って学び続けることの重要性が、次のように強調されている。「教育は生涯続くものですから、イエズス会教育は、卒業後も生徒が学ぶ喜びと向学心をもち続けることをめざします（48番）」。この生涯学習の本質についてアルペ神父が次のように示していることは重要であろう。「学ぶということは大事なことです。それよりもっと大事なのは、いかに学ぶかを習い、生涯をとおして学び続ける意志をもつことなのです」。このような素質、関心、行動力を備えた人物は「他者のための人間」とともに「正義の連鎖をもたらす人 multiplying agents」と表現されている。

■ 2. 『ともに歩む指導法』

『指導法』はイグナチオの『靈操』の方法論に根ざした、イエズス会教育を実践するための教育方法であると言える。とりわけ特徴的なのは、生徒と教師との関係を、靈操における指導者と黙想者との関係と重ね合わせるように理解し、捉え直していることにある。靈操では、指導者は黙想者に対して決定的な答えを伝えることをしない。むしろ、黙想者と同伴し、黙想者自身が何かを見つけ、神と出会うことを助ける。それと同様に本指導法では、教師は生徒に答えを伝えずに、むしろ生徒がなにかを見つけ、真理と出会うことを助けるのである。そこで重要とされるのは、学習プロセスの中での生徒の主体的な気づきである。したがってそこでは教師は、もはや知識の授与者ではない。

また本指導法はイグナチオの『靈操』の考え方に示された学習プロセスにも反映されている。この学習プロセスは学習環境context→体験experience→内省reflection→実践action→評価evaluationの五つの段階を設定している。特に中核とされるのは体験、内省、実践である。体験とは「物事の単なる知的把握のみにとどまらず、知性、情緒、意志など、つまり、人間のすべての精神的能力を働かせる学習を意味している（42番）」とし、その中で特に「学習者がなんらかの心の動きを感じている（43番）」ことが大切にされる。したがって、その体験が実際に直接的に体験されるものであれ、読書や講義などのように間接的な経験による学びであれ、物事をいかに深く味わうかということが重要とされる。

内省とは「記憶、理解、想像、感情をことごとく働かせて、学習課題の意味をつかみ、他の真理との接点を見出すプロセス（48番）」を意味する。学習者がその学習内容の意味を掴むということ、また自分の興味関心の方向性を深めるということ、またその学習内容から他の分野への広がり、さらには自分自身との接点を探ることで自らに課せられた責任を問うことなどが含まれる。しかし、あくまでも「体験」と「内省」とは相互に深く関わる。すなわち体験の中には何らかの内省が伴い、また内省とともに体験は深まるものとされる。

ここで言われる実践とは「愛は言葉よりも行いによって示すべきである」という『靈操』230番のフレーズを基盤にもっている。イグナチオは当初からイエズス会学校の卒業生が社会に貢献することを願った。それと同様に、この一連のプロセスにおいては、深い体験に導かれ、内省し、自分が引き受けるべき実践的行動・貢献、もっと言えば「人類社会の向上に役立つ『より大いなる』奉仕」を行うことが期待されるのである。

以上のように、『ともに歩む指導法』においては生徒自身が体験によって内面的に心を動かされ、内省する中で自らの主体的なコミットメントの可能性を探り、社会正義への観点へと行動を広げるというプロセスをとる。そして、イエズス会学校の生徒は、このサイクルを身につけ、成長していくことで、卒業後においてもさらに学び続けることが求められているのである。

Ⅲ. クリスト・レイという試み： 現代イエズス会教育の挑戦とその事例

「貧しい人のための教育というアイデアはもともとイエズス会の教育にあったんだ。クリスト・レイはその伝統の中にあるのさ」。筆者がアメリカ合衆国ボストンを訪れ、ジェームス・ガートランド神父に「クリスト・レイ」という教育モデルについて質問した時、彼はそのように語ってくれた。ガートランド神父は長年シカゴのクリスト・レイ高校で理事長として働いた経験をもっていた。「無償の教育」というアイデアについては先述したが、確かにクリスト・レイ高校はまさに、その現代版とも言えるかもしれない。

近年、この新しい教育モデルは注目を集めている。これは低所得層の家庭の子弟に焦点を絞った新しい教育モデルで、1996年にイエズス会シカゴ管区を中心としたスタッフによって考案され、最初のクリスト・レイ高校がシカゴに誕生した。

この教育モデルが焦点を当てているのはアメリカ国内における経済的格差である。その中で特に、生徒の「大学での学位取得」を主な目的としており、生徒の大学入学から、さらには入学後のサポートまでをそのミッションとして掲げているのである。これはアメリカにおける経済格差の大きな要因の一つとして大学での学位取得の有無があるという社会分析によっている。特にシカゴにおけるクリスト・レイ高校は、所得の低いメキシコ系移民が多く住む地域に設立され、まさにそこで貧しさの中に苦しむ人々のために作られた学校だった。

■ 1. ワーク・スタディ・プログラム

ここで、クリスト・レイの教育モデルの特徴として、ワーク・スタディ・プログラムとモデル化およびネットワークの形成について少し触れたい。ワーク・スタディ・プログラムは、学校が契約を結んでいる地元の企業に生徒が派遣され、働き、その給与を自らの学費に充てるというものである。生

徒は少人数のグループを形成し、週5日間、グループから一人ずつ同じ職場で、同様の仕事を行う。総合して一人分の給与を得て、それを自分たちの学費に充当する。だが、ワーキング・プログラムによる収入のみで生徒の学費はすべてをまかなうことはできない。その点においては、とりわけ募金と生徒から徴収する低額の学費でまかなっている。一般的にアメリカの一般的なイエズス会の運営する高校は全米の平均であっても10,000ドル程度と高額であるが、クリスト・レイでは家庭環境に合わせつつ3,000ドル以下の学費で教育を実現している。



クリスト・レイ高校案内パンフレットの表紙

したがって、協力企業に生徒が通い、働き、このプログラムを継続するために、ほとんどのクリスト・レイ高校は企業にアクセスしやすい都市部に作られている。しかし一方で、協力企業との関係性はこのプログラムの難しさでもある。つまり、このプログラムを維持していくために、協力企業の理解を得て、どのように生徒の働き口を集めるかという点について、学校は常に努力をしなければならない。しかし、このようなモデルを作ることで、貧しい人々が「手頃」に教育を受けることができる環境が着々と用意されているのである。

■ 2. モデル化とネットワーク化

また、クリスト・レイは、教育モデルとして構築されていることと、このモデルを採用する学校間でネットワークを形成していることが、興味深い点である。クリスト・レイは教育モデルとして構築されることで、他のカトリック系修道会、あるいは教区が経営している中等教育機関もこのモデルを採用し、このモデルに即した学校を作り、運営することができる。したがって、イエズス会からはじまったこのアイデアは、イエズス会を超えて全米に広

がっている。現在では同様のモデルを採用している学校が35校運営され、各校はクリスト・レイ・ネットワークを構築し、相互の連携を強めている。

ネットワークの拠点としてシカゴにクリスト・レイ・ネットワークセンターが設置され、管理、運営が行われている。ネットワーク化の利点はいくつもある。例えば、ネットワーク間における研修や理念の共有などの協力体制を提供することができることである。実際に、ネットワークに属する学校の教員はセンターが主催する研修会に共同で参加し、クリスト・レイ・モデルのアイデンティティの共有と教員間の協力関係を深めている。また、募金のルートなど財政関係の情報を学校間で共有することができる。アメリカのイエズス会学校の多くでは募金担当のスタッフが各校数名程度雇用され、専門的に働いている。そこで集められた募金やそのルートなどについての情報は一つの学校のみでなく、ネットワーク全体に共有され生かされる。さらには約20年間にいくつもの高等学校を設置した経験と蓄積から、2か年計画でクリスト・レイ・モデルの学校を新しく作るができるといった方法論も確立されており、今後も全米で、あるいは米国外で拡大させる計画を立てている。

さらにこのクリスト・レイの影響は中等教育を超えて、高等教育へも広がりを見せはじめ、実際大学においても同じように低所得層にターゲットを絞ったカレッジが作られていることも付記したい。2015年にアルペ・カレッジがシカゴで開校した。これは低所得層の家庭の子弟に焦点を絞った2年制の短期大学であり、この短期大学を卒業後、さらにハイレベルの大学への入学を目的とするものである。通常の学費は12,500ドルであるが、すべての学生は奨学金や資金援助を受け、基本的には年2,000ドル以下の学費を納めるだけでよい。中等教育から高等教育にわたっての低所得者をターゲットとした学校教育プログラムは大きな成果をあげている。

このようにクリスト・レイに始まるイエズス会教育の試みは、極めて明確なターゲットとビジョンを有している。社会の中で必要とされているが、まだ誰も手をつけていない要請に具体的に応えることは、まさにイグナチオ的であり、「他者のための人間」のあらわれであると言えるだろう。

おわりに——現代のアジア太平洋地域における教育ミッション

以上、私たちは現代におけるイエズス会教育のヴィジョンについて源泉と方法、そして事例とをみた。すると冒頭において触れたエリックの答え「手頃さ」と「貧しい人のため」という二つの表現が現代イエズス会教育のヴィジョンとしての的を射たものであることがわかる。イエズス会の教育事業は、その当初から変容してきたように、現在も日々変容している。それは適切な識別のプロセス、すなわち神の意志を探し求めることを通して、それに応えて自らを変えていくことにほかならない。それこそが、まさにイグナチオが行っていたことであるし、イエズス会教育をはじめイエズス会の諸事業に求めていたことであろう。

現在、アジア太平洋地域においてイエズス会は、日本をはじめオーストラリア、カンボジア、香港、マカオ、台湾、インドネシア、フィリピン、東ティモールなどの諸地域で学校を運営し、イエズス会教育を推進している。これらにおいて特に強調されているのは、もはや単なるエリート教育ではなく、「他者」のために教育がなされ、また生徒は「他者のための人間」として養成されていく。そして、これらの教育事業は絶えざる識別を通して、これからも神の意志に応えるように変容していくにちがいない。

日本のイエズス会学校

前史としてのキリシタン学校

日本のイエズス会学校は、キリシタン時代の短期間の存在を前史にして、20世紀から本格的な活動に入った。

イエズス会学校は、イタリア・シチリアのメッシーナの学校（1548年開設）を原型に、ローマ学院（1551年開設）をモデル校として発展した。その原型とモデルは、早くも1580年に日本に導入され、琵琶湖畔の安土と島原半島の有馬にセミナリヨが、豊後の府内（今の大分市）にはコレジヨが開設された。

もっとも、1549年に日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、日本で宣教師を育てるために、適地にコレジヨを開いて、外国からの宣教師には日本語と日本の礼儀作法や習慣を学ばせ、日本人にはラテン語やヨーロッパ文化を学ばせる構想を抱いていた。

この構想を実現したのが、1579年来日したアレッサンドロ・ヴァリニャーノであった。当時すでに14万人のキリシタンを数えており、彼は日本人司祭の養成が急務と考えた。そこで、安土と有馬にセミナリヨを、豊後には日本人と外国人宣教師が哲学や神学を学ぶコレジヨを開いた。他に、領主や武士の子弟を信徒のリーダーに育成する都のコレジヨも構想したが、教師も資金も不足しており、これは実現できなかった。

しかも、本能寺の変（1582年）の巻き添えで安土のセミナリヨは焼失し、各地を転々としたあと、最終的に有馬のセミナリヨと合流した。一方、コレジヨも島津氏の豊後侵攻（1586年）のため中断を余儀なくされ、秀吉の伴天連追放令（1587年）の影響も大きく、島原半島の加津佐や天草へと移転し、1600年前後にようやく長崎に落ち着いた。しかしこれらのキリシタン学校は、1614年の徳川家康の全国的禁教令により破壊されてしまった。

上智大学の創立

■ 上智大学の創立（1913年）

江戸幕府の禁教令（1614年）によってイエズス会の教育施設が破壊されてから約300年後の1906年に、時のローマ教皇ピオ10世がイエズス会に対し、日本に高等教育機関を設立するよう要請した。実は教皇は、中国での研究からの帰途、日本に立ち寄ったドイツ人イエズス会員のヨーゼフ・ダールマン神父が1903年にバチカンを訪れた際、彼と会って日本人のカトリックへの期待について情報を得ていた。

教皇は、日露戦争が終わった直後の1905年11月に、明治天皇宛の親書を携えた親善使節を日本に派遣した。団長はアメリカ・メイン州ポートランドの司教ウィリアム・ヘンリー・オコンネルで、司教は青山御所で天皇陛下に拝謁して親書を奉呈した。

ところが、この使節にはもう一つのミッションがあり、それは、日本の都にカトリック系大学を開く可能性を調べ、見極めることであった。同司教の回想録によれば（『上智大学史資料集』第1集）、東京市長や帝国大学総長らと会って各方面から情報を集めながら、時の首相、桂太郎と会談した折、東京にカトリック大学を創設する考えのあることをほのめかした。すると首相はそれに直ちに賛意を示し、ただ真にカトリックの名に値する、国際的な性

格を持った大学にするように、と注文をつけた。

司教は即座に、自分の日本ででの経験によれば、日本国民はフランシスコ・ザビエルに対して深い尊敬の念を抱いている、ザビエルの属していたイエズス会は学校教育に経験と伝統があり、その組織において際立って国際的である、したがって件の大学創立計画はイエズス会に委託するのが得策と思う、と説明した。すると首相は、きわめて熱心に、全面的な賛意を示した、と記されている。

こうして桂首相とオコンネル司教との間で、まだ大学名も場所も決まっていないのに、カトリック大学の設立について合意を見、司教はこれをローマ教皇に報告した。報告を聞いた教皇はイエズス会に対し、日本にカトリックの大学を開設するよう要請し、イエズス会は1906年9月、全世界の代表者からなる総会議を開催し、教皇からの要望に応えることを満場一致で決議した。

イエズス会は、実際に2年後の1908年に上述のダールマン、フランス人アンリ・ブシェー、イギリス人ジェームズ・ロックリフの、国籍の異なる3人の神父を選んで日本に派遣した。ちなみに、ダールマンはインド思想と中国思想の専門家、ブシェーは上海に開かれたフランス学院院長で、中国事情に詳しく、ロックリフはアメリカ・セントルイスを拠点としたバッファロー・ミッションで活躍していた人で、イギリスとアメリカの文化に通じていた。これに、フランスのソルボンヌで学び、中国では漢学の蘊奥を究めた日本人土橋八千太神父、初代学長となるドイツ人哲学者のヘルマン・ホフマン神父、そして日本人教授らが加わり、その協力のもと、まず1911年4月に財団法人上智学院を設立。次にこの財団が母体となって、1913年4月によく専門学校令に基づく上智大学（哲学科、独逸文学科、商科）を東京の紀尾井の地に開設できた。さらに1928年5月には、学部設置のための資金難を世界中のカトリック信徒からの寄付でなんとかまかない、大学令に基づく大学（予科2年、学部3年。文学部：哲学科と文学科、商学部：商学科）に昇格できた。

こうして上智大学は、日本を舞台に多国籍の人が力を合わせて創設された。しかも当初より、イギリス・フランス・ドイツの西ヨーロッパ文化とインドと中国の文化、それにアメリカ文化が加わって、当時の世界の代表的な文化

文明が上智で出会う一方、日本の文化や思想、学問を上智から世界に向けて発信するという仕組みがつくられた。こうした仕組みから生まれた成果の一つが『カトリック大辞典』（全5巻）の編集出版であり、世界的にも評価が高く、今も刊行の続く『モニュメンタ・ニッポニカ』の編集発行である。

これらはまさに「世界をつなぐ」仕事であり、国境を越えて文化をつなぎ、言葉をつなぎ、学問をつなぎ、人をつないでいった。この仕組みには、ザビエルの志、教皇ピウス10世の祈りと決断、イエズス会側の智恵と工夫が織り込まれている。実に創立時より、将来の世界の国際化、グローバル化という発展を予見していたかのような構想が組み込まれていたのである。

未来を担う若者たちへのメッセージ For Others, with Others



上智大学長
曄道 佳明

社会のグローバル化、地球環境の変化は、私たちの予想を超える速さで、そして予期せぬ方向に進んでいっているように思われます。さらにAIやデータ技術の発展が社会に大いなるインパクトを与えようとしています。この変化に対応するために、正しい倫理や価値観に立脚する新しい社会を導く新たな着想や構想、そして社会をデザインする力が求められているのです。今こそ私たちは、人間の尊厳に基づく確固たる理念と信念を発揮せねばなりません。本書を通じて、他者と共にあり続け、他者のために尽くす新しいグローバルリーダーについて考えてみてください。皆さんが、その資質に富み、時代を支える勇者であることを確信しています。

■ 上智大学短期大学部（1973年）

1968年に上智学院が神奈川県秦野市に秦野キャンパスを取得したことが上智大学短期大学部のルーツといえるだろう。秦野キャンパスには、グラウンド、テニスコート、野球場、合宿所などがつくられ、主に上智大学の運動部が利用していたが、広大な秦野キャンパスのかなりの部分は未使用のままであった。その頃、上智大学は入学試験の難易度が高まっていき、大学の規模も今よりもだいぶ小さかったこともあって、多くの不合格者が出るようになっていた。とりわけ、不合格者のなかには優秀な女子学生たちが多くいた。そこで、秦野キャンパスに女子のための短期大学を設立することになり、1973年4月に、1学年250人、英語科の上智短期大学が開校した。2012年に校名を上智大学短期大学部と変更した以外は、学生定員、学科組織など開校時と同じまま今日まできている。

未来を担う若者たちへのメッセージ
For Others, with Others



上智大学短期大学部学長
山本 浩

上智学院のすべての学校が大切にしている「他者のために、他者とともに」という教育理念は、理念のままにとどまっていたのではあまり意味がありません。「他者のために、他者とともに」というのは、他者に寄りそって他者のために何かを実行することの大切さを教える行動の指針です。上智大学短期大学部には、サービslラーニング（学内の授業での学びと学外でのボランティア活動とを融合させた学習）の長い伝統があり、多くの学生がサービslラーニングを通して学びを深めています。最近行った学生たちの意識調査によると、サービslラーニングを実践した学生は、実践しなかった学生と比べて、「他者のために、他者とともに」が自己の生き方により強い影響を与えていることが明らかになっています。実践することが大切なのです。自分は「他者のために、他者とともに」何をすることができるかを考えましょう。そして、行動しましょう。

■ 上智社会福祉専門学校（1964年）

上智社会福祉専門学校の創設者は、イエズス会士ペトロ・ハイドリッヒ神父である。当時の日本は高度経済成長期で、福祉専門職の育成に関心を向ける者は多くなかったが、神父は持ち前の情熱と粘り強さで、学院当局を始め文部省や厚生省、東京都にその必要性を訴えた。こうして1964年に夜間2年課程の「上智大学社会福祉専修科」が発足した。1966年、東京都より「各種学校」としての認可を受け、学校名を「上智社会福祉専修学校」とし、社会福祉主事課程と保母課程を設置した。初代校長には土田将雄神父が就任した。

1976年には学校教育法の改正に伴い、学校名を「上智社会福祉専門学校」と変更した（社会福祉主事課程を社会福祉主事専門課程、保母課程を保母専門課程と改称した）。

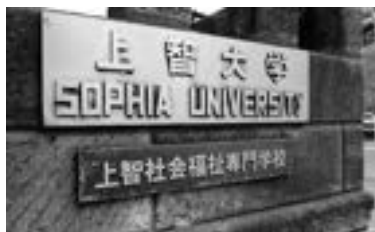
1982年、社会福祉主事専門課程を「社会福祉専門課程」と改称し、同課程に「社会福祉主事科」と「児童指導員科」を設置した。

1987年には「社専キャンパスミニストリー」が開始され、聖書研究会やクリスマスミサなどが行われるようになった。

1993年、社会福祉専門課程に新たに「介護福祉士科」を設置した。1997年、「児童指導員科」を「社会福祉士・児童指導員科」と改組した。1999年、児童福祉法の改正に伴い、「保母専門課程保母科」の名称を「保母専門課程保育士科」に変更した。2001年、社会福祉主事科を廃止した。

2006年、社会福祉士資格保有者のために「精神保健福祉士通信課程（短期）」を社会福祉専門課程の附帯教育として開設した。通信制ではあるが、「顔の見える教育」としてスクーリングを重視し、国家試験では常に90%以上の高い合格率を収めている。介護福祉士科は、まず2008年に夜間から午後へ開講時間帯が変更、次いで2011年に3年課程を2年課程に変更した。

本校はキリスト教ヒューマニズムに基づく教育を行い、「人を育てる学校」として自らを位置づけている。半世紀



に及ぶ歴史の中で、5,000名以上の卒業生を輩出してきた。仕事や家庭との両立に苦心しつつ努力を重ねた卒業生たちは、学んだ知識と技術を活かしてさまざまな福祉の場で社会貢献に励んでいる。

●コラムⅡ

1988年、上智社会福祉専門学校の創立25周年を祝ってマザーテレサから学生に向けて一通の手紙（5月6日付）が届けられた。社会福祉を志す学生たちへの、人間の本质が語られた励ましの手紙である。その内容の一部を以下に引用したい。

人生は愛すること そして、愛されることの喜びそのものです。愛は「与えること」で、一番よく表現されるのです。そして、いま学びにあるあなた方はこの「与えること」が痛むまで「与えること」を学ぶのです。何故ならば、これこそが本当の愛の証だからです。



マザーテレサ2度目の上智大学来校
(1982年4月23日)

●それぞれの未来へ向かって



上智社会福祉専門学校 前校長
高山 貞美

イエズス会系の学校に入学されたみなさんに、心よりお祝いの言葉を申し上げるとともに、同じ上智学院に属する者として一つのメッセージをお伝えしたいと思います。それは、ささやかなことであっても相手のために手を差し伸べ、自分を差し出すことを躊躇せずに実践してほしいということです。世の中には悲しみに沈んでいる人、孤独や不安を抱えている人、病に苦しむ人、傷ついた人、貧困の中にある人がたくさんいます。そのような人々の心に寄り添うことを忘れてないでいただきたいのです。

新約聖書の中に、「善きサマリア人のたとえ」(ルカ10:25-37)があります。みなさんもお聞きになったことがあるかもしれません。エルサレムからエリコへ下っていく途中、ある人が追いはぎに襲われて半殺しにされています。エルサレム神殿に奉仕する祭司やレビ人は、その人を見ても近寄らずに道の向こう側を通って行きますが、旅をしていたサマリア人は、その人の傷口に手当てをし、自分のろばに乗せて宿屋まで連れて行って介抱したという話です。

当時のサマリア人はユダヤ人と敵対関係にありましたが、イエスのたとえに登場する「善きサマリア人」は、民族や宗教の垣根を越えて、傷ついた人に温かく手を差し伸べています。イエスは自分の方から出向いて隣人愛を実践することの大切さを強調していますが、「わが身に置き換えて相手を思いやる」態度はどんな時代にも重要だと考えられます。

キリスト教精神に基づく人格教育を重視する学校生活の中で、みなさん一人ひとりが個性を磨き、自分らしさを大切にしながら、「他者のために、他者とともに」生きることの意味を深く学んでいただきたく思います。多様化するグローバル社会の中で、志を高く持ち、それぞれの未来へ向かって歩んでゆかれますよう心よりお祈りいたします。

■ エリザベト音楽大学（1948年）

現在のエリザベト音楽大学は、1948年4月に「広島音楽学校」として開校した。1952年には「エリザベト音楽短期大学」に発展し、さらに、1963年に四年制大学、1990年に大学院課程を設けるまで発展していった。

もともと、イエズス会のエルネスト・ゴーセンス神父の夢から始まったことであった。「当時の広島は（原爆によって）不毛の地と呼ばれていました。しかし、私は人々の心には必ずや『美』を愛する心が再び芽生えてくるものと固く信じていました。私は私の一生を捧げてこの人々の心に再び昔のような芸術を愛し平和を愛する気持ちを生まれさせたいと心に決めたのです。」

ゴーセンス神父はこの夢を実現するため、ヨーロッパやアメリカ合衆国、特に自国のベルギーで多くの支持者を得、ベルギーのエリザベト皇太后様も興味を示してくださったので、皇太后の名にちなんで「エリザベト音楽大学」と名づけられた。

中等教育の開始

■ 最初の試み

イエズス会が1908年に再来日する以前、マリア会と幼きイエス会はそれぞれ東京で男子校（暁星中学校）と女子校（雙葉女子中学校）をすでに設立していた。1922年に広島代牧区（広島教区の前身）として中国地方がイエズス会に任されてから、会員は中等学校の設立を検討し始めた。当時イエズス会の責任者であったヘルマン・ホフマン神父は、1925年に教皇ピウス11世からの援助を受けて、広島市の草津に土地を購入した。しかし、広島は軍事的に重要な場所であり、外国人が関係する教育施設の設立は困難と考えられたので、せっかく手に入れた土地を売却し、この計画を放棄せざるを得なかった。

■ 六甲学院中学校・高等学校（1938年）

その後、イエズス会がまだ活動していなかった関西に学校設立の話が浮かんできた。言い伝えによると、聖心会のマザー・マイヤー（イエズス会司祭、福者ルーベルト・マイヤーの妹）が、小林（宝塚市）にある聖心女子学院の近くに男子のカトリック学校が欲しいということであった。

1936年から中学校の候補地が模索、検討されて、2年後の1938年に六甲中学校が神戸で開校した。しかし、日中戦争の最中で、やがて太平洋戦争も始まり、学校と軍部との間にいろいろと面倒なことが生じた。

たとえば、軍事教練である。生徒を戦場に赴かせることに反対していた武宮校長のところへ陸軍の将校が訪ねてきて、軍事教練を学校で行うよう強く迫ってきた。武宮神父はその将校と大いに議論して説得した。そして最後には、将校は武宮神父の言葉に大いに感服し、校門を後にしたという。現在でも行われている中間体操は軍事教練の代わりとして取り入れられたものである。

戦後、六三三制の学制改革が行われたが、武宮校長はいち早く中高一貫の六年制を取り入れ、旧制中学の良き点を継承しようとした。それは先輩が後輩の世話をするという面に現れており、今日でも訓育制度として六甲学院には受け継がれている。

武宮校長は27年間校長職にあったが、回顧してこう言った。「神様がお望みになったが故に創られた学校であり、また、神様がお望みになったが故に、私のような者でも、とにかくお前校長になれということで、召されてこの職にいたのである。だから、どういう形であれ（たとえ廃されるという形であっても）、神様のみ旨のままに従うだけである。」

未来を担う若者たちへのメッセージ For Others, with Others

●隅の親石



六甲学院中学校・高等学校 前校長
古泉 肇

六甲学院の校舎正面に、初代校長武宮先生の言葉を彫った銅板がはめ込まれた二メートル四方の大石が記念碑として置かれています。

生徒たちはこの記念碑のことを単に「石碑」と呼んでおり、「石碑前に何時に集合」といえば全校生誰もが分かるほどランドマークの一つとして定着しています。

この記念碑の石は石碑用の石を販売しているお店から購入したものではありません。実は1938年7月六甲山一帯に集中豪雨が降り、その後発生した山津波によって山から押し流されてきた岩石の一つなのです。六甲学院が開校したのが1938年4月ですから開校したばかりの学校がいきなり大きな災害に見舞われたということになります。

「神戸大水害」と呼ばれるこの災害が起こってからちょうど80年後の2018年の7月に私は朝礼で生徒たちに、石碑の由来とこの石が水害の記憶を後世に伝えるための記念碑でもあるという話をしました。偶然にもその直後広島、岡山を中心に甚大な被害をもたらした「西日本豪雨災害」が起こり、山津波の恐ろしさを目の当たりにした私は80年前学校に起きた出来事を追体験できたような気がしました。

石碑は六甲学院が開校早々から大変な試練にさらされたこと、そして教職員と1期生が一致協力してこの困難を乗り越えたことを後世に伝えているのです。

私が六甲学院に在学していた50年程前まで、この大石は運動場の片隅にただ置かれているだけでした。生徒たちは休憩時間によく石に上って遊んでいました。この単に大きな石にすぎなかったものが今では六甲学院の「宝物」になっています。それは何故でしょうか。

初代武宮先生は27年の長きにわたり校長職を務められました。そして校長職を退かれるにあたり周りの人々は記念に胸像を造りたいと武宮校長先生に申し出ました。ところが武宮校長先生はご自分を写真・絵画・彫像等「形」で残すことを極端に嫌っておられたため、この申し出はあっさりと断られました。そこで胸像の代わりに武宮校長先生の言葉を銅板に彫って校庭に置かれていた大石にはめ込んだ記念碑を造ることにしました。

初代校長 武宮隼人の言葉
すべてのものは過ぎさり
そして消えて行く
そのすぎ去り消えさって
行くものの奥に在る
永遠なるもの
静かに考えよう



この言葉は六甲学院の建学の精神（私たちは六甲精神と呼んでいます）をよく現しています。そして、イエズス会創立者の一人イグナチオ・ロヨラの精神（霊性）とも響き合っています。この武宮先生の言葉こそ六甲教育の土台すなわち「隅の親石」なのです。

■ 栄光学園中学高等学校（1947年）

六甲が開校して9年後の1947年に、栄光学園中学校が設立された。当時、進駐軍の統治下にあつて横須賀方面を担当していたアメリカ海軍第五艦隊司令官のデッカー大佐はイエズス会に横須賀の旧日本海軍の土地に中学校を設立するように要請した。彼は自身がカトリックであつたわけではないが、横須賀にカトリック系の病院や学校を建てたいと望んでいた。しかし、イエズス会は二度にわたりその要請を断つた。というのも、その頃の日本のイエズス会は戦争によって受けた破壊からいかに復興するかという課題を抱えており、会員と資金の不足に悩んでいたからである。それでもデッカー大佐は強く要請し続け、結局イエズス会は中学校の開設を決めざるを得なかつた。

ちょうどその頃、グスタフ・フォス神父が7年間のアメリカ留学を終え、上智大学の史学科の教授として教えるために日本に帰ってきたばかりであつた。彼に新しい学校設立が委託され、六甲にならつて中高一貫の学校が1947年3月、財団法人上智学院栄光中学校・高等学校として認可され、4月に開校した。その後、法人制度改革により、栄光学園は上智学院から独立して栄光学園となつた。

1964年に東海道線の大船駅近くにある現在の校地に移動した。これは、海上自衛隊が旧海軍の基地であつた場所を使用したいと強く願い出たためである。代替地としていろいろと探した結果、校地も周辺の道路も十分に整備さ

れてはいなかったが、玉縄の地に校地を得て、校舎を新築した。現在通学路となっている坂道は、「栄光坂」と呼ばれている。

未来を担う若者たちへのメッセージ
For Others, with Others



栄光学園中学高等学校校長
望月 伸一郎

第二次世界大戦の終結から2年後の1947年、日本の各地は戦争の傷跡がまだ色濃く残っていました。神奈川県横浜市の横須賀市も、旧日本帝国海軍の重要な軍港であったこともあり、激しく破壊された施設はほとんどそのまま放置されていました。そうした海軍の廃墟を校舎として、その年にひとつの学校が誕生しました。栄光学園です。

軍隊の施設を校舎とはしましたが、栄光学園が設立にあたって受けたミッションは、ここを再び「戦争の基地」とすることではなく、むしろ「平和の基地」となること、すなわちここを拠点として、平和のために活躍していく人々を世に送り出すことです。

「平和」とは、単に「戦争をしないこと」だけではありません。戦争の原因となる貧困や抑圧などを、世界からとり除いていくことです。そして「平和の基地」となることは、栄光学園のみならず、すべてのイエズス会教育機関が帯びている使命だと思います。

■ 広島学院中学校・高等学校（1956年）

栄光学園が設立されて9年後、1956年に広島学院中学校が設立された。当時広島地区長であったエミール・キルヘル神父は、中学・高等学校の設立を望み、ヤンセンス総長に手紙を書いた。総長はその懇願に関心を示し、原爆の廃墟から立ち上がっていた広島の地で学校を始めるプロジェクトを引き受けるように、カリフォルニア管区に勧めた。ちょうどその頃、あるカルメル会の修道院長が母親の遺産の一部を管理していたので、広島に学校を設立するとの情報を耳にし、カリフォルニア管区に寄付をした。その寄付には意向

があり、宣教地の保護者である聖フランシスコ・ザビエルとリジューの聖テレジアに捧げる学校を広島で始めてほしいというものであった。カリフォルニア管区は更にさまざまな方面に呼びかけて寄付を募り、必要な資金と学校設立の母体となる会員を送った。その額は毎年100万ドルを越えており、1963年まで続けられた。

校地は広島市の西部にある古江の地に定められた。当時の広島市長のこれからの広島は西に発展していくという助言を受け、しかも浅野藩の別邸「翠江園」があった風光明媚な地でもあった。校地の整備には初代校長フーベルト・シュワイツェル神父が自ら先頭に立った。アメリカ軍の岩国基地からブルドーザーを借り受け、運転した。地元の人々は、アメリカ軍はここにいったい何を作るのだろうかと驚いていたという。

「修道には伝統があるが、学院には蛍光灯がある」とは、一期生たちがよく口にする言葉である。修道は浅野藩の藩校以来の伝統がある学校である。それに比べて、できたばかりの学院には伝統などあろうはずもない。しかし、「蛍光灯がある!」。これは決して自虐的な意味ではなく、当時ほとんど普及していなかった蛍光灯を取り入れた最新の設備を持つ学校であるという自負が込められているのである。

未来を担う若者たちへのメッセージ
For Others, with Others

● 四つの宝



広島学院中学校・高等学校校長
三好 彰

広島学院の初代校長であるフーベルト・シュワイツェル神父は、生徒たちに「よきリーダーたれ。よきリーダーとは、人に仕えられる者ではなく人に仕える者である」と訓示されました。そして、勤勉・明朗・敬虔・純潔を「四つの宝」と定め、この四つの心の在り方を大切にするように生徒に求めました。

「四つの宝」の元になるものは、1599年にイエズス会が発布した『学事規定』の中の「イエズス会学校に通う生徒のための規定」にあるそうです。それらはラテン語でIndustria, Obedientia, Pietas, Puritasの四つで、勤勉、従順、敬虔、純潔の語が当たりますが、シュワイツェル神父は「従順」を「明朗」に換えられました。

この四つの言葉をただ国語辞典にある通りに解釈するだけでは、シュワイツェル神父の広島学院建学に対する熱い思いは伝わりません。私は先輩の先生方から、次のように教えていただきました。

勤勉とは、細かなところもないがしろにすることなく、自分の能力を超えた難しい事態に直面しても、もう少し頑張って乗り越えようと努力を続けること。

明朗とは、嘘やごまかし、隠し事がなく、正しいことに従順であること。ありのままの自分を認め、ありのままの他人を受け入れる朗らかな心を保つこと。

敬虔とは、人間を超える大いなるもの、永遠なるものに想いをめぐらせ、憧れや畏敬の念を抱くこと。そして、謙虚な心で、生かされている自分を感じることに。

純潔とは、物質的な欲望に支配されず、邪念を持つこともなく、心が潔白であること。正しいもの、善いもの、美しいものに純粋に憧れる心を大切にすること。

本校の校歌の中に「四つの宝を胸にあたため、つらぬき生きん、われらが理想」とあります。生徒はもちろん、卒業生も同窓会に出席すればこの校歌を歌います。シュワイツェル神父は、イエズス会学校で学ぶ者が目指すべき人間像を、「四つの宝」を通してわかりやすく示されたのだと思います。

■ 上智福岡中学高等学校（2010年改称）

上智福岡中学高等学校の前身である泰星高校は、1932年に神学生の養成を目指して福岡教区の深堀司教により設立された。1946年に、司教は一般生徒の教育も行うため教育をマリア会に委ね、1949年に土地と建物もマリア会に譲った。マリア会は多くの努力を重ねたが、学校は生徒募集などに苦しんだ。司教は福岡の地にカトリック男子校の存続を強く望み、1969年に福岡教区が再び経営母体となった。

しかし、学校運営の困難な状況は続き、司教はイエズス会に学校経営を委ねたいと、当時の管区長ヨセフ・ピタウ神父に申し出た。イエズス会は慎重に検討し、1982年に、以前広島学院の校長であった大野正恒神父を校長として派遣した。そして、他の3校と同じく中高一貫の学校とするために、1984年に中学校を併設して、新たな出発を遂げた。この時、イエズス会は新たにイエズス会学校となった泰星学園に、校長だけでなく、他の三校で働く現役のイエズス会員を英語科教員や宗教科教員として派遣し、また、六甲学院で教頭として働いていた教員も教頭として派遣した。

2010年には上智大学と高大連携関係を結び、校名も「上智福岡中学高等学校」と改め、男女共学の学校として出発することになった。日本において、イエズス会学校が共学校を運営するのは初めてのことである。新しい校歌も製作され、作詞作曲したのは上智大学出身で、芥川賞作家であり、「千の風に乗って」で一世を風靡した新井満氏であった。

校 歌

はばたけソフィアの^{わし}鷺よ

作詞・作曲 新井 満

- | | |
|--|--|
| 1. 青空にはばたけ ソフィアの ^{わし} 鷺よ
虹の橋 ^{はし} こえて まなざし高く
この惑星 ^{ほし} の限りない平和のために
今こそ使命 はたすとき
Men and Women for Others, with Others
上智福岡 上智福岡
われらが母校 | 2. ^{あした} 明日へとはばたけ ソフィアの ^{わし} 鷺よ
^{やみ} 闇の空 ^{うら} こえて 勇気もやして
この惑星 ^{ほし} の美しいいのちのために
今こそ愛を歌うとき
Men and Women for Others, with Others
上智福岡 上智福岡
われらが母校 |
|--|--|

未来を担う若者たちへのメッセージ
For Others, with Others



上智福岡中学高等学校校長
大石 英雄

上智福岡中学高等学校では、卒業時の生徒の姿として「より大いなるものを知り 他者に奉仕し 世界の懸け橋となるリーダー」となることを掲げています。本校での生徒たちの学びは、何に通じるべきものなのか。それは、本校が独自に立ち上げた研究単位Studies for others (SFO) に示されます。SFOは、生徒自らが地球規模の環境問題や貧困問題を調べ、それらを解決するにあたって妨げとなっている様々な要因を考察するといったものです。そういった主体的な学びを通して、生徒たちは、すべての教科が将来「他者のために 他者とともに」を実践するために必要不可欠なものであると実感できていることでしょう。上智福岡で学んだ者は、探求心と広い視野を備えて、大いなる志を持って次のステージへと巣立ってくれることを期待しています。

■ コロキウム研修会（1981～85年）と『イエズス会教育の特徴』

1981年に、アメリカのイエズス会員ヴィンセント・ドゥミヌコ神父とそのスタッフが始めた「コロキウム」(Colloquim) という研修会が日本でも始まった。これは、聖イグナチオの霊性に基づく研修会であり、イエズス会教育をより深く知るためのものであった。ドゥミヌコ神父は、1986年にイエズス会教育国際委員会が公にした『イエズス会教育の特徴』をまとめる中心的な役割を果たした。この本は2年後には日本語訳も出版された。さらに1993年には、イエズス会教育の理念的なことではなく、聖イグナチオの霊性に学んだ具体的な教授方法として、“Ignatian Pedagogy” も公にされた。これは、日本の学校に適用するために、『ともに歩む』と題された抄訳版として翻訳されている。

このコロキウムとイエズス会教育を理解するための研修は、その後「イエズス会中等教育推進委員会」(Jesuit Secondary Education Committee :

JSEC) が設けられ、その委員会が「研修A」(若手教職員対象)と「研修B」(中堅教職員対象)を計画、立案、実施することによって引き継がれている。

■ 五法人の統合 (2016年)

2016年4月より、イエズス会を設立母体とする五つの学校法人(上智学院、栄光学園、六甲学院、広島学院、泰星学園)が合併し、新しい学校法人上智学院が発足した。

2011年2月、梶山義夫神父は管区長に就任するとすぐ、「イエズス会使徒職検討委員会」を立ち上げ、日本管区のすべての働きを再検討した。そして、年末には管区会議を開き、検討委員会の報告が検討された。その中には、今後四つの中学・高校には会員を派遣しないことが含まれていた。そのときから、中高をイエズス会学校として継続していくための方途が模索されるようになった。

こうした背景のもと、五つの学校法人の理事長たちは法人統合に関する勉強会を行い、その結果として、管区長に合併することが今後の日本管区における教育ミッションを遂行していくためにふさわしいと上申した。管区長は合併を具体的に進めるために準備委員会を設けるよう勧告し、五法人の理事長は、理事長自身と大学および中高から1名ずつ実務者をメンバーに加え、準備委員会を発足させた。そのような経緯を経て、文部科学省の認可を得、合併に至ったのである。

合併の目的は、大学においても中高においても、よりいっそうイエズス会教育を深め、浸透させていくことにある。またグローバルな世界が展開する状況の中で、グローバリゼーションがもたらす光と影を見分けながら、教育を通してイエズス会の現代的なミッションを遂行していくためでもある。この目的をよりいっそう果たしていくために、新しい学校法人上智学院のもとに「イエズス会教育推進センター」が設立された。

今後、イエズス会の教育ミッションが日本においてどのように展開されていくのか、なすべき課題はまだ多い。

(上智学院イエズス会教育推進センター 編)

現代を切り開くイエズス会教育

東ティモールにおけるフロンティアの教育プロジェクト ——聖イグナチオ学院と聖ジョアン・デ・ブリトー教育大学——

東ティモール・聖イグナチオ・デ・ロヨラ中学高等学校 浦 善 孝

2012年から、独立戦争で惨禍を被った東ティモール民主共和国（以下、「東ティモール」と表記）で、聖イグナチオ・デ・ロヨラ中学高等学校（Colégio de Santo Inácio de Loiola）と聖ジョアン・デ・ブリトー教育大学（Instituto de São João de Brito）の設立運営に携わるべく、上智大学の設立母体でもあるカトリック教会の男子修道会イエズス会より派遣されて現在に至っています。

1. 東ティモールにおける教育プロジェクトの歴史的背景

東ティモールはオーストラリア大陸の北、赤道よりも僅か南に位置し、面積は東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県を合わせた面積とほぼ同じ大きさ、人口約122万人（2016年）、気候は熱帯モンスーンの南洋の島国です。また人口の99%がキリスト教徒で、大部分はカトリックです。それまで一度も独立したことがなかった人びとが、1999年から国連東ティモール暫定行政（UNTAET）の統治期を経て、2002年になって初めて独立国家を打ち立て、

行政組織も、法律も、教育制度も、^{ゼロ}0から作り始めています。16世紀から、東ティモールはポルトガル本国から一番遠い植民地になりました。太平洋戦争中の3年半の日本占領期をはさんでポルトガルの実質的な植民地支配は1975年まで続きましたが、最終的にポルトガル政府は東ティモールを放棄し、同年11月フレテリン党が独立宣言をしました。サイゴン陥落と同じ年の1975年12月——日本では田中角栄第二次内閣の頃——、米国のフォード大統領とキッシンジャー国務長官がインドネシアを訪問しスハルト大統領と会談した翌日、インドネシア軍は現在の首都ディリに侵攻し、1976年に第27番目の州としてインドネシアは東ティモールを併合しました。その後も独立を目指した人びとの抵抗は続き、それを抑圧しようとするインドネシア軍のサンタ・クルス墓地虐殺事件（1991年）などをはじめとする殺戮は次第に国際社会の関心を集めるようになり、1996年に独立運動の指導者だったベロ司教とラモス・ホルタ氏がノーベル平和賞を受賞しました。これらを機にインドネシアによる東ティモールでの人権侵害や国際社会の政治的黙認が問題視されるようになり、国連の仲介により1999年インドネシアからの分離独立を諮る住民の直接投票が実施された結果、98.6%の投票率で78.5%の賛成を得て東ティモールの独立が決まりました。しかし、続くインドネシア撤退の際にも、インドネシア軍と統合支持派民兵によるさらなる虐殺破壊活動や強制的な西ティモールへの住民移住が続きました。結果的に、1976年以降、多くの難民と20万人近い死者・行方不明者が発生したと言われています。

独立10周年を迎えた2012年には同国を支えてきた国連も大部分が撤退し、人びとは自分たちで国づくりを進めていくという希望と自信を持ち始めました。それぞれの家族は犠牲者を悼みながらも新しく生活を立て直す明るさを持っています。街角もアジア諸国特有の活気を帯びてきました。ベビーブームも到来し、15歳以下の若者が人口全体の41.6%を占めています（2015年）。

東ティモールの教育制度は、独立の際に一旦完全に崩壊してしまいました。独立後、当時人口100万人に満たない小国がかつての占領国の言語、カリキュラム、教科書を破棄し、共通語のテトゥン語を含めてそれらを新たに作り始め、荒廃した教育施設を整備しつつ本国に引き上げたインドネシア人教員を

補うために教員養成も始めました。独立後16年を経た現在もその歩みは遅々としています。同国の純就学率は、小学校72.2%、中学校36.2%、高等学校33.0%に過ぎません（2015年）。

イエズス会東ティモール独立地区はこのような現状に鑑み、2013年1月、首都ディリから西約20kmに位置する半農半漁のリキサ県ウルメラ村に聖イグナチオ・デ・ロヨラ中学高等学校（以後「聖イグナチオ学院」と表記）を開校しました。また2016年1月、高等学校の教員養成を目的とする聖ジョアン・デ・ブリトー教育大学を開学しました。両校はイエズス会東アジア・太平洋地区協議会の支援を受けながら開校され、運営されてゆくことになっています。また、世界各地から15億円に及ぶ学校建設費のご寄付を、また年毎に学校運営費や奨学金、教科書、学校備品を購入するためのご寄付もいただいています。

もともと当地のイエズス会は、カトリック・ディリ大司教区の委託を受けてインドネシア統治時代より聖ヨゼフ学園高校を運営してきましたが、大司教区がイエズス会に同高校の大学への転換を求めたのを機に、中等教育の重要性を固持するイエズス会はこの学校の運営から手を引き、独自の中学高等学校・聖イグナチオ学院を設立しました。高等教育の前提である中等教育の充実が先決であるとイエズス会は判断したからです。事実、東ティモールを取り上げる世界銀行の研究でも、後発開発途上国では中等教育は等閑にされがちであることが指摘されています。その理由の一つとして、中等教育の教員養成は初等教育よりも困難であることが挙げられているので、東ティモールに聖イグナチオ学院と共に聖ジョアン・デ・ブリトー教育大学を設立したことは理に適っていると思われます。2014年1月、当時のイエズス会総長ニコラス神父は聖イグナチオ学院の中庭に立ち、「私たちの学校は、東ティモールが発展を始めるための準備を手伝うものです」と語りました。

2. 新しい学校づくり

■ (1) 学びたいすべての子どもたちに質の高い教育を

聖イグナチオ学院は2018年1月に開校6年目を迎え、中学1年生から高校3年生まで700名弱の男子・女子生徒が在学しています。開校当初から聖イグナチオ学院は、「貧富の隔たり無く、学びたいすべての子どもたちにより教育を提供できるきちんとした学校」の東ティモールにおけるパイロット・スクールになることを目指してきました。



六甲学院の故ブラザーメルシュが作った机が東ティモールで活躍

この目標は、質の高い教育を提供するとともに、包括的教育 (inclusive education) とユネスコを初めとする国連諸機関や世界銀行が提唱している「万人のための教育」(education for all)の理念を合わせて実践する試みです。

その目標を達成するために、十分な資質を身につけた教員に教壇に立ってもらおうとしています。20歳代後半で大学を卒業し教職に就いた新任教員は、独立前後の混乱期に教育を受け育ったためにより教育を受けた経験がありません。そのために、彼ら彼女らが教え始めた後、「教科の知識」「教授法」「カリキュラムの作り方」「シラバスや教案の書き方」「評価法」、そして「教員としての使命感や倫理観」「思春期の若者の心理」などを学べるように教員養成講座を催しています。また海外のイエズス会教育のセミナーなどに派遣して教員としての実力と自覚を身につけるチャンスを提供します。大学の就学期間を終了したけれども学士の学位を持たない教員には、それが取得できるように就業時間を優遇しています。

生徒たちに対しては、「すべての生徒に、すべての教科の教科書を貸与」できることを一番の目標として取り組んできましたが、開校6年目に入り中学校だけはこの目標を達成できました。政府教育文化省からは各教科当たり

生徒数の10～30%に当たる冊数が、数年に1度だけ支給されるに留まります。教科書は購入することができますが1冊10米ドルから25米ドルで、僅かの生徒たちだけが限られた教科の教科書を購入できるにすぎません。そのために、本校ではいただいたご寄付で教科書を購入し希望する生徒に貸し出しています。これにより生徒たちは、各自教科書を手にして、家庭学習もできるようになりました。さらに教育施設として、図書館と簡易体育館はすでに建設が完了しました。現在、数学教室・理科実験室棟の着工を待っていますし、音楽教室、美術教室、LL教室を整備してゆく青写真も持っています。

■ (2) 経済的サポートの「奨学金」

聖イグナチオ学院は学びたい子どもたちの就学を可能にするために、独自に資金を募り運営する奨学金制度を設けています。現在は主に日本のご協力者の方々からいただいた「聖イグナチオ学院基金」に加え、オーストラリアの企業やシンガポールの教会からいただいたご寄付を基に、生徒たちに奨学金を支給しています。2018年現在、在校生の10%にあたる70名が学費（学費、制服・体操服、諸経費込）全額免除の奨学生で、カバンや靴、私服登校時の洋服も補助しています。2019年には90名（13%）に奨学金を支給できる見込みですが、将来的には30%まで奨学生の比率を高めようと考えています。ただし、この30%という数字は、在校生の30%に奨学金を支給すれば達成できる単純な数字ではありません。なぜなら本校の奨学金システムは、生徒が学びたいと望み、入学試験をパスする学力、学校生活を続けたいという意味を備えていて、保護者も子どもを本校へ入学させたいけれども家庭の経済的理由により本校への入学が困難な生徒に奨学金を支給するシステムだからです。

■ (3) 学習サポートの「ウルメラ・プロジェクト」

学校所在地の村名にちなんだ「ウルメラ・プロジェクト」と称する取り組みを通して、聖イグナチオ学院は地域の貧しい家庭の子どもたちの就学を支援しています。2013年に開校しましたが、学校所在地の村からの入学者は期待したほど多くありませんでした。「よい学校を開校し、奨学金を提供す

ると宣伝すれば、子どもたちは喜んで学校にやってくるだろう」という思いは叶いませんでした。日曜日に教会に集まった人々に奨学金制度があることを説明し、入学試験を受けるように説きましたが、村からの受験者は伸び悩みました。一方、首都デリ市からの入学希望者は急増し、開校3年目には村からの入学者は3名に留まりました。聖イグナチオ学院が質の高い教育を提供しようとしているのを見てとった都市部の教育熱心な家庭が子どもたちを入試に臨ませ高得点を得て入学するようになったからです。このままだと聖イグナチオ学院は学校所在地の村から乖離してしまい、この教育プロジェクトの波に乗れない村人たちに焦燥感を与えるだけの教育施設になってしまう危険がありました。

そこで聖イグナチオ学院は、「ウルメラ・プロジェクト」と称する村の子どもたちを対象とした学習支援制度に乗り出しました。村からの入学者が少数に留まっているのは、貧困と共に、低学力、教育に対する無関心、諸手続きを踏むことに対する忌避等が原因であると見て取れました。そこで村の公立小学校で入試説明会を開き聖イグナチオ学院に入学を希望する小学6年生を集め、月曜日から金曜日まで毎日2時間、算数とポルトガル語を教える給食付きの無料進学塾を始めました。保護者に向けて説明会も催し、受験と入学手続きのプロセスと奨学金によるサポートもあることを説明します。また素朴に生活してきた人びとにとって社会の変化を見通すことは難しく、子どもたちが生きる将来は親の世代とは異なり教育が重要になることも説明します。そして、ウルメラ・プロジェクト参加者のために別途独自の合格基準も設け入試成績が一般入試の基準に達していなくても^{あた}能う限り入学を認めています。合格発表後も小学校を卒業するまで合格者を集めて補習を続け、入学後も中学1年生の間は放課後補習で学力の底上げを図ります。そうしながら、宿題やテストのために学習習慣も身につけるように指導しています。

このプロジェクトでは村の親たちのとの関わりも大切です。貧しい家庭といえども、次第に自分の子どもにより教育を受けさせたいと願うようになってゆきます。しかし、「どうやったら受験できるのか」「どうやったら奨学金をもらえるのか」というプロセスをなかなか納得できません。添付書類を村

役場からもらうことをためらい申請を放置し、提出期限間際に書類不備のまま学校を訪れます。背景にある親たちの非識字の現実も影響を与えていると思われます。そのために受験願書や、奨学金受給申請書を前にして戸惑います。子どもが親のサインの代筆をするのにたびたび接します。奮発してお父さんがサインを書いて、それを見た家族が喜ぶこともありました。だから家庭訪問をして信頼関係を築きます。子どもたちがよい教育を受けることを望む村の公立小学校の理解と協力もあります。ある年は、入学手続き金10米ドルを払えないので入学はしないという村の生徒が5人もいましたが、それを免除することを伝えると公立小学校の教頭先生がバイクの後ろに生徒たちを乗せて次々に手続きをさせにやってきました。こうした生徒たちの多くは、家族の中で初めてきちんとした教育を受ける子どもとなります。



断続的に政府が実施する給食はどんぶり一杯

このように、聖イグナチオ学院は学ぶことはなによりも子どもの権利であるとし、あらゆる社会階層に属する子どもたちを積極的に受け入れる包括的教育を文字通り実践しようとしています。それは、限られた入学定員の中で、これまで入学させることができると考えていた親たちが自分の子どもの席を他の家庭の子どもたちに譲ることも意味します。現に「旧来のイメージに沿ったよい学校」を目指したいという考えも根強くあります。奨学金を受けて入学してくる村の生徒は学力が低いので、ある教員は「このような生徒選抜基準は入試の合格者平均点全体を下げる。合格者最低点は、年毎に上昇しなければならない」と意見を述べます。また、当地では修道者自身、留学してよい教育を受けた当事者なのでよい学校は海外の有名なカトリック学校や大学のイメージと重なっていて、ある人は「貧しい人のことばかり言って」と言います。

3. 新しい学校の理念

東ティモールのような旧植民地から独立した国の中等教育は旧来の社会階層を含んだ社会構造を再生産する機能を果たしがちです。名声がある学校には、旧来からのエリート層の子弟が通うことになり、独立後はこれに新富裕層の子弟が加わり、特定の社会階層による「教育のプライベート化」を進めることがあるからです。そのような学校は、生徒たちの学校生活が家庭の経済的水準で均一化された集団となり学校の外にある社会の矛盾に気づかせなくさせてしまいます。だから聖イグナチオ学院は、キリスト教カトリックの精神と設立母体であるイエズス会のミッションを目に見える形で果たす、学校教育の公益性に鑑み公立学校でもなしえなかった新しい学校教育をここで行おうとしています。

2008年に開催されたイエズス会第35総会は、「世界に正しい関係を築くこと」「分断された世界に和解をもたらすこと」「真の人間らしさの回復のために働くこと」を現代のイエズス会の挑戦だとしました。続く2016年に開催されたイエズス会第36総会でも、「和解のために奉仕する任務」が強調され、その三つの側面として「神との和解」「人間同士の和解」「全被造物との和解（エコロジー）」が提示されています。すなわち、イエズス会は会の使徒職（ミッション）に関わる人びとに、「新たに正義と平和に奉仕するように」、また「貧しい人びとや疎外された人びとに仕え、平和を打ち立てるための奉仕」に自覚的に携わるように呼びかけました。

同じく、聖イグナチオ学院を含めたイエズス会学校と呼ばれる学校もカトリック教会に属する学校ですが、現代のカトリック学校は、特にすべての人びとが生きてゆくために必要な教育を受ける権利を保障することを第一の目標として掲げ、「一番弱い者に配慮する学校」であることが求められています。実際にこの目的を達成するために、カトリック教会は予てよりカトリック学校が「世界人権宣言」や「児童権利宣言」の実現のために努力し、また国際機関とも連携するように呼びかけてきました。

いうまでもなく学校は第一に生徒「一人ひとりを養育 (nurture)」する場であり、社会変革を目指す場ではないことも心得ています。イエズス会学校は「一人ひとりを大切にする教育 (魂の世話)」(cura personalis) や「マジス (さらに、もっと)」(magis)、「神のより大いなる栄光のために」(Ad Majorem Dei Gloriam)、「他者のために生きる人」(men and women for others) などの、自らの教育の特徴を大切にしてきました。そして近年は、4Csといわれる「良心の声に聞き従う人間」(Conscience)、「有能な人間」(Competence)、「慈しみ深い人間」(Compassion)、「愛と正義に献身できる人間」(Commitment) という徳を生徒たちが身につけることができるように心がけながら教育を行っています。こうして、「よい人は、互いに協力し合いながらさらにより社会を築いて行くことができる」だろうと、期待しています。

イエズス会は、これらの呼びかけを単なる掛け声だけに終わらせずに様々な社会的コンテキストのなかで実際に目に見える形で遂行してきました。教育分野を例に挙げると、米国では移民の子どもたちのための「クリスト・レイ高校」と「ナティビティー・スクール (中学校)」を設立してきましたし、南米では貧しい家庭の子どもたちの学校「フェ・イ・アレグリア」があります。クリスト・レイ高校についての研究は、同校に入学してくる移民の生徒はほぼ2年間学力が遅れており、決して有名大学に多数合格できるわけではないことが記されています。しかしながら、これまで高校を卒業し、大学に進むことが困難だった移民の子どもたちがそれを可能にしていることを評価しています。また世界銀行のフェ・イ・アレグリアの研究は、「よい教育とは何か」「よい学校とは何か」という問いに新たな評価基準を示し、万人のための教育の理念に基づき「誰が教育にアクセスできているか」「どれだけ生徒の学力を伸ばすことができたか」という視点から学校教育を見ています。したがって、フェ・イ・アレグリアの学力調査の平均点が他校を下回することは当然だとしています。世界銀行の同研究は続いて、「これまで教育にアクセスすることができなかった子どもたちが学ぶことができ、学力を伸ばしている」教育実践を指して、それが「キリスト教の信仰に基づいた学校の

存在理由」になっていると記しています。

4. 希望を伴った教育の実り

奨学金を受給している中には、街からやってくる生徒たちも含まれています。父親がインドネシア時代の軍人で、本国に帰ってしまった生徒。独立紛争時代にインドネシア派に加担したとのことで、父親が刑務所にいる生徒。実家が山奥で小学校にも通っていなかった子が親類を頼りに出てきて初めて小学校4年生に編入し、16歳で中学1年生として入学してきた生徒。今なお平均寿命が短いので父親が早世する生徒も多く、奨学金を申請してきます。また、奨学金を受給していなくとも、親が公務員、警察官、教員の家庭の生徒たちも多いですが、これらの職種も給与が低く、学費を借りたり、祖父祖母から援助を受けたりと、やりくりして子どもたちを本校に送っている家庭も少なくありません。そのために海外からの援助を頼りに、学費をできる限り低く抑えています。そして、豊かな家庭の子どもたちも間違いなくよい教育を受けることを必要としているので、聖イグナチオ学院は彼ら彼女らを歓迎しています。こうして様々な背景を持つ生徒たちが学校で勉学に専心し、共同生活をするを通して、生徒たちが真実を知り、何の利害関係にとらわれずに自由に何が正しいか判断できるように、そして互いに尊厳や自尊心、人間性を高め、思春期の友情を育むようにと願っています。

生徒たちの生活に目を向けて見ると、まず「勉学の動機づけ」と「卒業後の進路」の問題が立ちはだかります。全日制普通科（リベラルアーツ）の教科を後発開発途上国の生徒が学ぶ動機を見出してゆけるか。特に貧しい家庭からの生徒たちは卒業後、学力的に、経済的に、大学に進学できるだろうかという心配を抱えています。そして開校6年目を迎え中学1年生で入学してきた生徒たちも高校3年生になるにつれて、若者特有の生活指導上の問題も起こってきました。暴力（東ティモールでは特にマーシャル・アーツに関連し、それは政治的活動にも関わっています）、いじめ、盗難、そして恋愛関係などです。同時に東ティモールでも、親たちの夫婦関係が生徒の学校生活

に影響を与えていることにも気が付き始めました。

学年が進むにつれて街の生徒たちは村の生徒たちの家に泊まりに来るようになりますが、生徒たちは自分たちが属している社会階層の相違にも気づいてくるようです。私服通学日におしゃれをして登校する女子生徒と、いつも同じ洋服で登校する生徒たち。履く靴がなくて学校を休む生徒がいると聞くこともあります。昼食を食べていない生徒も見かけることがあります。スマートフォンのソーシャルメディアでコミュニケーションをとれる生徒たちと、旧式携帯電話すら持っていない生徒たち。家に電気さえ来ていない生徒たち。村からの奨学生の成績が伸び悩む中で、東ティモールでは相対的に裕福な家庭の生徒たちは英語教室に通い学力を伸ばしてゆきます。これも本校の中に見られる多様性ですが、それぞれの生徒がその相違をどのように受け止めているか知りたいところです。

感情や情緒も含めた人間の能力や資質は、人類平等に備わっているということに気づきました。日本の学校で15年間教鞭を取った後に東ティモールへ渡航し、ここでも教えていますが、何がよいか、何が悪いか、嬉しいか、悲しいかという感性は日本の生徒たちと同じです。そうであれば、数学や理科、英語などの教科を理解し学習する能力も同じように持ち合わせていて、きちんと勉強する機会があれば東ティモールの生徒も学力を身につけることができることを肌で感じています。こうやって学び知識が身につくことが楽しくて嬉しいことであることを知り、自分たちを大切にしてもらえれば、生徒たちは自己肯定感を育てることができます。2018年12月、第1期生が卒業してゆきましたが、彼ら彼女たちは、東ティモールにはよい大学がないので海外にまで眼を広げて将来をつかもうとしています。

5. 聖ジョアン・デ・ブリトー教育大学

2016年1月、ディリ市内に教室を借りて1期生23名の入学をもって聖ジョアン・デ・ブリトー教育大学は開学しました。同大学は高校教員を養成する4年制単科大学で、英語学科、ポルトガル語学科、宗教教育学科を開講して

現在に至っています。2018年5月には、聖イグナチオ学院の隣接地に独自の大学校舎竣工に至りました。現在開学3年目を迎え、約100名の学生が学んでいます。教科知識に秀で、理解し且つ思考することができ、教授法を身につけ、教師としての倫理観があり、リーダーシップを発揮できるプロとしての教員を養成することを目的としています。東ティモール政府はこのような教育大学設立の有用性を見てとり、聖ジョアン・デ・ブリトー教育大学に校地を提供しました。

学生に目を向けてみると、本学でも貧しい家庭からの学生が多く、在学生の50%がイエズス会と同教育大学の趣旨に賛同して個人的にご寄付をくださる方々からの奨学金を受けています。なぜなら、教員の社会的地位と給与が低いために、優秀で家庭が比較的裕福な学生にとって教員養成大学が第一希望先とはなり得ないからです。こうやって経済的に大学進学が困難な優秀な学生の就学を奨学金で支援していますが、このことはこの国の教育再建に間違いなくプラスになると思います。一方で、十分な中等教育を受けることができずに入學してきた学生に中学・高校段階の学力を身につけさせてから高等教育レベルの教育を行うという二重の教育を余儀なくされているのも事実です。さらに独立前後の混乱期に育った学生たちが、真摯に自分自身を見つめ、人の生き様を思い描くことができるように——「自分が将来に向かって生きること」「自分自身を愛すること」「教師の職業を愛すること」など——励ましています。

急務となっている資質を備えた教員の養成を行うために、カリキュラムや施設も可能な限り整えています。大学2年次からさっそく聖イグナチオ学院で授業参観や教育実習が始まります。学生たちは中高生時代に諸活動も経験したことがないので、これらも学ぶ機会を提供しています。学生たちにスポーツや文化活動を奨励し、聖イグナチオ学院のスポーツ大会や文化行事、生徒会活動や委員会活動、職員会議や保護者会、学校運営などにも身近に接してゆきます。そして優れた教授陣を迎え、図書館やコンピュータールーム、LL教室を備えました。将来的に当地でその必要性が指摘されている理科と数学の教員養成学科と、社会科学系や人文系の学部を設置することも考えら

れ始めています。そのためにアジア・太平洋地区のイエズス会諸大学（Association Jesuit College and University—Asia Pacific）との連携に期待しています。

終わりに——いのちをつなぐ、人との出会いへ向かうヒューマンなグローバリゼーション——

派遣された当初、戸惑いもありました。貧しい人は幸いである、義に飢え渴く人は幸いである、盗むな、殺すな、姦淫するな。聖書にあるこれらの言葉を司祭として語ったとしても、自分の人生のつらい体験や怒りの体験、それを乗り越えた体験を話したとしても、目の前にいる多くの人びとは独立戦争の混乱を生きのび、人びとが殺害されるのを目撃しています。20ドル払っていのちが助かり、20ドル払えずに殺された人を目撃したと語る人。人が人の首を切るのを見た人。これはつい20年前まで続いていました。今なお人びとは、どのように相手を赦し心底和解できるか苦しんでいます。でも学校で学んでいる生徒・学生は、次の世代を担い将来を切り開く若者たちです。したがって、苦難の歴史を学ぶ場であるとともに、学校は未来へ向かっての明るさや希望を育む場となることが望まれています。焼き畑でトウモロコシを植え、薪を売って素朴に生計を立ててきた人びとの生活を何処へ誘うのか。もしよい教育を受けることができれば、これまで排除されてきた豊かな生活を手に入れるための競争に参加することができるようになりますが、それがこの教育プロジェクトの目的なのだろうかと自問は続きます。東ティモールの人びとが将来に向けて必要としている「学校教育」とは何かということを探し、それをカリキュラム化し実際の教育現場で見える形にしてゆくこともこの教育プロジェクトの務めです。

東ティモールの学校への派遣の目的を「人間としての互いの存在と尊厳を大切にす」ヒューマンなグローバリゼーションのために働くことだと解すようになりました。実際にここで、人と人が同じ尊厳、ヒューマンティーを持っていて、相手を認め、認められて共に生きることを体験してきました。援助するというよりも、人間らしく生きることができるようにと互いに与え

合う相互方向の交わりです。このプロセスは、自分が真に幸せになりたいという憧れ、志の通りに生きたいという望みに関わる根源的な問いに対する回答でもあるような気がします。経済的グローバリズムとは異なるヒューマンなグローバリゼーションは、正義や美、喜びや愛といった倫理的、霊的な事柄、そして人と人との連帯を大切にする、民族や国境を越えた「いのちをつなぐ」活動です。それは、自分の心と体の枠を超えた憧れを持ち、他者の心と体の救いに関わる活動でもあります。このような仕事に関わり始めることは、霊的な飢え（spiritual hunger）をいやす自由を伴った自分自身が求めていた生き方へ向かうトランス・フォーメーションだったような気がします。

このようにして「自分たちが知っている学校教育のモデルを乗り越えて新しいものをつくる」ことは、「よい教育とは何か」「よい学校とは何か」の既成知への挑戦でもあり、一歩踏みだし社会に何か新しさを提供できる営みだと思います。東ティモールに平和な状態が戻り将来にわたる希望を紡ぐシンボルに、新しい二つの学校がなることを願っています。

これからのイエズス会教育： 課題と将来的なビジョンに対する期待

上智大学グローバル教育センター マイケル R・ポリート

はじめに：イエズス会教育——回顧と展望——

450年以上にわたってイエズス会教育が成功してきたのは、言うまでもなく、多くの人びとの勇気ある精力的な働きと祈りのおかげです。1548年にイタリアのメッシーナで最初のイエズス会学校が設立され、1556年にイグナチオ・デ・ロヨラが亡くなるまでに、ヨーロッパ全土に35のイエズス会学校が設立されました。その数が200年後には、ヨーロッパ、アジア、ラテンアメリカ全体で800以上に増え、史上最大の組織的な教育ネットワークが構築されるまでになりました。市場経済の台頭、人口構成の変化に直面する現代においては、イエズス会教育は整理されてきましたが、こうした今日の状況は困難でありながら、イエズス会教育を刷新していくためにはまたとないチャンスだともいえます。

第28代イエズス会総長ペドロ・アルベ神父（1907-1991）は、イエズス会教育の際立った特徴について、すべてのイエズス会学校はその特有のカリスマによって運営する責任を負っていると述べています。カリスマとはカトリック教会のカテキズムによると、教会の利益や人びとの幸福、世界の必要性のために、聖霊から授かった賜物のことです。しかし、カリスマを真に正しく生きるためには、何が求められているか、すなわち、賜物を通して何が伝えられようとしているのか、慈善を基準に測られるすべての人びとの幸福のためにそれをどのように実現すべきかを判断しなければなりません。ゆえに、識別には、グローバルな努力を統合するに十分な厳格さを維持しながら、それぞれの地域に適應されるに十分な柔軟性をもったビジョンが要求されま

す。イエズス会教育がその長い歴史の中で競争力をもって高い評価を得てきたのは、強固でありながらも柔軟なビジョンをもった教育ミッションが優れた人物たちによって現代に至るまで受け継がれてきたからなのです。

ミッションとは、強烈に感じた目的や志、または「上から（神から）」の激しい呼びかけと定義できるでしょう。この意味で、ミッションという言葉は、何かを行うために呼ばれるという意味での「召命」と密接に関係します。しかしもっと深く考えてみると、ミッションの語源であるラテン語の“mittere”は、「派遣する」という意味です。つまり、私たちは召命と派遣の両方の概念を、一つの言葉のうちに持つことになります。このことを理解することは大切です。つまり、カリスマとは「上から」吹き込まれる賜物であり、それは同時に「抗いがたいほどに」強く促されるものであり、自分自身の行動を支配しはじめるとなると特別な種類の「見る」(ビジョン)を可能にすることです。

ビジョンという言葉は、ラテン語の“videre”が語源で、何かを観察し把握する機能と同時に、世界のあり方を想像力と理性をもって説明する能力を意味します。後者の意味では、ビジョンとは現実に対する決定的な理解のあり方を示唆します。すなわち、ビジョンを手段に目的が生まれるのであり、それなくしては個人としても組織としても生き残る能力は大いに減じられていくということです。人間は、認識においても解釈においても、「見る」ことについて違っていることはよくあることです。人によって程度の異なる身体的限界を経験するように、感情と知性の違いは、その人の人生について考える能力および未来を描く能力に大きな影響を与えます。さらに、道徳的に「目が見えない」深刻な状態になると、無節操な行動の人生を送るようになり、大きな苦しみと恐ろしい破壊を引き起こします。一方、成熟したビジョンは他者への奉仕という極めて重要な仕事に従事するためのインスピレーションを吹き込みます。それによってアクション・プランが形づくられ、行動のパターンが確立されます。それが互いに高めあう価値観と態度を結びつけるからです。そこで、イエズス会はよく「私たちの行動様式」と語るのです。

イエズス会教育の遺産は、明確なキリスト教的世界観としてのイグナチオのビジョンから始まります。ロバート・バロン司教は次のように述べています。「キリスト教とは、何よりも、もの事の見方です。キリスト教的生活のすべてはビジョンの変容から流れ出て、巡り回るのです」。イグナチオは、彼自身のビジョンの変容によって、すべてのもののなかに神を見いだせるということを教わりました。神は人間存在の中心にあるからです。その中心から伝えられる他のものはすべて、一人ひとりの心のなかで、神によって創造され、神に人を近づけるために用いられるものだと理解されました。この受肉的な霊性によって、イグナチオは教育の分野に人を神へと近づける大いなる機会を見出したのです。メッシーナにおける最初のイエズス会学校の成功は、ほかにも学校の設立を求める緊急性を帯びた訴えにつながり、神がイエズス会というこの小さな男性集団に呼びかけ、16世紀という時代に、そのカリスマを適応させるように導いているということを正しく識別した証となったのです。それ以来教育事業は、すべては「神のより大いなる栄光のために」(Ad Maiorem Dei Gloriam)に、カトリック教会とカトリック信仰を広める福音宣教として、急速にイエズス会の主要な活動となっていきました。

イエズス会高等教育

2010年、200近い世界中のイエズス会高等教育機関が集った会合で、イエズス会の第30代総長アドルフォ・ニコラス神父はこう問いかけました。「このグローバル化した世界の光と闇のなかで、これらすべての大学を運営し続けることが、依然として教会のミッションと世界のニーズに応えるための最良の方法なのか、または最良の方法であるためにはどうしたらよいのか。あるいは、質問はこうあるべきかもしれません。もし、今日の世界にイエズス会を再創立することになったら、そのとき、何を強調しどのような方向性をもった大学を運営するでしょうか」。

この問いは、グローバル化がもたらす「急激な相互依存」がイエズス会教育にとって、とくにそのカレッジや総合大学にとって、新たな根本的なチャ

レンジを生み出したという多くの人びとの思いを反映し、再創造を求めるものです。国際金融や貿易、技術、そして世界各地への移動などを通じて、人びとのつながりは今まで例がなかったほどに広がり、カリキュラムから学生の在籍者数、そして高等教育機関の経済的継続性に至るまで、すべてに影響を与えています。加えて、表面的な自己理解によって助長される“identity politics”（アイデンティティを共有する人びとの政治的な活動）、並びに好戦的な形の世俗主義及び宗教原理主義の台頭によって、真理追求のための対話に貢献している知的なコミュニティとしての大学の社会組織は歪められています。イエズス会教育の伝統およびイエズス会の国際的かつ多文化的な教育者ネットワークの測りしれない可能性を最大限に生かす方法は、このような危機を乗り越えるにあたり、まずは決定的な問題から想像力をもって取り組む必要があります。



アテネオ・デ・マニラ大学



ジョージタウン大学

重大な課題：費用・使命・養成

今日のイエズス会高等教育がどのようなチャレンジに直面しているのかについては、大学運営にかかる費用、果たすべきミッション、そして学生の養成などの重要課題を、将来の発展のために決定的なものとして優先するということが共通に理解されているといえるでしょう。誰がイエズス会教育を受けることができるのか、学生とその家族に対してどれだけの財政的費用がか

かるのか、イエズス会教育のミッションや宗教的ビジョンの使徒的なあり方に具現化されるような伝統を継続していく能力が経営上層部に備わっているかどうか、そして多元的で相互につながった、技術的に進展したグローバル社会において、学生をいかにして倫理的、知的に養成していくかという問いが議論の中心となっています。一つの問題を解決しようとすれば他方の問題の解決の妨げとなり、それゆえに、それぞれを切り離して完全に理解することもできないが、このような長さや形式の論考では総合的に分析することもできません。そこで、私は、学生の養成という重大な問題に焦点を当てます。なぜなら、ニコラス神父の「私たちの学生はどのような人になるのか、どんな価値観をもつのか、そして彼らが後の人生と仕事において何を成すのか」という言葉に見られる、グローバルコンピテンシー、そして、人間の健全な将来のための人材育成という問いに答えるものだからです。

養 成

「養成」は、イエズス会教育の内容とその結果の問題に関わるものです。つまり、重要な課題として養成の重要性を理解しようとすることによって、自由民主主義の社会内における知的、政治的、経済的、社会的成長といった高等教育の実践的な目的を追求することになるのです。イエズス会教育においては、学生一人ひとりの倫理的、知的養成は、カトリック教会の宣教やイエス・キリストの福音を証するための手段として優先されます。イエズス会教育は人文科学の推進について特別な責任を負っています。というのも、「洗練された語り」「*eloquentia perfecta*」こそが「イグナチオ的教授法」「*Ignatian pedagogy*」と、人格全体を大切にするイエズス会教育のミッションの背後にある根本的な確信だからです。ひとりの人間の人格的な成熟、知的、倫理的、霊的な発達（すなわち、「人格への配慮」*cura personalis*）にコミットすることを通して、カトリック教会、そして、その延長線上のイエズス会教育は、信仰と理性の統一、人と文化の対話の促進、社会正義への関心を証するのです。もっと根本的に言えば、このようなしっかりした視点が人間の

尊厳に結びついた人生の聖なる刻印を強調するカトリック教会への注目を呼び起こすのです。社会的な側面、つまり家族と地域共同体の必要性、また、人間が社会およびお互いに対して担う責任を無視することなく、カトリック教会が宣伝しているのは、人間の人格が犯すことのできないかけがえない性質は、倫理観及び社会における高等教育の役割を含む広義での社会善を模索する上でその基礎を成すということです。カトリック教会の社会教説のなかで十分に表現されている「貧しい人びとのための優先的選択」や「真の人間の成長」といったテーマは、自己を理解し、自制心を持ち、自分自身のあり方を自ら決定できる人格としての各個人のユニークで無二の性格のなかにこの確信を捉えます。それゆえに、イエズス会の高等教育の成果は神の似姿である生物としての自己超越のための知的、倫理的能力をもつ人格にそれぞれ成熟することを出発点とし、究極的で超自然的な宿命に向かわなければなりません。学生の養成に心を配るということはその結末が彼ら自身、そして彼らがどのような人格に成熟するかにあるため、カトリック教会が言う「包括的な教育」(全人教育)“integral education”の中心的な原則です。教皇庁区義と平和評議会による『教会の社会教説綱要』のなかで強調される人格とは、経済的、社会的、政治的なプロジェクトを実行するための手段であってはなりません。家庭という最初の共同体から始まる教育は、人間の種々の発達段階に沿ってカトリックの教育機関によって進められていき、それゆえに、教会が考える、学生一人ひとりが責任をもって自覚するよう指導することを目指しています。

結果として、イエズス会教育における重大な課題としての学生の養成は、広義において過去数十年の間に世界各地で顕著であった少なくとも二つの重大な変化に関連しています。その変化の一つは、多くの社会において世論の感情が、真理を相対化し、知識に対する先験的な主張の有効性を否定するような共生や多元性の在り方に向かうラディカルな変化で、それはイエズス会の大学のキャンパスに衝撃を与えてきました。人間人格を支配という伝統的な考え方の正当性が失われ、多くの社会で共有されたマナーリズムや、行動規範が大幅に疑問視され、社会的な結束が損なわれます。二つ目の変化は、

一世紀前には考えられもしなかったほどの文明や種としての人類の存続に対する脅威の高まりが、環境破壊の急速化と範囲の広がり、そして大量破壊兵器とその技術の進歩と拡散により、深刻な可能性となっているということです。これらの問題に取り組むイエズス会高等教育は、グローバルに勃発し広がっている文化をめぐる争いの渦中にあります。こうした対立の例をいくつか挙げると、平和で暴力のない生活のために必要とされる人類学上、倫理上の基礎、共通善のために設立された金融システムによってどのような基準に基づいて資源と富が管理され配分されるのか、そして経済政策が環境と公衆衛生にどのような影響を及ぼしているのかといった議論を呼んでいます。

他者のために、他者とともに生きる

“Men and Women for others, with others”

一つの論考の中でこれらの議論におけるすべての問題や側面について徹底的に分析することは不可能です。しかし、私は、今後数十年にわたってイエズス会教育の内容と質に自然に関わっていると強く感じる二つの重大な課題について考えたいと思います。イエズス会高等教育は「他者のために、他者とともに生きる人間」“men and women for others, with others”の養成というミッションを遂行しようとするならば、イエズス会大学は、その専攻や授業科目を通して、環境の持続可能性と地球生態系が供給する自然資本の保全のテーマや人間集団におけるトラウマ的ストレスからの心理的・社会的回復のテーマに取り組まなければなりません。平和的に共存するためには、次世代の市民に対して、環境保護と資源の保全の原則、そして生理機能を安定させ認知行動を増進させるライフスタイルの選択を含む健全な精神衛生の両方について教育することから始める必要があります。これら二つの領域はいずれも人びと、集団、国家間での利他的な行動と協力を劇的に促進させる可能性を秘めています。どちらの教育領域も包括的な人間の成長のために不可欠であり、ゆえにキリスト教的なヒューマニズムのビジョンと使徒的なミッションを考えると、いずれも未来のイエズス会教育において中心的な位置に

捉えられるべきです。

包括的“integral”な人間の成長

ここ数年、カトリック教会は「包括的（全人的）な人間の成長」という総合的な考え方に基づき、人間社会の繁栄に対する社会的懸念について積極的に発言するようになりました。これは、教皇パウロ6世が1967年の回勅『諸国民の進歩』のなかで一人ひとりの人格、共同体、そして人類全体の真の完全なる発展として提唱され、教皇ヨハネ・パウロ2世や教皇ベネディクト16世に受け継がれました。ヨハネ・パウロ2世の回勅『真の開発とは』*Sollicitudo Rei Socialis*、ベネディクト16世の回勅『真理に根ざした愛』*Caritas in Veritate*において、両教皇は、人間の成長、そして感情的・精神的トラウマや機能不全を引き起こす行動を含む人間による様々な形態の暴力からの解放に関連した、人間と環境の関係性から引き出される義務について述べています。さらに最近では、教皇フランシスコは、二つ目の回勅『ラウダート・シーとともに暮らす家を大切に―』のなかで、自然環境と、現代社会における様々な暴力の形態についての懸念を中心的なメッセージとし、世間の関心を、特にカトリック信者にとって新たなレベルに引き上げています。

「人間生態学」と自然環境を明確に関連づけたベネディクト16世の『真理に根ざした愛』での考えを発展させ、教皇フランシスコは「包括的な生態学」について述べています。用語を変更した理由は不明ですが、「包括的」と「生態系」という言葉をつなげることによって、教皇フランシスコは、より健全な地球のための生存システムとしての生命の相互接続性と相互依存性を強調したかのように思えます。教皇は、「生態系の間そして様々な範囲の社会的相互作用の間には相互関係が存在する」と述べ、その結果、「全体は部分よりも大きい」ことを再び示しています。パウロ6世、ヨハネ・パウロ2世、ベネディクト16世と同様に、教皇フランシスコのメッセージは、「正義」と「共通善」を他者のために生きる人間の養成の中心とみなす人生に対する倫理観を要求する包括的（全人的な）人間の成長を扱ったものです。行動の倫

理規範としての正義と共通善は、すべての障壁とあらゆる形態の暴力を人間の生活から取り除こうとしています。というのも、人間の繁栄はすべての人間にとって基本的な権利で、その権利は生活を可能にする生態系にも及ぶからです。イエズス会高等教育は、学生の知的・社会的・霊的養成を基本的な要素としてカリキュラムに環境の持続可能性と認知科学を含める教育のパラダイムを示すことに全力を傾けようとする試みなしに提供することはできません。こうした学びの領域は、今日極めて重大な意味で、正義と共通善に関わるものです。もしもカトリック教会が世界に対して「愛の文明」の理想を示すならば、イエズス会のカレッジおよび総合大学は、地球に関する最新の知識とカトリック的な倫理の伝統に即した人間の心を学生に提供することができる、新たな一般教育的な学びの核心を開発する責任をもっています。

イエズス会教育を導く二つの倫理基準

先ほど触れた2009年の回勅『真理に根ざした愛』のなかで、ベネディクト16世は、包括的な人間の成長を分析するにあたって、その基礎は正義と共通善を判断基準にしていると言っています。すなわち、私たちが倫理的判断を下す際の規範として、正義と共通善を正しく理解することは、真理と愛の実践的な表現としての行動力を導くうえで重要なものなのです。別の言い方をすれば、もし自分の選択が公平性と愛の両方を表すものであるかどうかを見極めなければ、何が正しく、したがって倫理的であるのかを決断することができないということです。私たちは様々な正義と善について正しく理解する必要があります。

■ 正義の基準

正義は愛と真理に固有のものであり、切り離すことはできません。ベネディクト16世は正義にとって愛は不可欠な要素であると述べています。愛の実践的な表現として、正義のための行動は個人と集団の正当な権利を認識し、尊重します。そして、義務の遂行、自分と同様に社会に生きる他者の幸福を守

り、促進するように努めます。正義とは他者を愛する第一の段階、あるいは「もっとも大切な方法」です。なぜなら、正義は公正さに関心をもつ人間を、他者が存在すること自体によって必要としているものを与えるよう導くからです。さらに正義は、公平性のより基本的な要求が満たされると、無償、慈悲、交わりの関係を促進することによってさらなる愛の道を開きます。

■ 共通善の基準

ベネディクト16世はさらに、いかなる人間は孤立した存在ではないので、共通善は正義のために考えるべき問題だと述べています。人びとは互いに関係をもち、社会を構成する家族とコミュニティを形成します。愛と真理の実践的表現としての「私たち全員の」善を追求することで、一人ひとりの人間が正義と平和を基盤に社会を築くことに貢献します。文明の表現としての法的・文化的・公民的な機関を通じて行動することで、共通善は結果的に「召命的」な側面を帯びることになります。すなわち、共通善を追求することは人びとを媒介する組織や機関を適切に機能させていくことに関心を示すことなのです。ゆえに、専門的職業（例えば、教育分野の専門職）は、正義を行い、共通善を世界にもたすのに重要な手段であり、ベネディクト16世は「これほど優れて効果的なものはない」と述べています。

カトリック教会の知的伝統：世界を私たちの教室に

人間の努力のあらゆる領域に対して探求心をもって開かれたカトリック教会の知的伝統に属しているイエズス会教育は、非常に多文化的であり包括的です。なぜなら、行動の基準が正義と共通善にあるからです。カトリック教会は普遍的である（カトリックとは普遍的及び全体への関心という意味）ため、異なる国や民族どうしの対話、そして信仰と理性は経験に対する理解を相互に促進するものであるという信念を広めることを望んでいます。したがって、多様な宗教的・社会的背景をもった学生に奉仕するなかで、イエズス会教育は全体性と統一のために努力する高等教育の伝統の一部なのです。

聖イグナチオ・ロヨラの霊的な発展は「すべてのもののうちに神を見いだす」という深い洞察と確信を与えます。イエズス会の歴史家ジョン・オマリーが述べたように、この信仰のビジョンは、16世紀が教育を求めていたという歴史的状况にあって、神に奉仕する方法としての教育という方向性を新しく創立された修道会であったイエズス会に与えたのです。社会的機関としての学校は人びとの知的、倫理的成長を手助けする手段として、そして世俗的社会においても宗教的社会においても影響力のある地位に就く準備の手段として強力なものであるため、人間を人格として捉えるカトリック的な確信に基づく教育は世界を再形成することができるかと主張されたのです。信仰への奉仕において当然の帰結として、イエズス会教育は、初等教育機関、そしてイグナチオの時代にはボローニャ、パリ、オックスフォードといった最初の大学に発展していた高等教育機関の出発点である「司教座聖堂付学校」に遡る、数世紀にわたる学校伝統に根ざして発展しました。教育機関としての大学は、「教会のこころ」“*ex corde ecclesiae*”とその知的伝統から生まれました。カトリック信仰への奉仕において、現代のイエズス会大学は世界中でこの高等教育の歴史を引き継いでおり、真理と正義の促進を探究する、根源的に広がりを持ち、統一的で、建設的な価値観と霊性を共有する共同体なのです。

平和な世界を守り、築く

教育省によると、今日の課題は、カトリック的な教育ビジョンに対する「勇氣ある革新的な忠実」です。これは、特定の考え方や行動の様式の無差別的な受容に基づく相対主義と文化的な折衷主義によってあらゆる視点において脅威にさらされています。数年先にイエズス会教育が直面するいくつかのより重大な問題について、私はすでに示しました。それと同様に強調したいことは、イエズス会の高等教育機関に通う学生たちの知的・倫理的な養成の重要性です。というのも、彼らこそが人類が現在対峙する複雑で喫緊の脅威に対処することを彼らの仕事や私生活において余儀なくされるからです。高等教育の発展に対するイエズス会のアプローチは、人格と環境に向けられた正

義と共通善の考察を当然に含む包括的な人間の成長にコミットしていることを踏まえ、すべての学生を極めて重要な二つの学びの領域において教育するという協調的な努力を明確に示さなければなりません。その学習領域とは、環境保全と保護に重きを置いた持続可能な開発と、個人のみならず人間の集団が受ける、暴力、攻撃、依存、機能不全、行動障害の循環を引き起こすトラウマ的なストレスの影響です。私はこれらの学習領域の専門家ではないので、こうした分野の専門家が現在共通に知り、受け入れていることを頼って指摘することしかできません。

持続可能な開発のための教育

人間生活の未来が直面する中心的な課題である持続可能な開発は、自然環境の保護も含み、教育を受けた世界中の次世代の人びとによって理解され、受け入れられる必要があります。著名な経済学者であり、コロンビア大学で地球研究所所長、および医療政策経営学科の教授を務めるジェフリー・サックスは、今日の世界経済は所得配分において著しく不平等であるだけでなく、地球上の人間生活の自然の基盤を大きく脅かすものであるとはっきりと言っています。食料、水、安定した気候、きれいな空気（最新の研究では大気汚染は認知能力を害することが示唆されています！）、太陽放射からの大気の保護、生存のために必要な物質的資源などの「環境サービス」に対する人間の依存は不可欠なもので、システム科学における知的または分析的追求としての持続可能な開発の分野は、緊急の倫理的問題、すなわち規範的側面も含んでいます。経済、社会、環境、そして統治の間のつながりは、カトリック教会の社会教説においても広く知られているテーマである、生命の相互接続性の深さを強調しています。さらに、接続性と共依存性は「数世代にまたがる」ものです。自然資源の相乗的管理の方向に動くことに対する抵抗は、現在および次の世代のニーズを脅威にさらしています。責務と正義は時を越えて広がります。今日資源を無駄にし、世界を汚染すれば、罪と悪に形式的にも物質的にも手を貸すことになり、それを未来の人びとが耐えなければなら

らなくなります。したがって、持続可能な開発と環境保護の分析的側面、規範的側面の両方によって、すべてのイエズス会カレッジや総合大学（そして高等学校）は、教えることを通じて悪業について倫理的にとがめられるべきことのないよう抵抗する重大な責任を負っていることを知らされるべきです。サックス博士によると、社会混乱と生態系の破壊は同時に訪れます。教皇フランシスコは、相互に帰属しあうという基本的な意識は、人類の刷新につながる新しい信念、態度、生活の形の発展を可能にすると述べています。イエズス会教育が重要なはじめの一步を踏み出したことは称賛に値します。「世界イエズス会教育イニシアチブ」“Global Jesuit Education Initiatives”は、「地球を治す」“Healing Earth”という無料でアクセス可能な環境科学に関するオンラインの教科書を作成した、シカゴのロヨラ大学が支援する「国際イエズス会環境プロジェクト」“International Jesuit Ecology Project”を含みます。「地球を治す」は、科学的・霊的・倫理的な総合的な視点で生態学的な課題に取り組むものです。さらに、環境研究を行う重要な専攻と学科がイエズス会のカレッジや総合大学で設けられています。しかし、この分野を教育のあらゆるレベルに統合するためにはまだまだやらなければならないことが残っています。

トラウマ的ストレスの変化

認知科学の各分野における最新の知見によると、身体と脳は共通の相互作用システムを構成しているそうです。したがって、トラウマ的ストレスの心理学上の影響は生理学的成長や脳と身体を含む人体全体の機能に及び、人間の学習能力や、病気や疫病を治す能力、感情をコントロールする能力、論理的な思考能力、そして社会的に責任ある結果に向けて行動を支配する能力を損ないます。実際、相互の結びつきと信頼を基盤とした長期間にわたる関係を築く際に根本的に必要な、個人の喜びと親密性のための能力は相当に危うくなります。さらに、他者と協力する能力の欠如は、自己や社会に対する慢性的な消極的で反社会的な感情として現れます。これは、全人的な成長を妨

げる心理生理学的状態です。問題の複雑さによりトラウマ的ストレスが社会に与える影響に関する世界レベルの統計は確かめるのが難しいですが、著名な精神科医で心的外傷後ストレス障害（PTSD）の専門家であるベッセル・ヴァン・デア・コークは、自身やほかの研究者による30年以上にわたる画期的な研究のなかで、深刻な公衆衛生危機を指摘しています。一般的に信じられていることに反して、幼児期または青年期に、身体的・性的虐待や身体的・精神的ネグレクト、家庭崩壊などの悪い人生経験をした人は、その影響から「脱却」することはなく、むしろ、大人になってからの人生でもトラウマを抱き続けます。大人にとってさえ、戦争での戦闘や、自然災害や暴行などの、トラウマを引き起こすような特異な事件の影響は、長期にわたって危険性の高い行動や重大な健康問題など、有害な形で現れ、平和的で国際的な共存を築く試みを妨げています。認知脳科学に関連する分野における精神医療に関する発見に注意を払うことは、教育分野のすべてのレベルにおいて広く支持されるべきです。感情的知性に基づく対人関係や集団力学における素質はビジネスでの成功において極めて重要なものとして認識されています。教育機関を始めとして、個人やその家族、社会の生活の質に対してトラウマが及ぼす影響であると私たちが今や分かっているものについては、公的なレベルでも同程度の支持が与えられるべきです。社会的正義とイエス・キリストの福音への貢献を公約していることを踏まえると、イエズス会高等教育は正面からこの問題に取り組む義務があります。ヴァン・デア・コークは彼の重要な著作である『身体はトラウマを記録する一脳・心・体のつながりと回復のための手法』のなかで、「トラウマはさらなるトラウマを引き起こし、傷ついた人びとはほかの人びとを傷つけます」と述べています。

真正性の原則

最後の考察は、学生の成長にとって重要だと認識されている、知的に、そして倫理的に（上述したような）学術的なテーマを追求する合理的な枠組みの深刻な必要性を認識することでしょう。イエズス会のバーナード・ロナガ

ン神父は20世紀における最も優れた思想家の一人で、哲学者、神学者、そして経済学者として、彼は聖トマス・アクィナスの足跡を追いながら、自然科学、歴史批判、古典的な神学理論を含む多岐にわたる知識分野の間の対話を可能にする共通の基盤を追求しました。現代世界が断片的になったのは、だんだんと高まっていく偶然性の意識から生じた規範性の欠如によります。時間と場所は、人間の人格をも含めた現象を知的に、確実性をもって把握しようとする能力に影響します。真理と倫理性についてロナガンの思想や現代の諸文化のラディカルな主観主義を広めた哲学の進展に関する広範な議論に踏み込むことはせずに、私はイエズス会高等教育のために、コアカリキュラムや開講する授業科目の決定を含む、大学のキャンパスでの多くの思考を息詰まらせてしまう相対主義を越えて進み始めうる方法の一つ示したいと思います。ロナガンにとって、生命の偶然の事象において何が規範的かを見出す鍵は、「自己充当」“self-appropriation”です。「自己充当」という言葉によってロナガンが意味したのは、意識するというすべての行為において、自己および他者の現実をますます意識するようになることに前向きになるための多大な努力です。それを実行するということは、より確実な人生を積極的に生きること、真正性は、洞察と自己超越の必要条件となります。すなわち、自分自身と世界の善のために知的に、倫理的に、靈的に成長することなのです。真正に行動せよという原則は、経験においては注意深くあること、理解においては知的であること、判断においては理性的であること、愛においては責任をもつことなのです。思考と識別のカテゴリーとしての個人は、存在の偶然性と人間の有限性に内在する限界にもかかわらず、これらの超越的な原則を思い起こすことによって、知識、真理、そして善により近づけるような生き方をする助けを得ることができます。私は、経験し、理解し、判断し、愛することを、知識、真理、善の欲求と一致するよう意識的に取り組むとき、複雑さと限界の重みに押し潰されるのではなく、くじけずに前向きに努力する謙虚さによって、私自身を新しいレベルの全体性、治癒、地球の健康に向けて動かされることを許しているのです。罪の障壁に直面しつつも、自由という賜物を責任をもって行使することによって、イエス・キリストに倣って

生きることにコミットすることを求めるイエズス会教育の伝統は、真正性を求めます。ロナガンのカテゴリーを賢明に用いることによってこの伝統的枠組みを再び強調することは、イエズス会大学のネットワーク全体にわたって、そして、カトリックイエズス会の宗教的な訓練を受ける機会に恵まれてこなかった、あるいはほかの信仰的な伝統を背景にもつ大学の経営層や教員の間において、イエズス会が理解と合意を形成するにもふさわしい方法だと考えます。究極的には、自然と宇宙は知ることができる（すべての科学の前提）という事実は、外見を越えた物質の領域を認識する可能性を否定する言語学、形而上学、そして認識論による懐疑論を越えることについて、人間に希望を与えるでしょう。そして拡大によって相対主義を越えていく中で、世界を考え出し、作り出した、無限で創造的な神の心について説得力をもって話す道が開けるでしょう。

未来への希望

イエズス会高等教育は現在大きな困難に直面しており、それらの克服があまりにも困難であるがために、霊的な刷新と使徒的な成長の可能性を秘めています。危機が起こるごとに、変化の機会が訪れ、したがってよりよい善を実現する潜在的可能性があります。世界では、以前は距離があった様々な社会との間で急速な相互作用が増えているので、世界を違った信仰や歴史の視点で経験している他者から学ぶ機会が現れます。しかし、これはキリスト教カトリックの信仰において大切にされている信念を骨抜きにしてはならず、間違った包摂性と多文化性をイエズス会大学のキャンパスで実現する方法として真理と倫理的善を相対化する表面的な機会につながってはなりません。ニコラス神父は、表面的なグローバル化はイエズス会教育の伝統とカトリックの信仰とは正反対だと、はっきりと述べました。どの宗教も排他的な主張をします。信仰と不信仰、善と悪、現実の本質と人間の本質を区別し、差別化することは真理の本質です。しかし教育のコミュニティとして、すべてのイエズス会カレッジと大学は生活を分かち合う場であり、すべての人に対し

て斬新な礼節と会話の場なのです。包括的な人間の成長と平和な共存に向けての小さなステップそして、カトリック教会の奉仕の務めとしてのアイデンティティを失うことなく、よりよい理解と統合へと向かう旅を、共同体全体がともに探し求めています。イエズス会の高等教育に貢献してきた多くの人がびとによる努力はすべて、かつても今も、聖職者によるものも、信徒によるものも、さらには、「マジス」“magis”にコミットして、他者のための奉仕に向けて自分に与えられた賜物と才能のできる限りの発展を実現させようとする学生たちによってなされたすべての働きも、神をもっとも喜ばせる捧げ物です。カトリック教会のなかで、イエズス会教育を含めた多くの奉仕の務めのなかで、識別と刷新が要求される時代において、カリスマとビジョンを共有し、使徒的ミッションを帯びた仲間として、私たちの心に聖イグナチオの“*Ite, Inflammate Omnia*”、すなわち、「行って、すべてのものに火をつける」という言葉を心に刻みましょう。

(上智学院 イエズス会教育推進センター 訳)

第5章

今日のイエズス会高等教育への挑戦

——深みのある、普遍的な、学識ある奉仕職をめざして——

イエズス会前総長 アドルフォ・ニコラス S.J.

2010年4月23日 メキシコ シティーにて

イエズス会高等教育とその将来に向けての重要性を共に考えるために、イエズス会の名の下に参集したほぼ200の高等教育機関の経営と管理に携わる皆さんと、この朝を迎えられたことは本当に嬉しいことです。

さらに、イエズス会のミッションと活動に協働してくださる方々、そして、イエズス会高等教育に携わる会員および友人たち、また参加して下さった学生の皆さんにもご挨拶できるのも喜びです。

言葉を簡潔にするために、この会議において幅広い意味での高等教育機関に言及する際、私は「大学」と表現します。この幅の広さは特別な技術のための研究センターから大小のカレッジ、そして多くの学部をもつ総合大学をも包括するものです。

私は総長に就任してから2年間、多くのイエズス会員たち、そしてその協働者たちと出会うために世界各地を巡り、そのたびにローマのイエズス会本部の高みからではなくて、耳を傾け学びたいと強く語ってきました。そして今回、イエズス会高等教育についてもこれと同じ対話の精神をもって臨みました。昨日、皆さん方の地域特有の挑戦や三つの最先端挑戦についての討議を聴かせていただき、すでに皆さんが教皇ヨハネ・パウロ2世が使徒憲章『カトリック大学において』*Ex Corde Ecclesiae*で明確にされ



た「深刻な現代の課題」について取り組まれていることを理解しました。その取り組みは最良のカトリック教会とイエズス会教育を特徴づける思想と想像力、そして倫理的情熱、さらには霊的な確信によって実行されているものです。

ですから、今朝私がかち合おうとすることは、イエズス会高等教育の将来について、これからも絶えずより深い会話がもたれることを期待して私の見方を付け加えるものです。私の経験において、大学人、特に学長たちは、イエズス会高等教育に関する彼らの考え方を共有することにためらいはなく、したがって私は、皆さんが、重要な課題に対して考慮し続けるなかで、その討議が活気があり洞察に富んだものになることを確信しています。

私たちの会議の『思いやりと公正さのある持続可能な世界の将来を形成するイエズス会高等教育のネットワークづくりについて』というテーマは大膽な提案を呼び起こすこととなります。それは、今日私たちが将来を形成することに手を貸す絶好の機会を得ていることを示し、さらに、このネットワークづくりは、私たちの教育機関だけでなく、世界の将来の形成を実現する方法なのです。近年しばしば使われる「ネットワークづくり」という言葉は、実際私たちが生きる「新世界」において典型的に使われ、教皇ベネディクト16世も2009年の回勅『真理に根ざした愛』 *Caritas in Veritate* の中で、その世界の「新たに主要な特徴は、グローバリゼーションとしてよく知られる世界規模の相互依存の劇的増加である」と表現しています。

イエズス会第35総会も、世界の理解と私たちのミッションの識別のための新たな文脈として、私たちの相互接続について注目しました。私は「グローバリゼーション」という言葉が、多様な文化の人びとにそれぞれ異なる反応を引き起こさせるように、多様な意味をもっていると認識しています。グローバリゼーションについては、その肯定的な特徴と否定的な影響の両方が多くの議論にされてきました。そして、ここで今それらの再検討の必要はないと思います。むしろ、私たちは次のように皆さんと共に考えたいと思います。この新しい背景はイエズス会高等教育のミッションの方向性のある意味見直すようにと、どのように私たちに挑戦してくるのでしょうか。

皆さんは、文化、宗教そして資金が大きく異なる学生たち、地域、そして国々に奉仕し、地域独特の役割を担いながら世界のあらゆる地域の種類のちがう教育機関を代表して参加しています。明らかなことは、イエズス会高等教育のミッションに対するグローバリゼーションの挑戦の問いかけに対して、それぞれの独特な社会、文化そして宗教的状况のなかで、各教育機関が答えを見出す必要があるということです。しかし、私が強調したいのは、その課題が共通かつ普遍的な応答を要求するもので、当然皆さんの多様な文化的視点から教会の使徒職の一部門としてのイエズス会高等教育全体から導き出されるものだということです。

それでは、この魅了するほどの可能性と、同時に深刻な問題を私たちの世界にもたらした新しいグローバリゼーションの背景は、どのようにイエズス会高等教育のミッションの再定義を、または少なくともその方向性の再考を挑んでくるのでしょうか。ここで私は皆さんに考慮すべき点を三つ示したいと思います。これらは新たな「相互依存の劇的増加」が私たちに提示する、私たちが分かち合うミッションに対する明確に異なるが関連する挑戦なのです。

第一に、思想と想像力を深めること。第二に、イエズス会高等教育部門での「普遍性」の再発見とその実行です。そして第三に学識ある奉仕職に対するイエズス会の関わり方の刷新です。

I. 思想と想像力の深化の促進

まず、グローバリゼーションの否定的な影響について率直に話したいと思います。私はこれを「表層的なグローバリゼーション」と呼びたいと思います。私はご存じのとおり電子メールを使い、ネットサーフィンを行った最初の総長ですから、これから私が新しい情報とコミュニケーション・テクノロジー、そしてそれらの多くの積極的な貢献と可能性を軽く評価しているかのよう誤解されることはないと思っています。

ところが、皆さんは私が表層的なグローバリゼーションと呼ぶものをすで

に経験されています。そして、それが私たちの大学に委ねられている多くの若者たちにどれほど深い影響を与えていることかも。人は多くの情報を素早く、それも全く努力せずに手に入れることができ、それらに、考えもなしにすぐさま反応し、ネット上のブログやミニブログのなかで世界に自分の思いを発信してしまいます。『ニューヨークタイムズ』や『エル パイス』（スペインの有力日刊紙）の最新コラム、あるいは最新の流行りの動画は瞬く間に地球の反対側の人びとにばらまかれ、人びとの考え方や感じ方はつくられてしまいます。こうした状況では、批判的思考の骨の折れる緻密な作業はしばしば避けられてしまいます。

人は自分を批判的に考えたり正確に書いたり、あるいは自分自身の結論を慎重に導く必要もなく「カット・アンド・ペースト」することができます。また、消費者の夢を叶える美しい画像がコンピュータの画面に溢れています。そして、世の中の不快で聴くに堪えない音は手持ちのMP3音楽で排除できます。そのようなとき、人の視界と現実の認知力、願望は薄っぺらなまま残るだけです。人がソーシャルネットワーク上で単なる知り合い、または全く見知らぬ人物とあまりにも安易に努力もなしに「友人」になり、邂逅^{であ}の努力もせずに、また、場合によっては、対立、そしてその後^{ほこ}に和解を経ることなく、容易に「友達関係」を反故にします。そんなとき、人間関係も薄っぺらなものになります。

人はその人生の中で選択、価値観、信念、そして夢についてこのような目もくらむ社会的多元性に圧倒されてしまうとき、真実と理解を求める対話の共同体づくりの苦勞に取り組むより、相対主義や、単なる他者と他者の考え方への寛容さの怠惰な浅薄さにあまりにも容易に陥ってしまいます。言われた通りにすることは、学んだり、祈ったり、覚悟したり、あるいは選択のために識別することよりはるかにたやすいことです。

思想やビジョン、夢、人間関係や信念の浅薄さという表層的なグローバリゼーションからのイエズス会高等教育へのあらゆる挑戦は、今日の限られた時間で話し尽くせる以上に深い分析と熟慮、そして識別を要求するものなのです。ここで私が示したいことは、これだけの倫理的相対主義と消費主義の

価値観が内在している新しい技術は、あまりにも多くの人びとの内面世界を形成しており、とりわけ私たちが教育の場で関わっている若者たちが人間として十分に成熟することを阻害し、さらに知的にも倫理的にもまた霊的にも癒す必要のあるこの世界に対する応答をも妨害しているということです。

私たちは、グローバリゼーションがつくり上げたこの複雑な新しい内面世界をより深く知的に理解する必要があります。それは、この薄っぺらなもの有害な結果に対して、教育者として適切にかつ決定的に対応するためです。表層的な思想がグローバル化した世界は、原理主義、狂信主義、イデオロギーによる抵抗なき支配、そしてすべてのことは多くの人びとの苦悩を引き起こすことからの逃避を意味しているのです。浅薄な自己陶醉による現実理解は、他者の苦しみに対する憐れみを思い起こすことをほぼ不可能にしています。そして、束の間の欲望を満たすこと、あるいは最も深い誠実さとは両立しないような怠慢さは、真に価値あることに自分の人生を託することができないようにしてしまうのです。私たちがすでに経験し始めている非人間的な状況は、このようなプロセスによって生まれるのだと私は確信しています。人びとは現実と向き合う力を失ってしまいます。それは徐々に足音も立てずに忍び寄る非人間化へのプロセスなのであり、それがまた現実なのです。人びとは、彼らの心のふるさと、文化、そして心の拠り所を失っているのです。

表層的なグローバリゼーションは、イグナチオ的伝統を特徴づける思想と想像力の深みを新たな方法で促進するようイエズス会高等教育に対して挑戦してきているのです。

イエズス会のすべての大学において教えること、学ぶこと、そして研究することにおいて卓越できるよう、皆さんが励んでおられることを私は疑っておりません。「思想と想像力の深化」というイグナチオ的伝統の文脈のなかにこの挑戦を据えたいのです。これは、私たちが学生たちを導くのは専門的な訓練の卓越さを越えたもので、かつて2000年にコルベンバツハ元総長が「イグナチオのカリスマに照らされたイエズス会の大学」という講演のなかで話された「連帯における全人格」において教育がされることを意味してい

ます。私の考えをうまく理解していただくために、『靈操』のなかのイエスの生涯の神秘を観想する部分に表現されている「ペダゴジー（教授法）」に映し出されていると考えてください。イグナチオは後に、イエズス会教育にこの「ペダゴジー（教授法）」を適用するのです。

人はこのイグナチオ的観想の「ペダゴジー（教授法）」を創造的感性の訓練といいます。感性は記憶と共に働くことを私たちは『靈操』から学んでいます。「記憶」という機能の行動を英語ではto remember（記憶する）といい、それは適切な表現といえます。

皆さんの顔の組み上がった大きなジグソーパズルを想像してみてください。そこでイグナチオはそれをバラバラにするよう求めます。すなわち、私たちが記憶する前に壊す（dismember）ように。

そしてこれが、イグナチオが聴く、触ること、味わうこと、嗅ぐことなどを見ることから分離することを求める理由です。私たちはベツレヘムの、ガリラヤの、そしてエルサレムのイエスの場面を再構築するように、私たち自身を生き生きとした創造的な感性をもって「記憶し直し」始めるのです。「再創造」のプロセスを始めるのです。そして、このプロセスのなかで私たちは「記憶し直し」しているのです。これは訓練です。そのプロセスが終わり、ジグソーパズルが再び組み上がる時、出来上がる顔はもはや私たち自身のものではありません。それはキリストの顔なのです。なぜなら、私たちは今までとは違う何かを再構築しているのですから。このプロセスはキリストにおいて神の愛に出会うという最も深い現実ともいえ、私たちを個々の変容へと導くからです。

イグナチオの想像力は現実の深みにいたり再創造の開始を導く創造的なプロセスです。イグナチオ的観想は大変説得力のある道具であり、右脳から左脳への移動なのです。しかし、「想像」は「空想」と違うことも理解することが重要です。空想はイメージの多様性のためにイメージを作り出そうとするような世界への現実からの逃避なのです。想像力は現実を「とらえる」のです。

言い換えれば、イグナチオ的伝統の思想と想像力の深みは、現実と深く関

与することを必要とし、人が表層の下に潜りこむことができるまであきらめないものです。それは、神、キリスト、そしてその福音という最も深い事柄を基礎として統合する（心に留めて忘れないこと *remembering*）ための、注意深い分析（忘れること *disremembering*）なのです。その時、出発点は常に現実のものであり、すなわち物質的に、具体的に存在していると考えられているもの、私たちが会おう世界の姿であり、そして、それは福音そのものが生き生きと描く感性の世界であり、苦しみと困窮の世界であり、癒される必要のある壊れた人びとが多く存在する壊れた世界なのです。私たちはそこから始めるのです。私たちはそこから逃げ出しはなりません。そして、イグナチオは私たちとイエズス会教育の学生たちを、あたかも彼が黙想者を導くように、その現実の深みに入っていくよう導くのです。安直に手に入れられるようなものを越えて、イグナチオは視覚、触覚、嗅覚、知覚できる隠された神の臨在と働きを理解するように人を導きます。

何年も昔、日本の文部科学省は現代日本の教育が科学・技術、数学そして暗記において大きな進展をみせたという研究成果を発表しました。しかし、彼らの正直な評価によれば、教育のシステムが想像力と独創力、そして批判的分析力を教えることについて弱体化していることを認めました。これらは明らかにイエズス会教育の本質的な三つの要素なのです。

独創力は現代において最も求められているものの一つであり、本物の独創力は単に標語に従ったり、どこかで聞いたことや「ウィキペディア」で見たことを繰り返したりするようなことではありません。本物の独創力は、現実の問いかけに対する回答を見出す積極的でダイナミックなプロセスであり、誰もが制御できない方向に向かうように見える不幸な世界にかわるものを見出すものです。

かつて私が日本で神学を教えていたころ、司牧神学から始めるのが大切だと考えました。なぜなら、これは根源的な経験なのですが、異なった伝統で教育され養成されていた共同体（学生たち）に思弁的な神学から始めることを要求することはできないと思ったからです。しかし、司牧神学に関わるほどに、私は独創力についてとても当惑させられたのです。それは、何が司牧

者を独創的にするのか。私は自問しました。私たちがディレンマのないところで、しばしばディレンマを受け入れてしまうことを知りました。時々、私たちは本当のディレンマに遭遇します。それは、何を選べばよいのか分からず、また何を選んでも誤りにつながるという深刻なものです。しかし、そのような事態はめったにありません。多くの場合、置かれている状況がディレンマのように見えるのは、私たちは独創的に考えたくないの、諦めてしまうからです。大抵の場合、解決方法があります。しかし、そのためには独創力による努力が要求されます。他のモデルやパターンを理解する能力が要求されます。

この課題に取り組む中で、私は心理学者たちが見出したとても助けになる手法を発見しました。それは「漂う意識」というものです。心理学者たちはジークムント・フロイトやエーリッヒ・フロム、そしてその他の学派から彼らが「漂う意識」と呼ぶものを考え出しました。心理学者たちが患者と面接し診断を下すとき、彼らは人の助けとなる複数の方法から治療手法を選び、最も効果的な過程を決定します。霊操指導者もこの手法を用いるべきだと確信しました。私たちが典礼を祝うときにも、この「漂う意識」を採用すべきだと思います。それは共同体を理解し今何が必要なのかを把握する力になるからです。それはまた教育の分野でもとても役立つ手法なのです。

このことはイエズス会の会員養成の課題についても大きな示唆を与えてくれました。なぜなら、私たちの「漂う意識」は上手く発達していなかったからでしょう。20年ほど前から、インドでは以前には行われていなかった社会階層からの入会を受け入れるようになりました。それは各部族、インドのダーリットという最下層のカースト、そしてその他の周縁化された人びとからのものでした。私たちは喜んで彼らを受け入れました。なぜなら、私たちは貧困層に向けて行動し、彼らは私たちに加わったからです。これはすばらしい対話なのです。

しかし、同時に私たちは若干の障害を感じていました。彼らをどのように養成したらよいのでしょうか。私たちは彼らが十分な教育の背景をもっていないと考え、1年あるいは2年間の特別授業を与えたのです。私はこれを正

しい対応だとは思いませんでした。正しい対応は、彼らはどこから来たのかを問うことです。彼らの文化的な背景はどのようなものか。彼らはどのような現実意識を私たちに教えてくれるのか。彼らは人間関係をどのように理解しているのか。私たちは異なった道を彼らと違う形で寄り添わなければなりません。しかし、そのためには並外れた想像力と独創力が必要とされます。それは、他の違った在り方、感じ方、そして関係性のもち方に対して寛容であることが必要なのです。

私は相対主義の独裁的なところがよくないと思います。しかし、多くのことは相対的に存在しています。私が日本で学んだことは、人間がその人格全体を決して捉えることが出来ないほどの神秘性をもっていることです。私たちは異なるモデルに対して機敏に、そして心を開いて行動しなければなりません。教育においてもこれは主要な挑戦と考えるべきです。

私たちの各大学が現在教育している集団は、それ自体が多様性に富んでいるというだけでなく、前時代とも全く異なる集団です。世代と文化の変化に伴い、考え方や問いかけ、そして関心事も大きく異なっています。ですから、ぴったりする単一の教育モデルを提供することはできません。

繰り返しになりますが、始まりはいつも現実からというのが私の考えです。その現実の内側に私たちは変化と変容を探すのです。それは、イグナチオが霊操者に要求したことだからです。彼は、教育、そしてその他の奉仕職を通して、霊操者やその他の人びとの変容が実現されるよう求めていました。

同様に、イエズス会教育も私たちと学生たちを変容させるべきです。私たち教育者は変容の過程にあるのです。私たちを変えないような現実の深い出会いはありえません。私たちが変えられないのなら、私たちと学生たちの出会いはどのようなものなのでしょうか。そして、私たちの教育機関にとって変容の意味は、「私たちの学生は誰になったのか」であり、彼らの価値観や後の人生や仕事で何をしたかなのです。これを別な言い方をすれば、イエズス会教育において、学びと想像力の深みは、より人間的で、公正かつ持続可能性のある、そして信仰に満ちた世界の構築に向けて働く独創的な想像力を伴い、現実の経験による熟慮と、知的な厳密さを伴って統合するのです。

その現実の経験とは壊れた世界も含み、とりわけ癒しを待つ貧困層の世界のことです。この深みによって、私たちは同様に、すでにこの世界で働いておられる神を見つけるのです。

毎年私たちのイエズス会系大学から送り出している何千という卒業生のことを思い描いてください。卒業生のうち何人が、専門的な能力を修得すると同じように、私たちと過ごす日々のなかで彼らの最も深い部分を変えるような現実に関わる深化を経験するのでしょうか。私たちは表面的な頭の良さや能力をもってこの世界に愚かにも生きているわけではないことをはっきりと知るために、さらに何が必要なののでしょうか。

II. 普遍性の再発見

次にイエズス会高等教育に対する新しいグローバル化世界の第二の挑戦に触れたいと思います。グローバリゼーションの最も積極的な面の一つは、要するに、10年前でさえ考えられなかったような規模と手軽さでの通信と共同作業を可能にしたことです。第35総会の開催中、ベネディクト16世はこの世界を「人びとはより親密に交流し対話への新たな可能性と平和を深く求めている」と表現されました。伝統的な境界線がグローバリゼーションによって挑戦を受けるとき、私たちの狭いアイデンティティや帰属意識、更には責任についての理解は再定義されるかその範囲を広げることになります。現在、これまで以上に私たちはその多様性のうちであって、実際には人類という単一の集団であって、共通の課題と挑戦に直面していることを理解します。同じ第35総会の教令にもこう書かれています。「私たちは地球全体の将来と、持続可能な、生命を生み出す方法による発展に対する共同の責任を担っている」。そして、グローバリゼーションの積極的な現実は、帰属意識と責任を共有する自覚を伴い、共に働く上で数多くの手段を私たちに与えてくれるはずですが、但し、私たちがそれらを独創性と勇気を十分に発揮して利用すればのことです。

今日の大学の世界において、私は皆さんの多くが、質の高い大学として評

価されるために、国際化という現代の要求のなかで伝統的な境界線を壊すことを経験されていると思います。そして、それはとても適切なことです。すでに、あなた方の多くは海外進出や支部キャンパスの設置、あるいは学生や教職員たちが海外で学ぶ機会を与え、他の文化を正しく理解し、深くかわり、多様な文化の人びとと共に、そして彼らから学べるような、単位の互換性や国を越えたプログラムなどですでに成功されています。

私は旅先で、しばしばこのように聞かれます。なぜ社会問題や社会使徒職に関わって働くイエズス会員は減少したのですか。以前よりだいぶ少なくなりましたが、と。その通りです。そして、私たちの学校でもイエズス会員は非常に少なくなっています。しかし、同時に学校でも大学でも以前よりはるかに多くの社会関連のプログラムを開設しています。昨年、最初にカリフォルニアを訪れたとき、ほとんどのイエズス会教育機関において意識の地平線を広げるプログラムが用意されているのを見て力づけられました。それは学生たちを海外に、それも他の大陸に、彼らの意識と関心を高めるために派遣するものでした。

皆さんはまた、それぞれの大学により多くの海外からの留学生を受け入れており、異文化間の出会いや経験は、皆さんの教育機関の学問や教育の質を確実に高めています。それは同時にカトリック・イエズス会の大学としてのアイデンティティとミッションを明確にするのを助けているのです。国際化は皆さんの大学をよりよくするのを助けているのです。

しかし、このことはここで強調することではありません。昨日の話し合いから見てきたことに光を当てたいと思います。それを三つに分けて扱いたいと思います。

第一に、皆さんは、ヨハネ・パウロ2世が使徒憲章『カトリック大学において』*Ex Corde Ecclesiae* において、教育と研究の質に加えて認めたことは「どのカトリック大学も社会に対してと同様に個人に対しても、責任ある進歩の道具として役割を果たすよう求められている」と述べられたことに同意されると思います。イグナチオにとっては、すべての奉仕職は成長し変容するものです。私たちは物質的な意味での進歩について話しているのではなく、

人格として多くの経験を経るという前提に立ち、それらを通しての学びと成長による進歩について話しているのです。どのイエズス会大学も、その方法は様々でありながら、シメオン・カニヤス中米大学のイエズス会会長で20年前に殉教されたイニャシオ・エツラキュリア神父が「社会プロジェクト (proyecto social)」と命名したものを目指して努力しているのです。大学というものは「社会プロジェクト」になるのです。ここに集われた皆さんが代表する大学は、それぞれ知識、知性、才能、ビジョンそしてエネルギーという豊富な資源を有し、正義の促進と信仰への奉仕の公約によって動かされ、大学自体を社会の只中に組み込むことを探求しています。それは、専門職の養成だけに留まらず、その社会の真理、徳、発展、そして平和を訴え、促進する文化的な影響力となるためです。すべての大学は『真理に根ざした愛』*Caritas in Veritate* の実現を誓っていると言えるでしょう。それは愛と真理を促進するためで、真理は正義のなかで実現され、新たな関係のなかで実現されるのです。私が皆さんの国や地域のためにこのことがなしうるすべての可能性、公教育、医療、住宅、人権、平和と和解、環境保護、マイクロファイナンス（貧困者向けの小口金融）、災害対応、ガバナンス、宗教間対話の各分野のプログラムやイニシアチブをすべて挙げたとしたならば、ここに1日いることになってしまいます。

第二に、それぞれの大学はある程度、「社会プロジェクト」の役割を、それ自体としてまたはせいぜい国や地域のネットワークと共に実現しています。しかし私はこの程度のことで、新しいグローバル化した世界が示す、私たちのさらに卓越した奉仕の可能性を十分に活用したとはいえないと思っています。人びとはイエズス会の大学と高等教育システムについて話題にします。彼らは、マドリードのコミリヤス大学とジョグジャカルタのサナタダルマ大学、ボゴタのハベリアナ大学とチェンナイのロヨラカレッジ、そしてジャージーシティのセントピーターズ大学とバイルートのセント・ジョセフ大学はそれぞれ「家族のように似ている」といいます。しかし、実際そこには「イエズス会大学ネットワーク」という結束より、イグナチオの靈感という共通点だけがあるのです。なぜなら、私たちの各大学は互いが独自に運

営されていて、結果として「社会プロジェクト」としての個々の影響力は限定されています。第35総会は「世界規模で考えると、国際的かつ多文化的共同体としてイエズス会がもつ並外れた可能性は特筆すべきことである」と述べています。今日まで、私たちは高等教育に資する教育機関としての「普遍的な」奉仕のためにこの「並外れた可能性」を十全に用いてこなかったのだと思います。これは皆さんがここで発表し、関心を示した多くのことの焦点そのものだと思います。

ここで話は第三の重要な点に入ります。私たちは、私たちの大学がもっている緩い家族関係を乗り越えていけないでしょうか。そして、このグローバル化世界において、常にイエズス会のイグナチオ的ビジョンの部分であった普遍性をより効果的に実現するために私たち自身を再構成し、再編成することはできないでしょうか。このように動くことを「時」は示しているのではないのでしょうか。第35総会でイエズス会全体を表すために用いられた以下の言葉は、世界中のイエズス会大学にもあてはまるでしょう。

「私たちは、世界的ミッションを担う世界的組織体として行動するように要求されている。またそれは同時にそれぞれの状況が異なっていることにも配慮される。私たちは、世界的共同体として、また同時に各地の共同体を結ぶ一つのネットワークとして、世界中のびびとに仕えようとしている。」

具体的に言えば、イエズス会大学間にミッションについて協力する地域組織が存在するなら、それらを広げてイエズス会高等教育のより普遍的で、より効果的な国際的ネットワークを構築することが私たちの挑戦である、と私は信じています。各大学が単独で「社会プロジェクト」として働くとき、社会においてそれだけの善を成し遂げられるなら、すべてのイエズス会高等教育機関が一つの世界的な「社会プロジェクト」となった場合にどれほど世界に対する私たちの奉仕の機会は増えることでしょうか。ですから私たちの意識はすでに広がっています。

ここに来る前に、私はローマでアフリカの管区長たちと面会することがありました——何人かのラテンアメリカの管区長たちもローマを通過していま

した——。そのうちの何人かが言及したことは「総長がメキシコでの集まりに参加されるにあたって、ラテンアメリカの皆さんがもっておられる資源を分かち合っていただけるよう、各大学の責任者にお伝えいただきたい。私たちは大学を開設したばかりなので、私たちがもってない、伝統や、ノウハウ、資金をもっている大学の資料や図書を利用できるようになるなら、素晴らしい支援となるのです」という依頼でした。

ご存じのように、イエズス会はローマにある歴史資料施設から、世界中の支部や小さな施設に活動を移しています。私は、これらの支部がネットワークを構成することを期待しています。なぜなら、今はそれぞれの文化やグループが自身の歴史について自ら語るができるときだからです。ヨーロッパ人に他の地域の人びとの歴史をすべて解釈してもらわなくてもよいからです。現在ローマでは私たちは私たち自身のアーカイブにおいて、他のセンターと資料を共用できるように、複写、デジタル化、その他できることは何でもする予定です。同様に、膨大な資料の供給源や図書館を所有している大学がこれらを、この先10年間、図書館の設置を望めない大学に開放することができたなら、それは大きな奉仕となります。

皆さんのこの会議への参加は、皆さんの人生と大学としての奉仕により普遍的な局面をもたらすことに対して開かれるということを示しています。しかしながら私の望みは、昨日のような会議や議論から踏み出して、超国家的または超大陸的性格をもった、世界への「最前線の挑戦」を共にすることに焦点を当てた大学間での運営可能な共同事業体（コンソーシアム）を設立するために動くことです。昨日皆さんが参加した三つの検討グループを出発点に三つの共同事業体をつくることができるでしょう。

第一は、攻撃的な「新無神論」の台頭による挑戦に独創的に対応するコンソーシアムです。ヨーロッパにおいてはこの表現は使いません。「攻撃的新世俗主義」と表現し、大変反教會的なものです。興味深いことに、日本では教會と国家が完全に分離して300年から400年間世俗化が続いています。しかし、この世俗主義は平和的で宗教に対して敬意をもったものです。ヨーロッパにおいては、大変攻撃的な世俗主義があり、平和的ではありません。平和

なしの世俗主義は「反」何ものか、あるいは誰かに反対するものでなければなりません。私たちはなぜそのようになってしまったのでしょうか。カトリック国といわれるスペイン、イタリアそしてアイルランドにおいて顕著なのです。そこでは、世俗主義は強く影響力のある教会が歴史的に存在してきたことに対抗するものとして現れます。しかし、これらの新無神論は工業化した北と西の世界に限定されておらず、それらは他の文化に影響し、宗教からのより一般的な疎外を助長するもので、しばしば科学と宗教の間に置かれる誤った対立が生み出すものです。

第二のコンソーシアムは、世界の貧困、不平等そして不正義の様々な形に対するより適切な分析とより効果的かつ永続的な解決を課題にします。私の旅のなかで繰り返される問いは、イエズス会への挑戦にはどのようなものがあるだろうか、というものです。そしてその唯一の答えは、世界へのあらゆる挑戦です。それ以外の挑戦はありません。その挑戦は意味を見出すということです。人生は生きるに値するか。そして、貧困、死、苦しみ、暴力そして戦争への挑戦です。そこに私たちの挑戦はあるのです。では、私たちに何ができるのでしょうか。

第三のコンソーシアムは、貧しい人びとの生活により直接的に影響しかつ痛みを与えている地球的な環境の劣化に関する共通の関心について、私たちの世界の持続可能な未来を可能とする見方をもって注目します。

この第三のコンソーシアムは、イエズス会本部の社会正義と環境を扱う補佐の下にすでに機能している環境についてのネットワークを促進するものです。私たちは、今日ここに参加しておられる、想像力豊かで行動的な補佐に幸いにも恵まれています。そして、私たちは社会正義と環境の分野を担当する部門を開発しています。ですから、これもまたこのネットワークづくりの原点となるのです。

この節を終えるにあたって、どのようにイエズス会が教会のミッションを果たすかについてのイグナチオの理解、大学が登場したのは晩年であったことを思い出してほしいのです。驚かされることは、イグナチオが会憲のなかでなぜ彼が「イエズス会の大学」という考えを支持しているかを明確に記し

ていることです。ここでは、イエズス会が「大学を引き受ける」のは、「学識と生活の向上」の「よい影響」が「より普遍的に広められる」ためであると表現されています。大学運営の責任を引き受けるようにイグナチオを促しているのはより普遍的な善です。グローバリゼーションによって可能となるあらゆる方法を踏まえると、先に私が述べたような形でのより効果的なネットワークづくりをすることで、私たちは確かに、今日の世界においてイエズス会高等教育の実りを広めることができるようになるのです。

Ⅲ. 学識ある奉仕職

ある意味で、グローバル化した世界におけるイエズス会高等教育への挑戦についてこれまでに述べたことは、大学の古典的な三つの役割のうち、その二つと一致しています。大学が講義する場所である限り、私は思想と想像力の深化を促進する必要性を強調します。大学が奉仕のためのセンターである限り、私は重要な超国家的関心に焦点を置いた国際的なネットワークづくりに向けてより断固として行動するよう招請しています。このことが私たちが研究の役割に目を向けさせます。研究は「真理と知識のための真の探究」で、今はよく「知識の生産」といわれるこのテーマは、今日の大学の世界において、研究の方法やその発表、知識の生産の中心、学問分野、そして研究の目的に関する問いをめぐる議論を生んできました。

私たちが真にイグナチオの遺産を継ぐのであるなら、私たちの大学での研究は、最終的には常に第34総会が「学識ある奉仕職」あるいは「知的使徒職」として着想されたものでなくてはならないことに皆さんも同意して下さると思います（この表現はイエズス会特有のもので、直接には関係がないことですが、時たま混乱する「知的使徒職」という表現はイエズス会のすべての文献と使徒的な仕事に適用されるものです）。

この総会の26教令にあるように厳密な知的訓練の良いところはすべて必要です。「学識と知性、想像力と独創力、堅固な勉学と厳しい分析」のすべてが要求されるのです。ですが、神がその生命と愛の王国の領域に取りこみた

いと考えるのは、常に信仰への奉仕、教会への奉仕、そして人類家族や創造された世界への奉仕における「奉仕職」あるいは「使徒職」といわれるものです。研究は常に、閉ざされたエリート集団の難解な会話というより、人びとの人生に変化をもたらすものです。再び確認しますが、ヨハネ・パウロ2世が1990年の使徒的回勅『カトリック大学において』*Ex Corde Ecclesiae* において列挙した「深刻な現代の課題」に対応するために、イエズス会の大学のなかで行われている深遠な会話や真剣な学問的活動を列挙するなら、すなわち、「人間の生命の尊厳、すべての人びとへの正義の促進、個人また家族生活の質、自然保護、平和と政治的安定の追求、世界の資源のより公正な分配、国家や国際レベルの人間共同体にとってより役立つ新たな経済および政治秩序」に対応するためになされていることをすべて挙げるとすれば、与えられた時間では足りませんし、実行の段階で挫けそうです。

この考察を通して私の考え方を踏まえて、グローバリゼーションがイエズス会大学における研究の「学職ある奉仕職」に対して、どのような挑戦をしてくるのかを今問いたいと思います。それは二つあります。

第一に、今日私たちの大学の学識ある奉仕職に対する重要な挑戦は、グローバリゼーションが「知識社会」を作り出しているという事実に起因しています。知識社会では、人格も文化も社会も成長するためには知識の利用可能性に恐ろしいほど依存しているからです。グローバリゼーションは、知識によって力を与えられ、それを享受する人びとと、知識を利用できないがためにその恩恵から締め出された人びととの間に新たな不平等をつくり出しました。したがって私たちは問わなければなりません。誰が私たちの大学で生み出された恩恵を享受していますか。また、恩恵を受けていないのは誰ですか、と。私たちが分かち合える知識を必要としているのは誰でしょう。また私たちは、知識によって真に変化を起こすことができる人びと、特に貧しく阻害されている人たちに対して、より効果的に知識を分かち合うにはどうしたらいいでしょう。私たちは教職員や学生たちにも具体的な問いを投げかける必要があります。どのように声なき人びとの声に、人権を否定された人たちのために人権の根源に、環境保護の手段に、そして貧しい人と連帯する人となって

きたか、と問いかける必要があります。そしてこの問いかけのリストは続くのです。

このようなつながりのなかで、皆さんが明日討論する予定の「イエズス会コモンズ」（イエズス会デジタルネットワーク）のなかでの討議進捗はとても大切です。そして、人びととその共同体の成長のために知識へのアクセスにおける平等性の拡大を促進しようとする野心的な計画を成功させるならば、大学からより真剣な支援と関わり方が要求されるようになるでしょう。

第二に、私たちのグローバル化された世界には二つの敵対する「主義」が広まっています。一方は、信仰がこの世界と世界が抱える問題について言えることは何もないと主張し、宗教そのもの自体が一つの大きな世界の問題だと主張することの多い攻撃的な世俗主義によって特徴づけられて支配を誇る「世界文化」です。他方は、様々な原理主義の復活で、しばしば世界のポストモダン文化に対する恐れや怒りの反応を伴っています。そして、これは人間の理性から切り離された人間の理性によって規定されていない特定の「信仰」をよりどころとして複雑さから逃避するものです。また、ベネディクト16世が『真理に根ざした愛』*Caritas in Veritate* のなかで「世俗主義と原理主義は、理性と宗教的信仰の有効な協働と実りある対話の可能性を締め出してしまいます」と指摘しています。

学識ある奉仕職のイエズス会的伝統は、一方では人間の理性、思考と文化の健全な評価と、他方では信仰、福音、そして教会への深遠な関わり方を対照しながら組み合わせてきました。そしてこの関わり方は、宗教と文化の間の対話において信仰と正義を統合することも包含しているのです。例を示せば、創立初期のイエズス会員の養成には、厳格な神学修得と同時に、古代の異端者の著書をはじめ、創造的な芸術、科学や数学の研究も含んでいました。今年没後400年を記念したマテオ・リッチの生涯と功績を見るだけで、信仰と理性、福音と文化の調和のとれた統合を実現したこの養成方法がどのようにしてそのように創造的な果実を生んだのかを知ることができます。

多くの方は、「どうかマテオ・リッチと私を比較しないでください。彼は天才ですから」と反論するでしょう。言いたいことは分かります。しかし、

同時に彼が受けた養成の内容が彼を天才にしたのです。そして問いたいのです。今日行われている養成においてそのような内容が提供されていますか。私たちは統合を実行できていますか。私たちの養成は開かれたものですか。

世俗主義と原理主義が世界中に広まるなか、イエズス会の学識ある奉仕職を常に特色づけてきた、信仰と文化の間の対話への関わり方を創造的に刷新する新たな方法が、私たちの大学のなかで問われていると考えています。これは、教会の名の下で教皇から私たちに与えられているミッションなのです。そして、1983年に開催された第33総会においてヨハネ・パウロ2世からイエズス会に対して「聖なる科学と一般的な世俗文化における、特に文学と科学的な分野での研究を深めてください」と要求されました。最近ではベネディクト16世が第35総会の最中にイエズス会とその協働者とその機関に対して、「最前線」に立つという教会におけるイエズス会の特別なミッションについて明言されました。それは「他の人びとが、地理的にも心においても到達できない、または到達が難しい場所に立ち」、特に「信仰と人間の知識、信仰と現代科学、信仰と正義のための戦い」が出会う場所を同定しました。また、ベネディクト16世は「これは簡単な取り組みではなく」、「勇気と知性」および「教会の核心に根ざしている」という深い意識なのだとも認めています。

教会がこのような知的な関わり方をイエズス会に求めているのは、今日の世界に必要な奉仕だからだと私は確信しています。原理主義の不合理な立ち位置は信仰を捻じ曲げ、世の中に暴力を増やすということは皆さんは経験からご存じです。教会が世界に対して提供できるカトリック教会の豊かな神学的、歴史的、そして文化的遺産である知恵と資源を世界に提供することを、軽蔑的な世俗主義は尊大にも妨げるのです。今日、イエズス会の大学は力強さと独創性をもって、世界のため、そして世界の大きな問いかけと課題のために、イエズス会の学識ある奉仕職を継続し、福音と文化、信仰と理性をつなぐ知的な橋渡しを進めていくことができるでしょう。

むすび

イエズス会のよき伝統に則り、「*repetitio*（繰り返し）」ながら、まとめを

しましょう。私は皆さんとイエズス会の大学が学び、奉仕、そして研究の機関としてグローバル化の挑戦を受けていることを確認してきました。第一に、表層的なグローバル化への対応については、私たちの大学の学生たちの新しい文化の世界を研究する必要がある、思想と想像力の深化、人を寛容させるほどの深化を進める創造的な方法を見出す必要があるということを提案します。第二に、コミュニケーションと協働の新しい可能性の潜在力を最大化するために、私は、イエズス会の大学が国や大陸を跨いで挑まれる信仰、正義そして環境に関わる重要な課題に取り組むための国際的なネットワークの運用に向けて働くことを切に願っています。最後に、知識の分布の不平等に対処するために、私は排除された人びとと研究成果を共有できる創造的な方法の探求を奨めたい。そして、世俗主義と原理主義の世界的な拡散に対してイエズス会の大学が信仰と文化との間を仲介する学識ある奉仕職におけるイエズス会の伝統への関わり方が刷新に向かうよう招請したいと思います。

ある見方をすれば、皆さんは、私が述べたことをすべてとって、私が共有した方向性は、所属する大学においてすでに試みているか、成功裏に成し遂げていることを示せると思います。そのとき、私がお話したことを新しい世界を構成するためのイグナチオの「マジス」“*magis*”への招きとして理解することができますが、既存のイニシアチブの微調整が必要で、すでに行っていること、あるいは行おうと試みていたことにおいてさらに成果を出すことが求められます。これは、挑戦を引き受ける有効な方法だと思います。

しかし、ここで私がこの2年間、私自身と他の方々に関わり続けてきたより基本的な質問をしばし考えていただき、終わりとしたいと思います。それは、もし、イグナチオと初期の会員たちが今日イエズス会を再び始めるとしたら、会の活動としてなおこの「大学」の活動を選ぶでしょうか、という問いです。

すでに1995年の第34総会するとき、大学は大きく複雑になっていました。そして、これと同時期、大学でのイエズス会員は減少し始めていました。この総会が大学での会員の減少に言及したとき、全世界の会員総数は約22,800名でした。2010年の現在、会員総数は約18,250名で約4,600名の減少です。この課題の大きさを示すためにさらに統計の話をする必要はないでしょう。私は

この15年間、私たちの大学でカトリックとイグナチオのアイデンティティを強めるために、大学経営への積極的な参加が可能な構造をつくるために、さらには霊的な遺産やミッション、そしてリーダーシップを協働者と共有するために多くの創造的で効果的な働きがあったことを認識しています。私は、私たちの同僚たちがイエズス会の高等教育ミッションと活動において、本当の協働者そして真のパートナーとなってくれたことをよく理解し、大いに喜んでいきます。これらのことは誇るべき素晴らしい成長であり、またイエズス会員の減少が続くなかで必要なことです。

私たちは、イエズス会大学で信徒の協働者が指導的な立場に従事したり、教職員として働いたりするためによりよい教育を施し、準備を進め、参加を促すこれらの称賛すべき努力を継続し、増加させる必要さえあるのです。正直に言えば、このことはイエズス会と教会の奉仕に対して私が希望をもつ理由の一つだということです。もしも、イエズス会員しかいなかったら、私たちは重い気持ちで将来を展望するでしょう。しかし、私たちは、聖職者ではない協働者の専門性、献身、そして深みのあるおかげで、夢を見続けたり、新たな事業を始めたり、共に前進し続けたりできるのです。私たちはこれらの称賛すべき努力を続けてさらに増やす必要があるのです。

おそらくこの課題にもっとも根源的に対応するには自分たちを、イグナチオとその最初の仲間たちが、力いっぱい、創造的に、そして自由に問いかけた「自分たちはどこで、どのように奉仕することが教会と世界にとって最も必要なことなのか」という基本的な問いの霊的な領域に、同じように私たちも自分を置かなければならないということです。イエズス会の生き残りを心配するのではなく、私たちは共にこの問いを生きるのです。今暫し、大きな大学の学長や理事長あるいは管理者や教授ではなく、あなた方自身のことを、新たな修道会の共同創立者として、教会の使徒的組織としてのあなたへの神の呼びかけを識別してみてください。このグローバル化した世界の光と闇のなかで、これらすべての大学を運営し続けることが、依然として教会のミッションと世界のニーズに応えるための最良の方法なのか、または最良の方法であるためにはどうしたらよいのか。あるいは、質問はこうあるべきかもし

れません。もし、今日の世界にイエズス会を再創立することになったら、そのとき、何を強調しどのような方向性をもった大学を運営するでしょうか。行く先々ですべてのイエズス会員たちに、イエズス会を再建することを呼びかけています。なぜなら、どの世代もその信仰とその旅を再構築しなければなりませんし、その大学をも創り変える必要があるからです。これは単なる願望ではないのです。もし、私たちが再構築の力を失ったとしたなら、その心も失ったことになるのです。

福音書のなかに私たちは「未完の終わり方」をよく見つけます。マルコ福音書の原典最終章の終わりに、イエスが葬られた墓で天使からメッセージを聞いた婦人は何も答えていません（マルコ福音書第16章6節～）。また、ルカの福音書の放蕩息子の譬話の終わりでも、父からの問いかけに兄は何も答えません（ルカ福音書第15章31節～）。これらの曖昧な終わり方は不安な気持ちにさせられますが、まさにより根本的な問いかけと答えに向かって駆り立てることが意図されています。ですので、私のお話もよき先駆者の例に倣って、オープンエンドの形をとろうと思います。私の話が終わってからも私が今朝示した課題がどの程度私たちの大学の刷新、さらにもっと人道的で、公正で信仰に満ちた持続可能な世界の形成を支援するためのミッションや奉仕職に関係しているか、あるいは、イグナチオが「イエズス会大学」と呼んだ大学を再創立することへの誘いであるのかについて考えをめぐらし続けていってほしいと思います。

(菅野正一 訳)

Living in Wisdom: Concerning the New Edition

It is my pleasure to introduce the new edition of “Living in Wisdom” to you all. The last edition was published to commemorate the centennial anniversary of the founding of Sophia University, the 40th anniversary of Sophia Junior College and the 50th anniversary for Sophia School for Social Welfare. For five years, it has played an important role in transmitting our educational spirit of “Men and Women for others, with others” as well as our founding principle. In April 2016, Sophia School Corporation took a new step, concluding a merger agreement with the four school corporations, Eiko Gakuen, Rokko Gakuin, Hiroshima Gakuin, and Taisei Gakuen, all managed by the Society of Jesus and commonly taking pride in the 400-year history of Jesuit education. In correspondance to the new start, a decision was made to publish a new edition of “Living in Wisdom”.

I highly recommend this book to understand in depth, the historical roots of the mission adopted by all Jesuit Schools worldwide, as well as their modern vision of contributing to improving humanity through education, research and social welfare.

The education offered at Sophia University is founded on the Catholic view of humanity which endorses integrated human development, and therefore as a school we lay great importance on the process leading from secondary to higher education. Fr. Joseph Dahlmann S.J., one of the founders of Sophia University, said in a memorandum presumably written to Superior General of Society of Jesus Franz Xavier Wernz S.J. in 1906 that “If efforts by the Jesuit Society were made only for universities, they

would be as incomplete as a head without a body. Our ultimate goal shall be to establish large-scale secondary schools and fine universities. In Japan integrating secondary education may become the most important factor of our mission in the future.” (See “Documents Pertaining to Sophia University’s History” Vol. 1 p. 54) It is apparent that this founding vision is reflected in our recent decisions on reforming Sophia School Corporation. As we add a new loop to a longer chain of Sophia’s history which has continued for more than one hundred years, we shall not forget our mission to pass down our legacy from one generation to another.

I sincerely hope that this new edition of “Living inWisdom” will promote greater understanding of Jesuit education, the roots of Sophia, and that it will also become a driver of further creative advancements.

Chancellor of Sophia School Corporation,
Trustee for Jesuit Higher Education

Tsutomu Sakuma, S.J.

Visiting the Jesuit Educational Institutions at the Time of their Foundation

—The Vision of Ignatius Concerning the Educational Apostolate—

Former Chancellor of Sophia School Corporation **Toshiaki Koso, S.J.**

The three institutions of higher education and four High Schools of the Sophia School Corporation are all associated with regard to their founding spirit to the Society of Jesus, a male Religious Order of the Roman Catholic Church, which serves as their parent organization.

The Society of Jesus was founded by Ignatius of Loyola, and in September 1540, during the last stage of the renaissance period, it was formally endorsed as a Religious Order. Concerning the Society of Jesus, the pedagogical dictionary published by Iwanami Shoten states that, “when viewed from the angle of western educational history, the footprints impressed by the Society are indelible”, and on viewing its later development, we observe that at the time of the demise in 1556 of Ignatius, the Society’s first Superior General, the Jesuits were in control of 48 colleges. In 1599, a conclusive edition of the *Ratio atque Institutio Studiorum Societatis Iesu* or ‘Official Plan for Jesuit Education’ was realized, in the succeeding year, that is in 1600, the Jesuit schools numbered 245 in all, and by 1640, this number had risen to 521.

This official plan, while judiciously probing the practices adopted by these institutions, which revealed a rapid rise in each region, at the same time provided their basic nature and direction into the Jesuit pattern, and presented an academic structure that sought to maintain the status of these institutes at a certain standing. The English philosopher and

politician Francis Bacon, in his work entitled *The Advancement of Learning* (1620), commended the Jesuits for their ceaselessly evolving school education, and remarked that, “in point of usefulness (they) have herein excelled.” This trend continued during the subsequent years, for in 1710 there appeared 612 Jesuit schools, and in 1749 their number had increased to 669. What’s more, on considering the figures after 1600, we see that while the focus was undeniably the nations of Europe, they nevertheless included also the nations of Asia (such as the seminaries and colleges of Japan), as well as those of Central and South America.

Even so however, since the time of its foundation, the primary thrust of the Society of Jesus has been on spreading the “Gospel” of Christ and aiding Christian believers, while offering education via schools, was never its principal goal. His Holiness Pope Paul III in his Bull entitled *Regimini militantis Ecclesiae* which was promulgated on September 27, 1540, clarified the purpose of its foundation in the following words:

The Society was founded chiefly for this purpose: to strive especially for the progress of souls in Christian life and doctrine and for the propagation of the faith by the ministry of the word, by spiritual exercises and works of charity, and specifically by the education of children and unlettered persons in Christianity, and furthermore by administering the sacraments.

Hence, the initial mission of the Society of Jesus comprised the preaching of the Gospel, the tutoring of the masses on issues pertaining to Christian doctrine, offering guidance in the Spiritual Exercises, engaging in undertakings of mercy, and administering sacraments such as Holy Eucharist, penance, and so forth. The Jesuits were indeed involved in educating children and the unlettered, and in communicating the Gospel to

the common folk. Nonetheless though, even if such tasks were viewed in some small way as being aspects of religious education, yet activities such as lecturing at colleges or universities, or engaging in academic research, were not perceived as constituting part of the Jesuit mission. Viewed from the perspective of history, we find that major religious congregations such as the Franciscans, Dominicans, and others actively engaged in research and academics by focusing on fields such as theology and philosophy, and thereby contributed much towards their development, while individuals such as Albertus Magnus, Thomas Aquinas, Bonaventure, and Roger Bacon, are representative of this group. The Jesuits on the contrary, ever since the time of their founding, did not consider such activities as constituting part of their mission. Rather, in the *1541 Constitutions*, wherein is delineated the primary nature of the congregation, it has been stated in unmistakable terms that, “the Society of Jesus engages neither in academic research nor in discourses.”

Be that as it may, nevertheless within the space of ten years, that is, while their first Superior General Ignatius was yet alive, the members of the Society of Jesus ceased to involve themselves solely in issues associated with philosophy and theology, that is to say issues having a bearing on the training of priests (or aspirants to the Society). Rather, in the course of their work in schools, they came to enthusiastically tackle issues dealing with the education of youth regarding the humanities, and this in time soon made a positive impact upon their supervision and administration as well.

Well, what could have been the factors that initiated this sudden somersault on their part? What could have been the processes behind this abrupt change in their attitude, from negative to positive? To acquire an understanding of this, we need to probe a little the history of the Jesuit colleges, which, since the time of their founding, underwent a

transformation in four stages, with reference to their structure and character.

Ignatius was keenly aware that in order that their missionary and apostolic works may be fulfilled in a beneficial and suitable manner, the Jesuits more than anything else were required to attain the foremost level of education available at that time. His principal reason for such an aspiration was because it had become amply clear to him that if such education were lacking in the Jesuits, the guidance they offered people so as to enable them to lead lives of faith, could easily be misjudged as heresy. He knew this from his own painful personal experiences of the past in Salamanca when he was prohibited all such activities, until he had finished the study of the humanities, philosophy, liberal arts and theology. Hence, all his companions at the time of the foundation of the Society of Jesus studied at the University of Paris, where they acquired both Master's degrees as well as the qualification to teach at universities.

It was as early as in Spring of 1540 that Ignatius sent those Jesuits who had yet to undertake the study of the humanities, philosophy, liberal arts and theology (that is to say, the scholastics), to the University of Paris. In Paris, they resided in colleges that were houses of study meant exclusively for their own use, as members of a community. They also commuted to other colleges in the vicinity, where they audited lectures and acquired guidance for their study.

This proved to be the startup, and from this point onwards with the increase in the numbers of Jesuits and high-minded benefactors, colleges such as this made their appearance in a diversity of regions, in steady succession. In 1542 they appeared in Coimbra in Portugal, Padua in Italy, and Leuven in Belgium, in 1544 they emerged in Cologne in Germany as well as Valencia in Spain, in 1545 they surfaced in Gandia and Valladolid, also in Spain, and in 1546 they appeared in Bologna in Italy and Alcalá in

Spain. That is to say, barring England and Eastern Europe, such colleges came to be instituted in all of Europe's principal university metropolises.

This intramural educational institute served as a religious house as well as residence for members of the congregation, and we may perhaps describe it also as a facility for Jesuit scholastics who were exclusively engrossed in study. Those Jesuits who had already attained an advanced level in their training, or whose training was viewed as having been concluded, nevertheless continued residing within the institute as members of the community, serving as Rectors, Formators, or in other positions of authority, but for individuals other than Jesuits, residence within the community was forbidden. Within these institutes, reviews (*repetitio*) as well as personal and joint research by scholastics were indeed carried out, yet lectures (*lectio*), seminars (*exercitia*), debates (*disputatio*) and other similar programs that one generally witnessed at universities and colleges (dormitories) of that time, were never carried out.

This was the first type of college in the Society. Although the Rector and most Jesuits in charge of formation were in possession of licenses to teach topics related to the humanities, or were endowed with the credentials necessary to teach philosophy or liberal arts, yet, young Jesuits were required to commute to local universities for their study, or to receive guidance. This gives us an idea of the extent of their sincerity, in seeking to be as faithful as possible to the ideals of their founder.

Nevertheless though in November 1545, in the Jesuit college located in Gandia and facing the Mediterranean in eastern Spain, which opened in Spring of that year, Jesuits with the credentials necessary to teach philosophy and liberal arts conducted regular series of lectures for their juniors (the scholastics), on topics such as logic, ethics, metaphysics, and other subjects linked to philosophy and liberal arts, and even directed their seminars and theses. This in other words signified the

commencement of the second type of college, which included the features of an intramural institution. This was due to the fact that neither in Gandia nor in the surrounding vicinity, could they find a university having a standard high enough for their scholastics to commute to.

A year later in October 1546, yet another form of re-structuring appeared at the Gandia college. In courses oriented to Jesuit scholastics, such as philosophy and liberal arts, non-Jesuit youth wishing to audit the courses were accepted, and they soon started to involve themselves in lectures, repetitions, debates, and other related programs. That is to say, the institution had now come to acquire a fresh character as an extramural body. Here, apart from the endeavors of Francis Xavier (1506~52) and others at the college of St. Paul in Goa, it was the first instance of Jesuits offering lectures for the youth of the city on a regular basis, and they soon began to assume responsibility of their education (the third type of college). The number of participating youth however were few, and to the very last, they were treated as exceptions.

Around the middle of December 1547, that is, after approximately a year had passed, a delegate of the municipal council from the city of Messina, located in the southern Italian island of Sicily, sent a letter to Ignatius that included a note of endorsement from the Spanish Viceroy of Sicily, namely Juan de Vega. They requested Ignatius to send ten Jesuits to establish a new *Studium Generale*, that is to say an institute of comprehensive education at their place, and they requested him also to see to its administration. Ignatius on receiving this request was at first unenthusiastic and vacillating, yet in early January of the subsequent year, that is in 1548, he decided to accept the request, and around the middle of January he dispatched letters of approval to both the members of the council and the Viceroy. It was thus that the Society of Jesus came to be positively involved in colleges of the fourth type, namely schools oriented

primarily to youth in general.

In actual fact though, the Jesuits faced up to the task of commencing their first schools in a mood of unqualified enthusiasm. As regards the renovation and sprucing up of the school premises at St. Nicolo's Church, the securing of suitable residences for the Jesuits, and other such issues, while some conferred with the council members and Viceroy regarding the preparatory measures necessary for the adjoining milieu, experienced Jesuits like Jérôme Nadal (who was one of the first generation Rectors), or Peter Canisius (who had served in Germany), made a meticulous selection of the Jesuits to be sent, and in the month of February, they assembled the ten chosen Jesuits in Rome. In Rome, they obliged them to undergo a kind of an aptitude test and enabled them to acquire some teaching skills, even going to the extent of checking their abilities and talents.

"In Rome...each of us was obliged to practice communicating the learning we had acquired. That is to say, those who had studied Latin had to practice teaching Latin, those who had learned logic had to practice teaching logic, those with skills in the natural sciences had to practice communicating those skills, and those qualified in scholastic theology and dogmatic theology, had to pass on their knowledge. Each had to teach in accordance with the skills he had gained, which could concern either one or several topics, and each had to preach sermons." Such indeed was the situation, but besides that, they felt it prudent also to send letters to Messina, describing each one's academic proficiency and competence.

In this way by April 24, 1548, grammar plus humanities (which formed the study of humanities in the lower college), and philosophy plus liberal arts and theology (which courses constituted the advanced college), came to be decided. The institute had a steady curriculum of three courses, and in this way a full-fledged Jesuit school was born. Owing to the fact that the renovation of the school premises was not concluded on time the

formal school opening was postponed to October, but in the interim a brochure proclaiming the opening, was made ready and dispersed. This provided information concerning the educational policy, the contents of each course, and the educational procedure that would be adopted. On November 16, 1548, His Holiness Pope Paul III raised this college in Messina to the rank of an institute endowed with the right to confer degrees, and thus it was officially elevated to the status of a valid university.

This type of constructive attitude displayed by the Society of Jesus towards school education, as manifested in the opening of the school at Messina, was due to be fortified even further in the days to come. In 1549, in Palermo in Italy (a city also located on the island of Sicily), a similar institute was inaugurated, and later in 1556, which was the year Ignatius died, within Europe alone 48 Jesuit colleges were opened, and of these 36 were full-fledged extramural institutes of the fourth type. These schools besides were no longer limited merely to Italy or the island of Sicily, for they had spread widely, to nations as far as Spain, Portugal, France, Belgium, Germany and Bohemia. The prototype of these institutions was doubtless the college at Messina, but they had now evolved even further, and their epitome was the Collegio Romano that was opened in February 1551, and which later came to be known as the Gregorian University of Rome.

Well, what could have been the special features of the college of Messina, which served as the prototype for these Jesuit colleges? What significance could have arisen within the minds of the first Jesuits, when this issue was viewed from the position of the primary mission of the Society of Jesus?

To begin with, if we were to regulate the class composition and major

study content of the institution during the years 1551~1552, it would appear as in Table 1, and its principal features may be summarized as follows.

(1) In all classes of the lower and advanced colleges, we notice that the teaching procedure of the university of Paris was the method adopted. The reason for that was because in diverse other regions the class organization was ambiguous, problematic arrangements were absent in the curriculum, and students were free either to attend the lectures or not. The procedure of Paris was found to be the most appropriate and effective. This Parisian mode of operation meant in concrete that: ① The basis of all study lay in the fact that students had to acquire sufficient ability in languages, in order that they may be able to read, speak, listen, and write adequately and properly, and the language generally used in those days was Latin. ② Classes were organized systematically in accordance with the academic ability and progress of the students, with each receiving guidance from a fulltime professor. ③ The students did not just ignore classes or audit lectures as they liked, rather, by enrolling for one subject at a time, they proceeded from the lower to the higher classes in their study. It was only after they had successfully studied the subjects offered in the classes where they had enrolled, were they able to proceed to higher classes. ④ Classes were not always conducted in the form of lectures. They included seminars, reviews, debates, recitations, compositions, poetry recitations and so on. What was mainly stressed was student-centered learning. ⑤ Students were required to be diligent in their attendance at classes, and classes were never to be recklessly cancelled due to factors such as the convenience of teachers, biased local customs, or capriciousness of students. These constituted the five distinctive features of the Jesuit colleges of those days.

TABLE 1¹ CLASS FORMATION AND PRINCIPAL ACADEMIC CONTENT OF THE JESUIT COLLEGE IN MESSINA (1551-52)

Advanced College
<p>THEOLOGY COURSES (Four Years):</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. The Theology of Thomas Aquinas (<i>Summa Theologiae</i>) 2. Relationship between the Bible and Theology (<i>Summa Theologiae</i>) 3. Bible (Old and New Testaments) <p>Lectures on the above three courses continued for a period of four years. Besides these, students studied Church History, Canon Law, Writings of Popes and Applied theology, problems of Conscience, Hebrew, and other subjects.</p> <p>PHILOSOPHY COURSES (Four Years):</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Metaphysics 2. Ethics 3. Physics <p>During the above three courses students studied Geometry, Mathematics and other Mathematical subjects such as Celestial theories, Cosmology, Trigonometry, Scenography, Music theory, and Celestial Operation.</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. Logic: In classes on Logic, students learned Dialectics, Laws of Thought such as Categorization theories, the Organon and others.
Junior College
<ol style="list-style-type: none"> 1. Rhetoric: Here the students studied the Laws of Rhetoric, the etiquette involved, its technique, and its practical mastery. 2. Humanities: Here students acquired a comprehension and appreciation of Latin Humanities, Greek Grammar, and some minor works. 3. Senior Grammar: Here students studied Transverse Grammar, Rhythm, Figures of Speech, Taxonomy, Orthography, and Poetry Composition. 4. Middle Grammar: [Stage 2 and 1]. Here students studied Grammar, Reading model Latin passages from poetry, letters, and plays, and reciting them from memory, and Poetry Composition. 5. Primary Grammar: <p>[Stage 4]. Here students studied Grammar, and everything from here onwards was taught in Latin.</p> <p>[Stage 3]. Here students study Higher Latin Grammar, and simple essays.</p> <p>[Stage 2]. Here students studied the Latin Grammar of Donatus.</p> <p>[Stage 1]. Here students undertook a rudimentary study of Latin, with reference to reading and writing.</p> <p>(These stages indicate the level to which the student has progressed).</p>

¹Hannibal du Coudret, *De Ratione Studiorum Collegii Messanensis*, (1551); Jerolamo Nadal, *De Studii generalis, dispositione et ordine* (1552)

In actual fact however, at the college in Messina, the teaching of grammar was split into three classes, namely elementary, intermediate, and advanced, and classes were also conducted in Greek and Hebrew (confer Table 1). Of these, in the class on humanities for instance, students who had earlier revised the '*Letter-writing Manual*' of Erasmus now got a chance to research it more thoroughly, and thereby acquire a grasp of the rules and practices of letter-writing. In addition, they re-read Cicero's '*Letters to Friends*,' they observed how the rules presented by Erasmus were applied, pondered over how they were presented, and discussed the issue as a group. Thus, by meticulously reading both works, not only did they gain an idea as to how practical letters were written, but also gained some training in identifying the gist of sentences, in grasping their significance, in thinking, in criticizing, in expression, and so on and so forth.

In the next class, which was on rhetoric, by utilizing the *Institutio Oratoria* by the Roman rhetorician Quintilian, the *Rhetorica ad Herennium*, by Cicero, and other comparable works, students gained a grasp of the principles, protocol, and techniques of rhetoric. At the same time they had to read and recite from memory the speeches of Cicero and other eminent individuals, and even present demonstrations using voices and gestures. And that wasn't all, for each week students prepared by themselves a rough draft of a speech and refined it with the guidance of a teacher, and later they looked forward to presenting their speech in public. This event was organized in the form of contests or tournaments, and by means such as these they strove to attain the scholastic goal of eloquence, which was viewed as a sequence of an 'appropriate use of words, appropriate thinking, and an appropriate attitude to life.'

Furthermore, in classes wherein grammar, rhetoric, or the humanities were taught, a shared feature in their mode of learning was as follows: ①

Each day the students were required to write compositions, which diverged in conformity with the level and progress of the class. ② Reviews were viewed as vital, in order to gauge the amount of knowledge the students had imbibed. Classes began with reviews of what they had learned earlier, and every Saturday morning, each class had to conduct an overall review of what the students had learned during the week. ③ With a view to evoke a desire for scholarship among the students and raise the level of their spontaneity and intellectual assessment, a certain amount of time was set aside in class in order to incorporate a game-like feature that was referred to as *disputatio* or *concertatio*. This was customarily conducted during the last 30 minutes of the class, either in the mornings on weekdays or in the afternoons on Saturdays, based on what students of each class had already studied. The pattern was as follows: (a) The students responded to questions of the teacher, which were given in the form of a quiz. (b) The students were split into two groups, namely a questioning group and an answering group, and questions were asked and answered by them in conformity with the group to which they belonged, as though they were contending with each other. (c) A few students were nominated to answer questions directed at them by the rest of the class.

In advanced level colleges, as part of a four-year course on philosophy and liberal arts, students conducted research on subjects such as logic, ethics, physics, metaphysics, and various disciplines related to mathematics, the aim behind this being the gaining of knowledge (*scientia*) and wisdom (*sapientia*), which constituted the key factors in eloquence. For example, in the first year the students studied logic, which was judged to be a crucial medium for the effective study of philosophy and theology, that came later. In other words, they received an orderly grounding in the principles of thought. Nevertheless, the students did not merely audit lectures, for during the reviews or debates that were conducted at the

close of the day, they strove to deepen and digest the content of the lectures, while closely adhering to the professor's direction. This teaching methodology involving lectures, reviews, debates and so on was adhered to in the same way, even during the four years of philosophical and theological study that came later.

In the theological courses at the highest stage of the advanced college, in order that students (most of whom aspired to become clerics) might gain a real mastery over and attain a grasp of Christian scholarship and perception, there were certain demands made of them: ① They had to acquire a thorough and step-by step grounding in the *Summa Theologiae* of Thomas Aquinas. ② The *Summa Theologiae* had to be studied from the perspective of the Holy Bible, and its links with the Bible had to be probed and interpreted. ③ Students had to expose the Holy Bible, including both the Old and New Testaments. Lectures were given to students on these three topics, within the space of four years, but besides these, lectures were also offered on subjects such as the decrees of the Church, the writings of Popes, and Canon Law, and on issues related to apostolic work (*casus conscientiae*). Here, several concrete cases were chosen, and discussions were conducted as to how they may be solved, and this was done from the perspective of saving souls. The study of Hebrew was considered vital for Biblical studies, and students advanced in the study of Latin and Greek, were targeted for this.

(2) Stress was laid on a good lifestyle, while leading a life that was both religious and spiritual, was urged. An academic training aiming at Humanistic culture and eloquence, and the gaining of knowledge and insight as well as Christian wisdom and piety, was desired. Concretely what this meant was: ① Daily attendance at Holy Mass. ② Participating in lectures on Christian doctrine each Friday. ③ Enquiring each day into one's heart and one's mode of living. ④ Receiving the sacrament of

penance at least once a month. ⑤ Listening to the public sermon on Sundays. ⑥ Reciting the Lord's Prayer or Ave Maria at the beginning and close of each day's lectures, and so on.

(3) The composition of the staff was varied, and the adjoining milieu too was multiethnic and teeming in diversity. On scrutinizing their ethnic grouping we see that apart from Spaniards, French, and Italians, there were Germans, Dutch, Flemish, and people from Savoy. Indeed, it seemed as though delegates from all areas of western Europe had assembled. On perusing the institutions where they had studied or acquired their teaching credentials prior to arriving in Messina, we notice again a wide variety, for they include cities as diverse as Paris, Leuven, Cologne, Padua, Bologna, Avignon, Gandia, and Coimbra.

Besides that, (4) They were aware of the value of personality formation, due to the influence of certain professors who served as living models. (5) The necessity of scholarly vacations was realized, and in the case of students who had surpassed the advanced grammar class, there existed clear rules regarding vacations. (6) At the commencement of the school year (which began in October), a public academic presentation was arranged. Here, lectures were offered by professors, public debates were conducted by students of each class, orations were delivered, and the recitation of poetry and reading of compositions was carried out. (7) Lectures were offered free of cost. This was done in fidelity to the spirit of the teaching in the Gospel of Matthew 10:8, where it is stated that what was received freely should also be given freely. The outcome of this was that the doors of the college were opened wide to citizens, as though a treasure trove of learning and wisdom had been handed over to them.

Thus within the Jesuit college of Messina, efforts were made to foster and turn out people having a grasp of 16th century humanistic culture, philosophical liberal arts, and also theological culture. They were people

blessed with wisdom and learning, piety and eloquence, or in a word, people who had acquired a proficiency over Christian Humanism. The youth who studied at this university sought to become embodiments of such individuals. On the one hand they made positive efforts to become talented participants of the society



The Gate of Messina Monastery

and culture to which they belonged by contributing to the creation of a world based on evangelical love and justice, while on the other, through their dedicated efforts they had hopes of attaining salvation, both in this world and in the world to come.

Responding to these hopes and successes, the rules and policies concerning the purpose of the Society also began to be revised. In July 21, 1550, His Holiness Pope Giulio III, in his Papal Bull *Exposcit Debitum* which reconfirmed the basic nature of the Society, stated that the aim behind the institution of the Society was chiefly to enable Jesuits to “engage in public preaching, lectures, and any other ministration whatsoever of the word of God.” That is to say, the fact that Jesuits were called to lecture in universities and colleges, and engage in school education, was ratified anew. In other words, both the Pontiff and the Jesuits avowed that through school education, ‘human beings were required to progress, both in terms of real life and in terms of understanding the teachings of Christ, and they needed to work for the spread of faith in Christ.’ They were called upon to find an apostolic significance alongside their mission work, as well as the other tasks they undertook for the salvation of souls. Education, both in schools as well as colleges and universities, was endorsed as a vital task the Jesuits themselves had to undertake.

A turnabout such as this may at first sight appear to conflict with what the early Jesuits had envisioned, but in actual fact however, if we were to study these changes from the perspective of Ignatius's own perception of human beings that lay at the base of their vision, we realize that such a change was indeed natural and something to be expected.

Ignatius's comprehension of human beings was thus: 'Discard the clothing you have worn so far and dress in the clothing and weapons of Christ.' This conviction intensified within him after the course of his own life had changed, and he had spent some time in prayer and austerity at the city of Manresa in Spain. At that time, if we were to systematically lay out what he had acquired through his experience, it would perhaps appear as follows.

(1) Until then Ignatius was of the belief that what people generally referred to as God was a sublime entity existing in the distant heavens, and as stated in the Bible, this same entity was now with him, and would continue being with him forever. Not only that, this God whom Christ referred to as 'Father,' subsists as Creator within our fabricated world of heaven and earth, in the concrete events of history, and within each and every human being, striving for the good of humanity as well as the good of each and every individual, in a mood of love and compassion. Also, this love of God the Father was transformed into his Son Jesus Christ, the Word of God, as revealed in his life, and particularly in his passion and resurrection.

(2) We humans accordingly are called upon to seek out this God who is present and active within all events, within our neighbor, and within ourselves. We need to pinpoint his workings as well as his invitations to us, and, while eliminating all that may impede his works, we are called upon to serve both God and mankind, by responding to his call with open hearts. It is through this type of an existence that we attain salvation.

(3) However, in such situations, God desires the free response of humans, a response inspired by the love of God and not by fear of chastisement or any self-seeking motive. Here, what is vital for us is a diversity of interior passions and distortions, as well as the experiences and education we on our own have gained so far. Cleansing our hearts as well as our speech and behavior is crucial, due to the fact that they grow clouded by social trends and customs, and at the same time, we need to be guided on to a stage in our nature where rulings can be made and decisions can be taken, in an ambiance of freedom. This, in other words, would be a stage of sanctification, and this precisely is how God guides each one of us.

(4) Conversely, on receiving thus God's influence, human beings who are images of God, can as an effect of their renewal via such purification and sanctification, truly become God's children. When confronting mammoth crossroads arising in the midst of life, and assailed by interior and exterior influences, we need to gaze calmly and fixedly at the multiplicity of thoughts evoked within our hearts. By scrutinizing them vigilantly and studying their movements, we can decide on the path of life that was originally meant of us (namely the will of God). Striving to lead lives of sincerity and fidelity to our chosen path, is the same as responding to God's love. This in itself would serve as an imitation of Christ, and it manifests itself in the form of service to people and society. This, for human beings, is the path to salvation.

Ignatius thus was aware of the fact that the road along which he was called upon to travel was never in any way world-renouncing, or alienated from people and society. It involved treading the path of conversion comprising purification and sanctification, and of leading a life that would be useful for the service of God and society. For this, he strove first of all to be a self-reliant person endowed with freedom and responsibility, as well as a driving force for the evangelization of people, and solely by

virtue of his zeal and missionary sense, he realized also that if anything, it may be that he would cause harm both to himself and to society.

Reflecting on his years at Manresa, Ignatius declared, "Around this time, God himself taught and guided me exactly as an elementary school teacher would guide and teach children." Viewed from the standpoint of education, what is curious here is the fact that Ignatius clearly affirmed that "God himself was the teacher of mankind," and this is a truth he realized from his encounter with the Biblical tradition. In other words, for Ignatius, the meaning of the words of Christ in John 14:6, namely, "I am the way, truth, and life," is to be acquired by coming into contact with the life and livelihood of common people, and the words in the Gospel of John 8:32, namely "the truth will make you free," are words whose significance he himself had deeply imbibed.

Centering on his interior experiences at Manresa, and including also his numerous other experiences of later years, Ignatius eventually brought out a book comprising "things useful for oneself and things perchance useful for others," entitled '*Spiritual Exercises*.' Here, just as we train our bodies by walking or running, that is, what we refer to as physical exercises, this book (which happens to be a virtual guidebook) probes our heart and lifestyle, and by the use of spiritual practices such as retreats, contemplations, vocal prayer, mental prayer and so on, it deals with a diversity of ways to prepare the soul.

In truth however, it was not just Francis Xavier and other early companions of Ignatius, but all members of the Society of Jesus who relived the pilgrimage of Ignatius, through their experience of these *Spiritual Exercises*. By this means they sought to transform and revitalize their lives, and strove to imbibe the Spirit of the Society. Viewed from this perspective, we see that the *Spiritual Exercises*, when considered both

from a personal and human standpoint, may be viewed as a program of human education that nurtures ever more, free and autonomous personalities. In the *Spiritual Exercises* we can identify some specific educational principles, such as the following.

(1) Educational in itself is not the purpose. It is a means whereby people might learn the original way of living and fulfill the significance of life. For that purpose education includes the nurturing of values, and offers a direction to the student's view of the world and life.

(2) However, nurturing of values does not imply infusing or forcing something within them from the outside. The object here is the fostering of self-reliant individuals, who, by utilizing to the maximum their freedom and sense of responsibility choose their own lifestyle, draw up their own plans, and live in accordance with them. This implies that education as a whole has to be organized with a focus on the learners. The concerned individuals on their own initiative need to arouse within themselves an incentive for learning. They need to acquire the habit of continually testing and revising themselves, and develop the ability to continue such progress on their own. For them, to receive guidance in this manner, is vital.

(3) For this, the content and direction of education, the class, the guidance offered with regard to life, and so on, have all to be planned and designed in a way that the goal may be attained, and the purpose fulfilled to the maximum. At the same time however, care should be taken to structure it gradually, in accordance with the learner's development, ability in study, and so on.

(4) On the other hand however, this structuring should not lead to rigidity. Rather, educational activities need to be personalized in accordance with the age, culture, and intellectual ability of the learners. By using a variety

of methods and diversity of content, we need to encourage learners to embark upon their own activities and make their own discoveries, and by urging them to utilize their bodies, minds, and, hearts, we need to awaken within them a desire to embark on study activities that involve their entire personality.

(5) Hence professors, by forging personal bonds of trust with learners, and as persons rich in experience and as their life companions, should serve as models for learners to emulate, and at times offer them guidance and counsel. However, as learners grow in confidence and self-reliance, a role such as this is obviously bound to decrease. As regards the evaluation of the professors too, it is a fact that students in time will learn to acquire both the significance of the evaluation as well as its procedure, and eventually reach a stage where they will be able to carry out such evaluation on their own.

(6) There is no single answer to the issues raised above. Responding to the Jesuit spirit of 'magis,' that is, continuously improving and ceaselessly seeking a better way, is something indispensable for educational activities.

Along with the above-mentioned Ignatian understanding of mankind, these principles embody the essential spirit sustaining the growth of Jesuit schools, and they have been passed down to us incessantly via the vehicle of Jesuit education, over a period transcending 400 years. They will indeed be constituted part of the '*Characteristics of Jesuit Education*' (1986).

(Translated by Cyril Veliath)

● Column I

It was a brief period of 30-some years, but the seminaries attempted to integrate the Christian faith and European humanities, while furthering study of Japanese classics like the *Taiheiki*. Music and sports were also included in the curriculum and provisions were made for vacations. Paulo Miki was among the very first students at the Azuchi seminary, as were Ito Mansho, Chijiwa Miguel, Hara Martino, and Nakaura Julian of the Arima seminary formed the Tensho Youth Embassy to Europe.

Meanwhile, the textbook *Essential Points of the Lectures*, published in the 1590s in a Latin translation by Pedro Gómez, and the Japanese version of it, were being used in the college. A three-part work, the first part, called “Celestial Spheres,” deals with astronomy (to explain the principles of solar



A diagram explaining that the earth is round.

and lunar eclipses), geology, meteorology, and the calendar of Pope Gregory XIII (the Gregorian calendar of 1582). The second part, “Anthropology,” based on Thomas Aquinas’ *De Anima* of Aristotle,” explains the originality and dignity of humanity as having the power of reasoning. The Third part, “The Teaching of Truth,” is theology, giving an outline of the systematization of Christian dogma approved by the Council of Trent, and takes into consideration adaptation to the

culture and tradition of Japan. In general, the same level of education was imparted as was being imparted in Western Europe at that time, and partial thought it may have been, it was introduced into Japan during the Edo Period as “*Namban* (Southern Barbarian) Learning.”



The Gutenberg printing press that was brought to Japan by the Tensho Embassy. (Reprint)

This photograph was provided by the Amakusa Collegio Hall.

Also in the college the printing press brought back by the *Tensho* Youth Embassy to Europe was used to print what was called the Christian Press. These were not only Christian religious books and doctrinal books but also dictionaries like a

Japanese-Portuguese Dictionary (1603 ~ 04) and a Japanese dictionary called a *Collection of Fallen Leaves* (1595), literary works like *Aesop's Fables* (1593), and *Tales of Heike* (1592), numbering what is suspected to be a hundred volumes, of which only 30 have survived. The college also had an art studio attached.

Chapter 2

“Affordability” and “For the Poor”

—The Origin and Method of the Vision of Contemporary Jesuit Education—

Former teacher of Hiroshima Gakuin
Junior and Senior High School

Kohei Matsumura

Foreword

“It’s an issue of affordability and for the Poor!” In the summer of 2016 I was in Chicago, and while there, I entered on a certain occasion the automobile of a Jesuit scholastic named Eric Immel who worked at the newly erected Arrupe College, and traveled along with him from Little Italy, which happened to be the name of a Jesuit institution lying in the nearby vicinity, to the center of Chicago, where his work-place was located. On our way there I asked him the following question. “What do you think the future vision of Jesuit education would be like? In answer to this he uttered the words I just mentioned, namely ‘affordability’ and ‘for the poor.’ Beginning with the United States of America, the Jesuit institutions the world over are generally labeled and known as so-called ‘elite institutions.’ Indeed, in Japan too, Jesuit schools at one time had adopted as their target the ‘development of social leaders,’ and if the truth be told, many graduates of these institutions have indeed played critical roles in society, and displayed a spirit of leadership in their tasks. Yet, when terms such as these, namely ‘social elites’ or ‘social leaders,’ which carry a certain nuance, are applied to the Jesuit schools of the world, one cannot help but get the feeling that they differ a little from what Eric meant. However, the words of Eric do reveal a legitimate vision that lies

at the tip of a great turning point in Jesuit education, and the truth is that the Jesuit institutions the world over, have indeed begun to share the vision revealed by those words. In the following passages I intend conducting an investigation into contemporary Jesuit education, by employing examples related to the origin and method of this vision, as well as its concrete development.

I. The Origin of Contemporary Jesuit Education

—Men and Women for Others

One of the crucial turning points in Jesuit education occurred in 1973, when the Superior General of that time, Fr. Pedro Arrupe, inaugurated in the city of Valencia in Spain, the 10th International Congress of Jesuit Alumni of Europe. In the course of the address he delivered on that occasion, and declared:

Today our prime educational objective must be to form men-for-others; men who will live not for themselves but for God and his Christ—for the God-man who lived and died for all the world; men who cannot even conceive of love of God which does not include love for the least of their neighbors; men completely convinced that love of God which does not issue in justice for men is a farce.

In Sophia University as well as other Jesuit institutions of Japan, I am sure that not just students but members of the teaching and administrative staff as well, have come across the words ‘men and women for others,’ ever so many times. Also, the curricula as well as the educational programs of those institutions, are indeed rooted upon an incessant awareness of this phrase.

The fact that Fr. Arrupe uttered this phrase in the presence of vast numbers of graduates of Jesuit institutions, is indeed an issue of profound significance, for after having uttered those words, he enquired of them as follows. “First, let me ask this question: Have we Jesuits educated you for justice?” In the education he had encountered within Jesuit schools until then he had received a great deal of nurturing from several Jesuits, and that query of his was addressed to graduates who were already involved in diverse activities within society. Then, as though desiring to stimulate reflection over the Jesuit education that had been conducted so far, he continued addressing them as follows:

“You and I know what many of your Jesuit teachers will answer to that question. They will answer, in all sincerity and humility: No, we have not. If the terms “justice” and “education for justice” carry all the depth of meaning which the Church gives them today, we have not educated you for justice.”

In the course of his lecture Fr. Arrupe endeavored to realize a drastic shift in the course taken by Jesuit education, and under the banner of justice he sought to exert a strong impact upon the educational business as a whole.

When Fr. Arrupe used the word ‘other,’ he meant it in tangible terms. He used it to refer to the poor and oppressed of present-day society, and his words serve to evoke in us distinct images of grief-stricken faces. Those who struggle so that individuals such as these may obtain justice, are undeniably the ones Fr. Arrupe refers to as ‘people for others.’ Nevertheless however, while speaking to those graduates, what may have been the reasons behind his stressing to such an extent the elements that were lacking in the Jesuit education they had received so far? In the lines

below I intend probing the changes that have occurred in Jesuit education as viewed from two angles, namely the ideology of 'free education,' and the footsteps of Fr. Arrupe.

■ (1) Free Education and School Tuition

I first of all want to present a general picture of the backdrop to the queries of Fr. Arrupe, as well as that of current Jesuit schools, when they are viewed from the angle of free education and payment of school tuition. The Jesuit institutions established at the time of the founder and first Superior General of the Jesuit order, namely Ignatius of Loyola, were from the start rated highly with reference to their lectures and education. They were at the same time administered with the aid of financial support offered by benefactors, and there lay a profound significance to the fact that such education was offered by them to people, free of charge. (Please confer the earlier chapter). In European societies of those days however education was by no means always available to the common populace, and it was only individuals with links to certain social classes that were able to avail themselves of it. In the Jesuit schools of those days though, since education was offered free of charge, the administrators were able to reach out to many more people, and they in consequence became vessels of communication whose reach permeated a far wider section of society, comprising a diversity of social classes. However, this free offer of education in course of time gradually became hard to continue, for in 1773, the Jesuits, due to the social settings of that period and particularly certain political and other issues that arose between the Church and State, were exiled and suppressed in many nations. His Holiness Pope Clement XIV issued a papal brief entitled *Dominus ac Redemptor Noster* that publicly banned the Jesuit order, and they were finally driven to dissolution. As a result of this many Jesuit schools suffered closure, but in 1814, when the

storm of suppression had in part calmed, His Holiness Pope Pius VII issued the brief *Catholicae fidei*, where he reinstated the Jesuit order. In actual fact though reviving the educational activities was not easy. During the forty and odd years of their subdual, when the Jesuits had been dispersed, modern states came to be born, and in the process of their formation, circumstances surrounding education also suffered a change. When ideas of educating the nation’s multitudes on the basis of nationalism came to pervade Europe, the Jesuit schools came to be viewed as private institutions, and as a result, offering education to the average student free of charge, became for them an ideology hard to realize. Specifically, in Jesuit schools of America after the 1820s, the possibility of collecting tuition from students began to be debated, and in 1833, the Superior General of the Jesuits, namely Fr. Jan Philipp Roothaan, assented to the fact that in America, the Jesuits had no choice but to accept tuition from the average student. Since that time the Jesuit schools, starting with America, began to spread over the entire world. There was only one way that Jesuit schools could spread so widely, and that of course was by utilizing the support of not just Jesuits but lay members as managerial staff, to carry out the works of supervision and management. Today, as is well known tuition has risen steadily in the United States, and Jesuit schools too have altered into institutions where only children of a particular social class can commute to, a class where families can afford to pay tuition.

■ (2) Fr. Arrupe’s Looks and Invitations

What would Fr. Arrupe have possibly felt regarding this situation in which Jesuit education was involved? When we probe the latter half of his life, we get a glimpse of the source of the words, ‘men and women for others.’ He too, on the road of fluctuating experiences he was led on to

follow, provides us with a view of the transitions in today's world, and even more, he provides us with a view of the intimate links that exist between the Society of Jesus and Japan.

Fr. Arrupe was born on November 14, 1907, in the city of Bilbao in Spain. Prior to his entering the Society of Jesus he had set his eyes on becoming a doctor, and had hopes of saving many lives, but in 1927 he entered the Jesuit novitiate at Loyola, and began to tread the road of life as a member of the Society of Jesus. However, soon afterwards in 1932 Jesuits were expelled from Spain due to the government's anti-Catholic policies, and so he continued his philosophical and theological studies in Belgium and Holland. Later while in the United States he concluded his theological studies, and from his experience gained earlier in the field of medicine he worked a little in the field of psychiatry, and finally in 1938 he returned to Japan and began working at the Church in Yamaguchi. However, at that time, on suspicion of being a spy he underwent imprisonment in a solitary cell for roughly a month, fearing all the while that he would eventually suffer execution. In 1942, he was appointed Novice Master at the Jesuit novitiate at Nagatsuka in Hiroshima, and from then onwards involved himself in the training of the Japanese novices and scholastics.

On August 6, 1945, at 8:15 AM, as he worked as usual within the novitiate at Nagatsuka the atomic bomb was dropped, and Fr. Arrupe himself describes the moment of explosion as follows. "I was in my room with another priest at 8:15 when suddenly we saw a blinding light, like a magnesium flare." He continues saying that they were greatly shocked, and wondered what could have happened. It was about three or four minutes, but it seemed like an eternity. After this, along with other Jesuit companions he traveled around the city of Hiroshima, offering aid to the wounded and suffering. In 1965, that is, twenty five years after the

explosion, reflecting on the incident he gave a deeply moving description of it as follows:

"The explosion of the first atomic bomb has become a para-historical phenomenon. It is not a memory, it is a perpetual experience, outside history, which does not pass with the ticking of the clock. The pendulum stopped and Hiroshima has remained engraved on my mind. It has no relation with time. It belongs to motionless eternity. Sad eternity. A constant presence of that human tragedy."

After the war, Fr. Arrupe was first appointed vice-provincial and later on provincial of the Japan Jesuit Province, and after the demise of the 27th Superior General, Fr. Jean-Baptiste Janssens, he himself was chosen as Superior General, during the 31st General Congregation of the Jesuits, that was held during the years 1965-66. This event happened to coincide with the opening of the Second Vatican Council of the Catholic Church, which was held during the years 1962-65. In this council, the militant attitude to the world and secular society that the Church had hitherto adopted finally came to an end, and an attitude of adapting as far as possible to the demands of modern society, and the issue of renewal, came to be espoused as principal themes. With a view to conforming to this ground-breaking change in the stance of the Church, the Society of Jesus too under the guidance of Fr. Arrupe, came to undergo a major variation. In 1974, with a view to focusing on the renewal of the Society of Jesus, Fr. Arrupe initiated the Society's 32nd General Congregation. In that congregation, more than anything else the service of faith and promotion of justice were affirmed as the current mission of the Society, and it was further insisted that these issues had to be emphasized in all Jesuit activities. He had experienced the upheavals arising in the world at the time of the Cold

War, and in the course of its many traumatic conflicts he had lived alongside the suffering, the poor, and the oppressed, and gazing upon the world, he had pondered over it. He mentioned two possible needs of the modern world. First, in order to realize the transformations that are essential, the most influential people need to undergo a change of heart or conversion, and second, unjust structures needed to be forcibly destroyed. While underscoring the keywords ‘conversion’ and ‘justice’ (or righteousness or fairness), he always attached deep significance to the interior problems of every single person, as well as those of modern society as a whole.

Let us return for a moment to the words of Fr. Arrupe, namely the words ‘men and women for others,’ which he had uttered in the course of his address to the Jesuit alumni. Fr. Arrupe, having a background replete with the type of experiences just described, conveyed his message concerning a need to bring about a change in the method and direction of Jesuit education, to the alumni. After having done so however, he proceeded to declare as follows:

Jesuit education in the past had its limitations. It was conditioned by time and place. As a human enterprise it will always be. But it could not have been a complete failure if we were able to pass on to you this spirit of openness to new challenges, this readiness for change, this willingness—putting it in Scriptural terms—to undergo conversion. . . . In short, interior conversion is not enough. God’s grace calls us not only to win back our whole selves for God, but to win back our whole world for God. We cannot separate personal conversion from structural social reform.

Present-day Jesuit education is specifically in line with these words of Fr. Arrupe.

II. The Method of Jesuit Education

“Our ideal is the well-rounded person who is intellectually competent, open to growth, religious, loving, and committed to doing justice in generous service to the people of God.” Since Fr. Arrupe had used the phrase ‘men and women for others,’ the 29th Superior General of the Jesuits who followed Fr. Arrupe, namely Fr. Peter Hans Kolvenbach, portrayed the type of persons Jesuit education sought to turn out by using the above paragraph, so that the image evoked within us by those words of Fr. Arrupe, may be grasped more clearly.

The image evoked by the phrase ‘men and women for others,’ which as I stated earlier was used in 1973 during the 10th International Congress of Jesuit Alumni of Europe, became more intensified in the course of the speech delivered by Fr. Arrupe in 1980 at the gathering in Rome of representatives of Jesuit schools, and links between the present-day mission of the Jesuits and their education, came to become even more concretized. Even so in the following year, namely 1981, Fr. Arrupe suffered an unexpected collapse, and the 33rd General Congregation was organized in order to elect a new Superior General, who happened to be Fr. Kolvenbach. Fr. Kolvenbach later included the words ‘with others’ to Fr. Arrupe’s phrase of ‘men and women for others,’ and in 1986 he compiled the *Characteristics of Jesuit Education*, wherein he laid out new guidelines for Jesuit education. Likewise in 1993, in order that the ideology underlying this work may engender a much more concrete method of Jesuit education, that is one that could be employed at the site of the educational activities, he compiled yet another work as well, namely, *Ignatian Pedagogy: A Practical Approach*. In the lines below we get a glimpse of the special features of these two publications.

■ (1) The Characteristics of Jesuit Education

This publication, aside from enabling Jesuit education to correspond to the contemporary guidelines of the Jesuits, also urged the rectification of drawbacks existing in the earlier version of Jesuit education. For instance, it was clarified that the purpose of Jesuit education was no longer the nurturing of social and economic elites, but rather, the nurturing of leaders who would be of service to society. What was particularly underscored here was the fact that such service had to be realized by their turning out into becoming ‘men and women for others, with others.’ In other words, they had to acquire a profound concern for the poor, and their education had to be a lifelong program, a program that would continue even after their graduation.

This publication also makes it crystal clear as to how the diverse talents that abound among the students of Jesuit schools need to be put to use, for it states, “Jesuit education helps students to realize that talents are gifts to be developed, not for self-satisfaction or self-gain, but rather, with the help of God, for the good of the human community.” It insists clearly that all who study at Jesuit schools need to utilize their talents for the service of others, and the ‘others’ mentioned here, are obviously the same individuals referred to by Fr. Arrupe, when he used the term ‘men and women for others.’ Consequently, the ‘others’ indicated in the *Characteristics of Jesuit Education*, also undoubtedly refer to the poor and down-trodden, for the document declares,

“Reflecting on the actual situation of today’s world and responding to the call of Christ who had a special love and concern for the poor, the church and the Society of Jesus have made a “preferential option” for the poor. This includes those without economic means, the handicapped, the marginalized and all those who are, in any sense, unable to live a life

of full human dignity.”

The *Characteristics of Jesuit Education* moreover presents its perspective of the Jesuit school graduates, for with regard to the Jesuit alumni continuing their education as a lifelong venture even after graduation, it is stated as follows:

“Jesuit education recognizes that intellectual, affective, and spiritual growth continue throughout life; the adult members of the educational community are encouraged to continue to mature in all of these areas, and programs of ongoing formation are provided to assist in this growth.”

Fr. Arrupe’s comments regarding the essence of this life-long education are vital, for he declares, “It is important to learn; but it is much more important to learn how to learn, to desire to go on learning all through life.” Indeed, an individual like this, namely one endowed with such a temperament, concern, and energy, symbolizes not just men and women for others, but also our links to issues of justice.

■ (2) A Method of Guidance consisting of Walking Together

The issue of guidance is rooted in the Spiritual Exercises of St. Ignatius, and one may perhaps describe it as a process of actualizing Jesuit education. What is specifically vital about it is that here, the relationship between the student and teacher, is viewed and accepted as being superimposed upon the relationship between the retreatant and guide in the Spiritual Exercises. In the Spiritual Exercises, the guide never provides any decisive answers to the retreatant. Rather, he merely accompanies the retreatant and enables him to discover something, or

arrive at an experience of God. In a similar way, in the mode of guidance dealt with here, the teacher does not provide answers to the students, but rather assists them in discovering something and arriving at the truth. What is crucial here is the student's subjective awareness in the learning process, and accordingly, the teacher here no longer becomes a provider of knowledge.

Also, the thought process of St. Ignatius is found to be reflected in the mode of guidance we deal with here. The approach to learning we are concerned with consists of five stages, as follows: Context → Experience → Reflection → Action → Evaluation. What constitutes the core issue here are experience, reflection, and action. Experience is not limited to a mere intellectual grasp of issues. As stated in the *Characteristics*, "the educational process recognizes the developmental stages of intellectual, affective and spiritual growth and assists each student to mature gradually in all these areas." What is critical here is that the student feels some movement in his heart. Hence, what is viewed here as vital for the student, is for experiences such as this to be directly and genuinely undergone by him, and that he acquire knowledge also via indirect means, such as by the reading of books and attendance at lectures, and thereby deepen ever more his taste for knowledge.

Reflection is a process, which under the stimulus of memory, perception, imagination and feeling acquires a grasp of the topic to be studied, and relates it to other truths. It involves the student grasping the significance of the topic, deepening his interest in it and communicating this interest to other areas, and even more, by discovering his own relationship to the topic, he is called upon to discern the duty it imposes on himself. However, experience and reflection to the very end, have close mutual ties to each other. In other words, reflection is always accompanied by some form of experience, and experience when combined with reflection, grows more

profound.

The word ‘action’ that I use here is based on phrase 230 of the Spiritual Exercises, which states, “love ought to manifest itself in deeds rather than in words.” Ignatius from the very start desired that graduates of Jesuit schools be of service to Society. In a similar way, what is hoped for in this series of processes is that these graduates be guided on via deep experience as well as reflection, by the practical tasks they feel called upon to accept, and the contributions they feel called upon to make. To put it more succinctly, what is hoped for here is that they “offer an ever greater service, a service that will prove useful towards the enhancement of human society.”

As stated above, in the sort of guidance that comprises ‘walking together,’ the students on their own, urged on by their personal experiences, will discern an interior movement within their hearts. Through the process of reflection they will then ponder over the many possibilities related to their subjective commitments, and eventually choose a procedure, whereby they may widen their view of social justice, as well as the tasks that are associated with it. After having imbibed this sequence and made it their own, they will begin to nurture it within themselves, and even after graduation they will persist in this learning. This is what we desire of them.

III. The Cristo Rey Endeavor: Challenges of Modern Jesuit Education and its Examples

“The idea of providing education to the poor, was originally an idea present in Jesuit education. Cristo Rey is in that tradition.” That was the reply I received from Fr. James Gartland, when I visited Boston and questioned him about the Cristo Rey educational model. Fr. Gartland has

the experience of having served several years as president of Cristo Rey Jesuit High School in Chicago, which is an institution that can indeed be said to have executed the modern version of 'free education,' about which I spoke of earlier. Recently, this new educational model has attracted the attention of many. This is a new educational model focusing on children of low income families, and it was developed in Chicago in 1996, chiefly by the staff of the Chicago Jesuit Province. It was the first Cristo Rey High School.

This educational model focuses on economic disparity in the United States. The primary aim here is for students to acquire university degrees, and the Jesuits consider it their mission to sustain the educational careers of their students, right from the time of their entrance into the university. Social analysis reveals that the issue as to whether a person has attained a university degree or not, is one of the major causes of economic disparity in the United States. Chicago in particular has its Cristo Rey High school located in an area inhabited by many low income Mexican immigrants, an institution indeed erected for the relief of the suffering poor.

■ (1) The Work Study Program

Here, I would like to ponder a little over a special feature of the Cristo Rey educational model, namely its Work Study Program, with regard both to the fact of the program being considered a model, as well as the creation of its website. In the Work Study Program, students are sent to work in companies or firms in the vicinity with which the



Cover page of the Information Pamphlet of the Cristo Rey High School

School has established contracts, and the money thus earned is used as payment for their tuition. The students are formed into small groups, and five days a week, one person from each group is sent to the same workplace, where he does the same job. By obtaining thus the salaries of the students, they use that money as payment for their tuition. Nevertheless however, it is a fact that salaries obtained by this type of a working program can never cover the overall tuition of the students concerned. Hence, the Jesuits try to gain the needed funds by soliciting donations, and by collecting reduced tuition from the students. Generally speaking, High Schools run by Jesuits within the United States can be expensive, with some even amounting to as much as 10,000 US dollars, which happens to be the national average. Yet in Cristo Rey, in keeping with the general financial situation of the families in the vicinity, the Jesuits strive to maintain the tuition below 3,000 US dollars, and thereby carry out their many educational activities.

Hence, students commute to the site of the corporations or companies with which Jesuits have forged contracts, and once there, they do the work required of them. In order that this program may continue, almost all Cristo Rey institutions have been located in urban districts, where there is easy access to these companies. Nonetheless though, the liaison of these schools with companies willing to oblige, can at times prove problematic to the program. In order that this program may be sustained and prolonged, the indulgence of such companies needs to be acquired, and the Jesuit schools too need to make incessant efforts to gather the necessary students. Even so however, due to the Jesuits creating a model such as this, there has been a steady rise in settings whereby poor students can obtain an education that is affordable.

■ (2) Modeling and Networking

The fact that Cristo Rey institutions were created as models for education, and the fact also that schools adopting this model are linked together by networks, are indeed inspiring factors in this endeavor. After Cristo Rey was created as an educational model, other Catholic Religious Congregations as well as Middle and High School educational institutions run by Catholic dioceses, came to adopt it. They started schools conforming to it, and governed them. That is to say, this program which had developed within the Society of Jesus, had now transcended the Society and spread all over the United States. At the moment there are 35 institutions that have adopted this model. Each institution has created a Cristo Rey network, and they all strive to strengthen mutual cooperation.

As a hub for this networking, a Cristo Rey Network center has been started in Chicago, where they carry out the tasks of supervision and administration. This form of networking has many advantages. For instance, cooperative systems can be offered for the purpose of training, sharing of ideas, and so on, between networks. In fact, teaching staff of educational institutions forming part of the network participate as a group in the training sessions the center sponsors, and in so doing they intensify both the sharing of the identity of the Cristo Rey model, as well as the mutual rapport existing among them. Also, data concerning issues such as fundraising routes and other financial matters, can be shared among the schools. In most Jesuit schools in the United States, certain individuals are employed as specialized staff to oversee the issue of fundraising. Here, details concerning the funds acquired, information related to their routes and so on, are not viewed as the monopoly of any single school. Rather, by using this network they are shared by all the institutions. Also, from their garnered experience of having set up many High Schools over a period extending twenty years, we see here that a procedure has also been

established whereby a new school modeled on the Cristo Rey, can be launched under a two-year plan. Currently plans are underway to expand this system, both nationwide and abroad.

In due course, the impact of the Cristo Rey model went beyond Secondary School education and showed signs of spreading to High Schools as well, and one may add that with regard to university education too, colleges targeting low income groups began to be opened. In 2015, Arrupe College, a two-year junior college focusing on children of low income families opened in Chicago, the aim being for graduates of this college to enter higher level universities. The tuition was fixed at 12,500 US dollars, but since all students received either scholarships or some other form of financial support, in actual fact the tuition they paid was less than 2,000 US dollars. Secondary and High School educational programs like this that target low income groups, appear to be very successful.

This educational venture of the Jesuits that commenced with the Cristo Rey institutions is blessed with a clear goal and vision, and it is indeed something that society needs. Responding concretely to demands that none so far have reacted to is indeed truly Ignatian, an act that exemplifies the spirit of ‘men and women for others.’

To Conclude

—The Educational Mission in the Present-day Asia-Pacific Area—

In the above paragraphs we learned something about the origin and method of the present-day educational vision of the Society of Jesus, as well as about certain examples related to it. When we study the reply of Eric that I quoted at the opening of this article, and specifically his use of the terms ‘affordability’ and ‘for the poor,’ we see that the educational vision of the Jesuits in our present world, has indeed been realized. The

educational undertakings of the Jesuits have been undergoing changes since the very beginning, and such changes continue to occur to this very day. This is solely due to the fact that they adopt a suitable method of discernment. Precisely speaking, they seek the will of God, respond to it, and in the process, transform themselves. This indeed was the method adopted by St. Ignatius, and it is this that we now need, not just in education but in every venture the Jesuits undertake.

Today, in the Asia Pacific area, the Society of Jesus undertakes in several regions the administration of schools and the promotion of Jesuit education. Here, aside from Japan, the countries involved in this program are Australia, Cambodia, Hong Kong, Macao, Taiwan, Indonesia, the Philippines, East Timor and others. What is principally underscored here is not merely the education of elites but all 'others,' and students are educated to grow into becoming 'men and women for others.' Through relentless discernment and insight, these educational institutions will continue to transform, by responding to the will of God.

(Translated by Cyril Veliath)

Jesuit Schools in Japan

Pre-history of Jesuit Schools in Japan

The Jesuit schools that arose in Japan during the 20th century have a pre-history dating back to the so-called “Christian Century” in Japan.

The basic pattern for Jesuit schools was set by the first Jesuit school, founded in Messina, Sicily, in 1548. This evolved into the Roman College, founded in 1551, which then served as a model for subsequent foundations. Already in 1580 such schools began in Japan, with two *seminario*, at Azuchi on the shore of Lake Biwa and Arima on the Shimabara peninsula, and a *colegio* in the Bungo territory of Funai (present-day Oita).

Actually, Francis Xavier, who brought Christianity to Japan in 1549, had dreamed of forming missionaries for Japan by starting a college to educate foreign missionaries in the Japanese language and manners and to teach Latin and European culture to Japanese students. This dream was realized in 1579 when Alessandro Valignano arrived in Japan. There were already some 140,000 Christians in Japan, and Valignano felt it was an urgent duty to form Japanese priests. This was how the seminaries were founded in Azuchi and Arima, and the college for teaching philosophy and theology to

Japanese and foreign missionaries was founded in Bungo. He also hoped to found a college in Kyoto to form sons of feudal lords and warriors into Christian leaders, but lack of teachers and funds thwarted this dream.

Moreover, the Azuchi seminary was destroyed during the Honnoji Revolt, which toppled Oda Nobunaga in 1582, and after moving around to various sites finally merged with the Arima seminary. Meanwhile the Bungo college had to suspend operation when Shimazu invaded Bungo in 1586, and, adversely affected by Hideyoshi's 1587 edict exiling missionaries, moved to Kazusa on the Shimabara peninsula, and finally settled peacefully in Nagasaki around 1600. However, these Christian schools were all destroyed when Tokugawa Ieyasu issued his edict of expulsion in 1614.



The Founding of Sophia University

■ Sophia University (1913)

In 1906, some 300 years after the total destruction of Jesuit educational facilities in Japan, Pope Pius X asked the Society of Jesus to start an institute of higher learning in Japan. In 1903 the Pope had met the Jesuit Fr. Josef Dahlmann, who had visited Japan on his way back to Europe after doing research in China, and heard from Fr. Dahlmann of his hopes for the Catholic Church in Japan. In November 1905, immediately after the end of the Russo-Japanese War, the Pope had sent a goodwill embassy to Japan with a personal letter addressed to Emperor Meiji. The head of this embassy was William Henry O'Connell, Archbishop of Portland, Maine, U.S.A., who presented the letter in person to the Emperor at his Aoyama Palace.

This embassy had another mission as well, which was to ascertain the possibility of opening a Catholic university in the capital of Japan. According to Archbishop O'Connell, he met with the Mayor of Tokyo and the President of the Imperial University, gathered information from various sources, and during his meeting with the Prime Minister, Katsura Taro, hinted at the establishment of a Catholic university in Tokyo. The Prime Minister immediately expressed his agreement, adding that it should be a university with an international character truly worthy of the name Catholic.

The Archbishop immediately replied that, from his experience in Japan, the Japanese people harbored a deep respect for Francis Xavier and that the Society of Jesus to which Xavier belonged had a long experience and a solid tradition in education, an outstanding international organization, and should therefore be entrusted with planning the establishment of such a university. The Archbishop wrote that the Prime Minister very enthusiastically expressed his total agreement.

Archbishop O'Connell reported this to the Pope, who then asked the Society of Jesus to open a Catholic university in Tokyo. No name or site had yet been determined, but in September 1906, at a General Congregation of the whole Society, the desire of the Pope was unanimously accepted. Two years later, three Jesuits of different nationalities, the German Josef Dahlmann, the Englishman James Rockcliff, and the Frenchman Henri Boucher were sent to Japan. They arrived on October 18, 1908, recommencing the Society's mission in Japan. Dahlmann was an expert in Indian and Chinese thought, Boucher was Superior of the French Institute in Shanghai and was conversant with the situation in China, and Rockcliff had been in St Louis, America, and knew British and American culture first-hand. Additionally, Japanese Fr. Hachita Tsuchihashi, an expert in Chinese characters, German philosopher Fr. Herman Hoffmann,

who would later become the first President of the university, and a number of Japanese professors cooperated in establishing the Jochi Gakuin Foundation in April 1911. This served as the parent entity for the opening of Sophia University (with the departments of philosophy, German literature, and commerce) in April 1913, approved under the law for professional schools. Later, in May 1928, thanks to contributions from Catholics the world over, financial difficulties for establishing a faculty were overcome and Sophia was approved as a full university (with a preparatory department of two years, a faculty of three years, a literature faculty with the departments of philosophy and literature, and a faculty of commerce).

In this way Sophia University was founded in Japan as an international enterprise. Moreover, right from the beginning, not only did the Western European culture of England, France, and Germany, combined with the culture of India, China, and America, which were the representative world cultures and civilizations of the day, come into mutual contact at Sophia University, but also the culture, thought, and scholarship of Japan found an outlet to the world through Sophia University. One fruit of this intercultural encounter was the five-volume *Catholic Encyclopedia* and the highly esteemed journal *Monumenta Nipponica*, which continue to be published to this day.

Such ventures have truly contributed to “bringing the world together,” enabling cultures, languages, scholarship, and people to encounter one another across boundaries. In this way, the desire of Xavier, the decision of Pope Pius X, and the wisdom and inventiveness of the Society of Jesus all came to fruition, as if to foresee the present internationalized and globalized world order.

Message for Young Future Leaders For Others, with Others



**President of Sophia University
Yoshiaki Terumichi**

The changes in global environment and the process of globalization appear to be advancing with unexpected speed in unpredictable directions. Society will also be hugely impacted by the development of AI and the advancement of data technologies. To be prepared for such changes, we need innovative ideas and concepts to lead a new society based on good ethics and values, as well as the skills to design society. I believe now is the time to exert our unwavering visions and beliefs rooted in human dignity. Through this book, please give thought to what it takes to become a new global leader who is always willing to be with others and to serve others. I am certain each one of you bear the qualities of such a brave leader to supporting the future to come.

■ Sophia University Junior College Division (1973)

In 1968 the Sophia School Corporation (Jochi Gakuin) acquired the Hadano campus in Hadano City of Kanagawa Prefecture, which eventually became the site of the Sophia University Junior College Division. Tennis courts, a baseball field, and lodging facilities were opened on the Hadano campus, which were used mainly by the sports clubs of Sophia University, but the major portion of the land remained unused. Meanwhile, the entrance exams for Sophia University were becoming progressively more difficult, although the university itself was much smaller than it is at present, with the result that many applicants did not pass the entrance exams. Among these were many outstanding young women. This gave

rise to the idea of having a junior college for women on the Hadano campus. In April 1973, the Sophia Junior College was established, with an incoming class of 250 in the one and only English Department of Sophia Junior College. In 2012 the name was changed to the Sophia University Junior College Division, but the number of students and the one and only English Department remain unchanged.

Message for Young Future Leaders For Others, with Others



**President of Sophia University
Junior College Division
Hiroshi Yamamoto**

“For others, with others” is an educational philosophy respected in all Sophia schools. However, if it remains a written statement it is meaningless. This principle is meant to teach us the importance of acting for others with others. At Sophia University Junior College Division, we take pride in our long tradition of providing “service learning programs” (classroom lectures combined with volunteering activities outside of school) and many students have taken advantage of this opportunity to enrich their learning. According to a survey we conducted recently, students who have experienced service learning tend to be more impacted by our educational philosophy, “for others, with others” than those who have not. Action is what makes a difference. I encourage you to think of what you can do “for others, with others” and take action.

■ Sophia School of Social Welfare (1964)

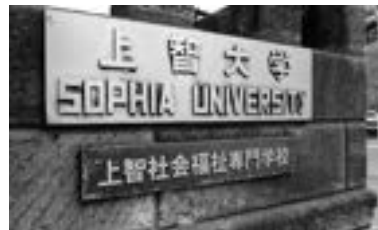
The founder of the Sophia School of Social Welfare is Fr. Peter Heidrich. Japan at the time had entered into a period of rapid economic growth and many people became interested in formation for specialized welfare work.

With his usual enthusiasm and perseverance, Fr. Heidrich worked at persuading the Sophia School Corporation, then the Ministry of Education, the Ministry of Welfare, and the Tokyo Metropolitan Government, of the need for this specialized education for welfare workers. The result was that in 1964 the “Sophia University Social Welfare Specialization Department” with a two-year night-course program was inaugurated. In 1966 the Tokyo Metropolitan Government approved it under the heading “miscellaneous schools,” with programs for social welfare directors and for nursery employees. Fr. Masao Tsuchida was the first Principal.

In 1976 with the revision of the Basic School Education Law, the name changed to “Sophia University School of Social Welfare” with the same programs retained but renamed. In 1982 the program for directors was again renamed and a course for young children was added to it. In 1987 the “Social Welfare Campus Ministry” was initiated, which concerned itself with bible study and Christmas Mass.

In subsequent years, especially with the revision of the Welfare Law concerning Young Children, courses were initiated, renamed, or abolished. From 2006 importance was given to practical “schooling” (“education where faces can be seen”) and more than 90% of the students were able to pass the national qualification exams. In 2008 the program for care-givers was shifted from the evening to the afternoon, and in 2011 the three-year course was reduced to two years.

The school aims to form each person based on Christian humanism. In its half-century history it has graduated more than 5,000 students. Many of these graduates have to make heroic efforts to balance their work and home life and are devoted contributing to society in their



various welfare work using the learning and skills they acquired at Sophia.

● Column II

In 1988 the 25th anniversary of the Sophia School of Social Welfare was celebrated with a letter to the students from Mother Teresa dated May 6. It was a letter of encouragement, speaking of the true nature of human beings to students aspiring to social welfare work.

“Life is the joy of loving and of being loved. Love is best expressed in giving and you who are learning - learn to give until it hurts. For it is the sign of True love.”



Mother Teresa's second visit to Sophia University
(April 23, 1982)

Message for Young Future Leaders For Others, with Others

● Stepping Toward Your Own Future



**Former Director of
Sophia School of Social Welfare
Sadami Takayama, S.J.**

I would like to congratulate and send my heartfelt welcome to all students who have joined our Jesuit educational institutions. As a member of Sophia School Corporation I would like to extend a few words to you. Please always be giving and willing to offer a helping hand without hesitation. We shall not forget to extend our thoughts to the many people in our world in despair, challenged with loneliness or unrest, or struggling with illness, pain, or severe poverty. I must say the world is filled with many of such.

Many of you may already be familiar, with the Parable of the Good Samaritan (Luke 10:25-37) in the New Testament. A man traveling from Jerusalem to Jericho is attacked by robbers, stripped of everything he had, beaten, and left half dead. A Priest serving in the Temple in Jerusalem and a Levite pass by on the other side, ignoring him, but a Samaritan traveller rescues him, healing his wounds and taking him on his animal to an inn, where he took care of him.

At the time Samaritans and Jews despised each other. However the Good Samaritan kindly gave a helping hand despite of their racial or religious differences. In his teachings, Jesus emphasizes the importance of going out to love our neighbors. To "love your neighbors as yourself" is of timeless importance.

As each of you value your uniqueness and work on developing your individuality, in your student life at schools focused on personal formation based on Christian spirituality, I hope that you will pursue in depth the significance of living "for others, with others". I extend my heartfelt prayers that you advance toward your bright futures with high aspirations in today's globalized and diversifying world.

■ Elisabeth University of Music (1948)

What is now Elisabeth University of Music in Hiroshima began as the Hiroshima School of Music in a small classroom building in April 1948. It developed into Elisabeth Junior College of Music in 1952 and a full four-year University in 1963, with a graduate school added in 1990.

It was the product of Jesuit Fr. Ernest Goossens' dream. "I firmly believed that though the city had indeed been reduced to a barren waste, the hearts and minds of the people would again embrace the love of Beauty. I resolved to dedicate my life to bringing to rebirth in the hearts of these people the spirit of love for art and love for peace that had been theirs in former times."

Fr. Goossens pursued his idea with help from devoted supporters in Europe and the United States, and particularly from his native Belgium, where Queen Mother Elizabeth showed such interest that her name was given to the school.

Beginnings of Secondary Education

■ First attempt at a high school in Hiroshima (1925)

Long before the Jesuits' return to Japan in 1908, the Society of Mary (Marianists) and the St. Maur Sisters of the Child Jesus had already founded schools in Tokyo for boys (Gyosei) and girls (Futaba). Once western Honshu was entrusted to the Society of Jesus as an apostolic vicariate in 1922, Jesuits began thinking about establishing a high school in that area. Fr. Hermann Hoffmann, Superior of the Jesuits in Japan at the time, having received financial aid from Pope Pius XI in 1925, bought land

in Kusatsu, Hiroshima, in order to build a junior high school, but the area was of military importance, making it difficult for foreigners to move around freely there, so the property was sold and the plan was scrapped.

■ Rokko Junior/Senior High School (1938)

The next prospective site was in Kansai. No Jesuits were working there, but the story has it that Mother Mayer, Religious of the Sacred Heart and sister of the Jesuit Blessed Rupert Mayer, was interested in having a boys' school near her girls' school in Obayashi (Takarazuka).

The search for a place to build a school began in 1936, with Rokko Junior/Senior High School opening in Kobe in 1938. Before long the World War II began, giving rise to problems with military authorities and other difficulties. For instance, there were military drills. The first Principal, Fr. Hayato Takemiya, was opposed to sending students to war. It is said that, when an army officer came to visit him and insisted on military drills at the school, Fr. Takemiya waxed eloquent with many arguments. The officer was duly impressed and left. The mid-morning calisthenics observed at Rokko to this day began as a substitute for military drills.

Fr. Takemiya was Principal for twenty seven years and looked back on those difficult days with these words: "The school was built because God wanted it, and God wanted me, such as I am, to be given the job of Principal. Therefore, no matter what transpired (for example, even if the school was abolished), we would simply follow the will of God."

After the war, the school structure was changed to the 6-3-3 system (six years elementary, three years junior high and three years senior high school). In advance of this, Fr. Takemiya had already inaugurated a six-year integrated junior-and-senior high school program, intending to hold on to the good points of the former five-year middle-school system, one of which was that older students would take care to train younger students.

Today's disciplinary set-up at Rokko maintains this tradition.

Message for Young Future Leaders For Others, with Others

● Our "Cornerstone"



**Former Principal of
Rokko Junior / Senior High School
Hajime Koizumi**

There is a huge stone about two meter long on each side in front of our main building. It has a copper plate with an engraving of words by our first Principal Hayato Takemiya. Known as the "stone monument" among our students, the landmark has become a common meeting point.

The stone used for the monument was not purchased for the purpose, but is a natural stone that was pushed onto our campus in the severe rain that hit Mt. Rokko in July 1938. Rokko Gakuin was founded in April 1938 which means that the school experienced a big disaster just as it was established.

In July 2018, eighty years after the Great Hanshin Flood, I had an opportunity to share the story of our stone monument with our students at a morning assembly, telling them that our stone monument is there to remind us and future generations of the disaster. Soon after, we were hit by the West Japan Heavy Rain Disaster, causing severe damages mainly in the Okayama and Hiroshima area. Facing the calamity gave me an opportunity to understand what people at Rokko had gone through eighty years ago.

Our stone monument reminds us that Rokko struggled at its start and that all faculty and staff members along with the school's first students joined forces to at school overcome such hardships.

When I was a student at Rokko fifty years ago, the stone had yet to be made into a monument and stood in the corner of our athletic field for students to climb during recess. How did the "Cornerstone" become our school "treasure"?

Upon the retirement of Fr. Takemiya, who had served for twenty seven years as our first Principal, there were strong requests for a statue of him. However, he strongly disapproved of the idea of being idolized in a photo, portrait, or statue, so instead his messages was engraved on a copper plate on the big stone: "All things pass by and disappear. Let us think quietly of the eternal essence that lies behind what passes by and disappears."



These words precisely express the founding spirit of Rokko, or the "Rokko Spirit" as we call it, resonating with the spirit of St. Ignatius Loyola, one of the founders of the Society of Jesus. It is, indeed, our "Cornerstone", the foundation of the education we offer at Rokko.

■ Eiko Gakuen Junior and Senior High School (1947)

In 1947, nine years after Rokko opened, Eiko Gakuen was founded. Admiral Decker, commander of the American Fifth Fleet stationed in Yokosuka, asked the Society of Jesus to establish a junior high school on land requisitioned from the former Japanese navy in Yokosuka. He was not Catholic himself, but wanted to establish a Catholic hospital and Catholic schools in Yokosuka. The Society refused him twice, saying it was burdened with the urgent problem of restoring its facilities from wartime ravages and was pressed for personnel and finances. But Admiral Decker refused to take no for an answer, and the Society of Jesus had to agree to opening a junior high school.

Fr. Gustav Voss had just returned to Japan after seven years of study in America to become the head of Sophia's history department. He was entrusted with the establishment of the new school, into which he adopted Rokko's six-year integrated program. Eiko Gakuen was officially approved in March 1947. The school opened in April under the aegis of what was then the Jochi Gakuin Foundation. With the later revision of juridical

corporations, Eiko Gakuen became a school corporation of its own, independent of Jochi Gakuin.

The school moved to its present location near Ofuna station on the Tokaido Line in 1964. The Japanese Self-Defense Forces had urgently asked to be able to recover the site of the former navy base. The present site (Tamanawa) was chosen after considering several locations and the school was built, even though roads providing access were not yet completed.



Message for Young Future Leaders For Others, with Others

**Principal of Eiko Gakuen
Junior and Senior High School
Shinichiro Mochizuki**

In 1947, two years after the end of World War II, many places in Japan were still at the stage of recovery from severe damages. Yokosuka (Kanagawa Prefecture) was not an exception as it had been a major naval port of the former Imperial Japanese Navy. Utilizing naval facilities left in ruins, a school was established : Eiko Gakuen.

Although we used old naval facilities as classrooms, our mission was not to rebuild a warbase but to create a foundation for peace to nurture and send out to the world who will become leaders in global peace.

Peace does not just mean not to engage in wars but to eradicate poverty and oppression from the world we live in. I believe that being a foundation for peace is a mission to be pursued not only by Eiko Gakuen but also by all Jesuit educational institutions.

■ Hiroshima Gakuin Junior and Senior High School (1956)

Hiroshima Gakuin Junior and Senior High School was founded in 1956, nine years after Eiko Gakuen. Fr. Emil Kircher, Jesuit Superior of the Hiroshima district at the time, wrote to the Superior General Fr. Janssens, who in turn prevailed upon the California Province of the Society of Jesus to take on the task of starting a school in Hiroshima, still rising out of the ashes of its atomic bombing. Just at that time a Carmelite nun, partial heir of her mother's fortune, made a donation to the California Province for the explicit intention of starting a school in Hiroshima to be dedicated to St. Francis Xavier and Therese of Lisieux, patrons of missionary work. The California Province solicited further donations, sent Jesuit personnel to support the founding of the school, and even after its opening continued to assist it until 1963.

The site chosen for the school was Furue, in the western part of Hiroshima. The Mayor of Hiroshima at the time recommended this site in view of the fact that the city was expanding in that direction. Moreover, it was originally the scenic site of the Asano clan's "Suikōen" villa. Fr. Hubert Schweitzer took the initiative in opening up the hillside by operating a bulldozer borrowed from the American military base in Iwakuni. Local people wondered what the military was trying to set up there.

"Shudo has tradition, but Gakuin has fluorescent lighting," the first class graduated from the school would say. Shudo is a school whose history traces back to the days of the Asano clan. In contrast, the newly opened Gakuin had no tradition, but it had fluorescent lighting! This was not meant to be self-deprecating, but was rather an expression of the pride they took in their school, which featured the latest equipment.

Message for Young Future Leaders For Others, with Others

● Four Treasures



Principal of Hiroshima Gakuin
Junior and Senior High School
Akira Miyoshi

“Be a good leader. A good leader is not to be served by others but to serve for others”, the first president of Hiroshima Gakuin, Fr. Hubert Schweitzer S.J. advised. He also considered being diligent, cheerful, pious, and pure, the “four treasured characteristics” of people and asked students to cherish such treasures within them.

These “four treasures” were derived from instructions for students in *Ratio Studiorum* (Official plan for Jesuit Education) promulgated by the Society of Jesus in 1599: in Latin, Industria, Obedientia, Pietas, Puritas (diligence, obedience, piety, purity, in English). These are the four characteristics to be complied by students and Fr.Schweitzer replaced to be “obedient” to be “cheerful”.

Understanding these four keywords just by the book does not convey the passion Fr.Schweitzer embraced at the founding of Hiroshima Gakuin. Therefore, I would like to share some teachings from my seniors: 1) To be diligent means not to be discriminating and even when overwhelmed, not to give up making challenges. 2) To be cheerful means to be honest and righteous, bearing no secrets as well as to accept oneself and others as is. 3) To be pious is to admire what is divine and eternal as well as to humbly appreciate the life that one has been given. 4) To be pure is not to be dominated by materialism or to be interfered by evil thoughts and to stay innocent, admiring beauty, virtue and righteousness.

Students and alumni have many opportunities to sing our Alma Mater which goes, “live up to your ideals with the four treasures in your heart”. I believe through these “four treasures”, Fr. Schweitzer intended to clearly present a vision of the ideal person that students of Jesuit schools should aim to become.

■ Sophia Fukuoka Junior-Senior High School (renamed in 2010)

Taisei High School, which is now renamed Sophia Fukuoka Junior-Senior High School was established in 1932 by the Bishop Fukahori of Fukuoka for the purpose of forming seminarians. In 1946 he decided to entrust the school to the Society of Mary (Marianists) in order to make its education available to other students as well, so in 1949 the school property and buildings were given over to the Marianists. Despite repeated efforts at improvement, the school suffered from a lack of entrance applications. The Bishop by all means desired the continuation of a boys' high school in Fukuoka, and in 1969 the school reverted to the Fukuoka Diocese.

However, difficulties in running the school continued, and the Bishop approached the Jesuit Provincial, Fr. Giuseppe Pittau, saying he would like the Society of Jesus to take it over. After careful consideration, Jesuit Fr. Masatsune Ono, former Principal of Hiroshima Gakuin, was sent as Principal in 1982, and the following year the Society of Jesus took on responsibility for the school. To mark a new start and to have a six-year program like in the other three schools, the junior high division was reopened in 1984. Besides the Principal, Jesuits active in the other three schools were also sent to Taisei, mainly as English and religion teachers. The Head Teacher at Rokko was also sent to be Head Teacher at Taisei.

In 2010 a cooperative agreement was drawn up with Sophia University, the school was renamed Sophia Fukuoka Junior-Senior High School and became co-educational, the first such venture among Jesuit high schools in Japan. A new school song was commissioned to Sophia University graduate, Mr. Man Arai, Akutagawa Prize recipient and composer of the hit song "A Thousand Winds that Blow."

Message for Young Future Leaders For Others, with Others



Principal of Sophia Fukuoka
Junior-Senior High School
Hideo Oishi

Sophia Fukuoka Junior-Senior High School prepares our graduates “to appreciate what is divine and to become leaders who serve others as well as to be a bridge of the world.” Where does the education that we offer lead our students? I believe it is exhibited in our original program, “Studies for others” (SFO). In SFO, students research global issues such as environment or poverty and consider the various obstacles hindering the resolution of these issues. From such proactive learning I am sure that students come to understand that all subjects contribute to practicing “for others, with others” in their future. I do hope that graduates of Sophia Fukuoka will bear an inquisitive mind and wide perspectives, as well as high ambitions as they leave our school toward a bright future.

■ *Colloquium* workshops (1981~85) and *The Characteristics of Jesuit Education*

In 1981 *Colloquium* workshops began in Japan, activated by the American Jesuit Fr. Vincent Duminuco and his associates. The *Colloquium* was a four-day workshop based on the spirituality of St. Ignatius and aimed at deeper appreciation of Jesuit education. It is worth noting that in 1986 Fr. Duminuco played a leading role inspiring an international team to issue the seminal document *The Characteristics of Jesuit Education*. A Japanese translation quickly appeared in 1988. A follow-up document entitled *Ignatian Pedagogical Paradigm* appeared in 1993. This second document did not focus on the ideals but on concrete pedagogy drawn

from Ignatian spirituality. A condensed translation of this document entitled *Tomo ni Ayumu* (“Proceeding Forward Together”) was made for use in Japanese schools.

The *Colloquium* and workshops aimed at understanding Jesuit education resulted in the establishment of the Jesuit Secondary Education Committee (JSEC), which proposed, inaugurated, and now operates seminars for newly hired teachers (Workshop A) and for younger veteran teachers (Workshop B).

■ Merger of School Corporations (2016)

In April 2016, five School Corporations founded by the Society of Jesus (Jochi Gakuin, Eiko Gakuen, Rokko Gakuin, Hiroshima Gakuin, and Taisei Gakuen) merged into one new Sophia School Corporation (*Gakko Hojin Jochi Gakuin*).

In February 2011, as soon as Fr. Yoshio Kajiyama became Provincial, he set up a Committee for Ministry Priorities to review all the works of the Japan Province. This Committee’s report was discussed at a Province Congregation held at the end of that year. The report noted that Jesuits would henceforth not be sent to the high schools. This began the process of looking for ways to assure the continuance of the schools as Jesuit schools.

With this in mind, the five board chairmen studied the possibility of merging the school corporations. The result was a recommendation to the Provincial that a merger was the most appropriate way of continuing the educational mission of the Japan Province. The Provincial advised forming a preparatory committee to promote such a merger, and the five chairmen brought in one person besides themselves from each of the five corporations to form the Preparatory Committee. Such was the process that led to the approval of the merger by the Ministry of Education and

Science.

The merger aims at a deeper permeation of Jesuit education both in the university and in the high schools. Additionally, in our increasingly global world, we need to discern the lights and shadows brought on by globalization so as to pursue our contemporary Jesuit mission through education. In order to attain this aim more effectively, a “Jesuit Education Center” was set up within the new Sophia School Corporation.

There remain numerous issues regarding how the mission of Jesuit education will unfold in Japan in the years to come.

(Edited by Sophia School Corporation Jesuit Education Center)

Jesuit Education: A Gateway to the Current Age

A Frontier Educational Project in East Timor

—St. Ignatius School and St. John de Britto Institute—

Colégio de Santo Inácio de Loiola Yoshitaka Ura, S.J.

In 2012, I was sent by the Society of Jesus, a male religious order of the Roman Catholic Church, which also happens to be the body that instituted Sophia University, to the Democratic Republic of Timor-Leste (hereafter referred to as East Timor), a nation that had experienced the ravages of the independence war. I was sent with the purpose of getting involved in the founding and administration of two institutions, namely the Colégio de Santo Inácio de Loiola and the Instituto de São João de Brito, and I have been there ever since.

1. The Historical Background of the Educational Project in East Timor

East Timor is located in the north of the Australian continent and south of the equator, and its area is roughly the same as the combined areas of Tokyo, and the prefectures of Kanagawa, Saitama and Chiba. The citizens

numbered about 1,220,000 (as of 2016), the climate is tropical, and it is a South Sea island that experiences the monsoons. 99% of the population are Christian, with the majority being Catholic. From the year 1999 onwards, an interim period of civil control by the United Nations Transitional Administration (UNTAET) began, and when this ended in 2002, the nation's people, who until then had not known independence, established for the first time an independent state. Hence administrative organizations, laws, and educational systems, had to literally begin from zero. Since the 16th century, East Timor has been Portugal's most distant colony, and if we were to include the three and a half years of Japanese occupation during the Pacific War, we may perhaps say that the colonization by Portugal continued until 1975. Nevertheless the Portuguese government in due course relinquished the colony, and in November of that year the Fretilin party declared independence. In December 1975, which happened to be the year of the fall of Saigon, and in Japan the year of the second cabinet of Prime Minister Kakuei Tanaka, President Ford of the USA visited Indonesia with his Secretary of State Henry Kissinger, in order to confer with President Suharto. The very next day, soldiers of the Indonesian armed forces invaded Dili and occupied present-day the capital of East Timor, and in 1976, East Timor was incorporated into Indonesia as its 27th state. Nevertheless however, since that time resistance by those in favor of independence persisted, and attempts by the Indonesian army to suppress these agitations resulted in atrocities, such as the Santa Cruz Cemetery massacre of 1991. Incidents like these attracted in due course the attention of the international community, and consequently in 1996, Roman Catholic Bishop Carlos Filipe Ximenes Belo, and José Ramos-Horta, who served as leaders of the independence movement, were awarded the Nobel Peace Prize. The outcome of this was that Indonesia's human rights abuses in East Timor and the tacit political approval of the global

community began to prove problematic, and so in 1999, with the backing of the United Nations, the people of East Timor were permitted to decide directly by ballot as to whether they preferred separation and independence from Indonesia, or not. The result of this ballot revealed that of the 98.6% who voted, 78.5% preferred independence, and in view of that, the independence of East Timor was decided upon. Yet, even during their subsequent withdrawal from East Timor, acts of violence and slaughter perpetrated by soldiers of the Indonesian army as well as the integrated supportive militia, and forced migration of residents to West Timor which is Indonesia territory continued unabated. The result of all this was that since 1976, around 200,000 people were reported as either dead or missing, and the number of refugees too, were many.

Ten years after liberation in 2012, the United Nations, which had all along firmly backed East Timor also withdrew, and the nation's citizens, in a spirit of trust and hope, set out on their own towards the building of their nation. The various families too, while grieving over the victims of the crisis, embarked nevertheless on restoring their lives, in a mood of enthusiasm. Street corners began to take on the vibrancy characteristic of Asian countries, and there occurred a baby boom, as a consequence of which by 2015, youth below the age of fifteen came to constitute 41.6% of the nation's population.

The educational system of East Timor suffered a collapse due to the turmoil arising from the nation's independence, and after freedom it was transformed into a smaller nation, with a population numbering less than a million at that time. Yet, rejecting the language, curriculum, and textbooks of its erstwhile occupying state it created them anew, this time adding even words from Tetum, which is the lingua franca. Devastated educational facilities began to be maintained once more, and in order to fill in the vacancy caused by Indonesian teachers who had returned to their

own country, they began training teachers of their own. Today, despite the fact that sixteen years have elapsed since the nation became independent, this trend still continues, and as of 2015, the net enrollment rate is 72.2% for elementary schools, 36.2% for junior high schools and 33.0% for senior high schools.

Considering the state of affairs in East Timor, in January 2013 the Society of Jesus opened the Colégio de Santo Inácio de Loiola (henceforth St. Ignatius School) at Ulmera, a fishing and farming village located in the region of Liqueiçá, around 20 kilometers to the west of the capital city of Dili. Also, in January 2016, a Teacher Training Institute, specifically the Instituto de São João de Brito was launched, with the object to turning out High School Teachers. Both institutes are aided and supported by the Jesuit Conference of the Asia Pacific (JCAP), but aside from that, financial contributions they receive from numerous parts of the world, amounting to roughly 15 billion yen to be used for constructions, and additionally, they receive donations every year to be used for administrations, scholarships, textbooks, and school implements.

Earlier, in the days when the nation was ruled by Indonesia, the Jesuits of East Timor were entrusted by the Catholic Archdiocese of Dili with the running of St. Joseph's High School. However, when the archdiocese began to insist on the Jesuits changing the High School into a university, the Jesuits, who firmly believed in the urgency of middle and high school education, withdrew from the administration of this institution, and on their own, they started the St. Ignatius Middle and High Schools. This was because they judged that the completion of secondary education was vital, before students embarked upon higher education. In actual fact however, the World Bank that dealt with East Timor also realized from their investigations, that in less developed countries, secondary school education tends to be neglected. Since a reason given for that was the fact that

training secondary school teachers was considered more difficult than training elementary school teachers, in East Timor, along with St. Ignatius School, the Institutu de São João de Brito was also begun with a view to turning out high school teachers, is understandable. In January 2014, the Superior General of the Jesuits, Fr. Adolfo Nicolás, while standing in the courtyard of St. Ignatius School, declared as follows, “our school will assist in preparing for the development of East Timor.”

2. Erecting a New School

■ (1) High Quality Education for all Children who wish to Learn

In January 2018, on the 6th year of the foundation of St. Ignatius School, whose students comprise around 700 boys and girls, ranging from the first year of middle school to the third year of high school. Ever since its commencement the institution set its eyes on becoming a pilot project in East Timor, a well-formed school providing good education to all children who desired to learn, making no distinction whatever between the rich and the poor. This, aside from providing high quality education, seeks to realize the provision of both “inclusive education,” and what UN agencies such as UNESCO and the World Bank have proposed, namely the educational ideology of “education for all.”

In order that this objective be realized, it is crucial that classroom podiums be occupied by teachers endowed with adequate ability. New teachers who joined the teaching profession after having graduated



Desks made by late Brother Mersch of Rokko Junior/Senior High School are used in East Timor.

from college during the latter half of their twenties, had no experience of having attained a good education, due to the fact that they were raised and educated in the period of confusion and turmoil during the nation's independence. Hence, after they had begun teaching, we organized to offer lectures on their training, on topics such as knowledge of subjects, teaching methodologies, forming of curriculums, creation of syllabus and teaching plans, and methods of evaluation, as well as topics related to their ethical sense and sense of mission as teachers, the psychology of adolescent youth, and so on, with the view that they acquire an adequate grasp of each issues. We also send them abroad to participate in seminars on Jesuit education and other such topics, so as to provide them with chances of acquiring ability and awareness as teachers. In cases of those who fulfilled the necessary university course work, but yet failed to secure bachelor's degrees, we granted them special treatment in order that they might acquire those degrees.

Our foremost target, we strive to achieve, has been to loan the textbooks for all the subjects to every students. On entering the 6th year of the school's foundation however, we have been able to attain this goal only with the Middle School. Just once in a few years, the Ministry of Education and Culture distributes books corresponding to ten to thirty percent of the number of students per subject. You can purchase textbooks, but since a single book costs between 10 to 20 US dollars, only few students can afford to buy them, for several subjects. Hence in our school, by using the donations received, we buy the necessary textbooks and lend them out to students who wish to use them, in order that they can study at their homes, with their own textbooks. Furthermore, as an educational institution, we have already erected a library and a simple gymnasium. Currently we look forward to the erection of a classroom for mathematics and a science laboratory, and we also draw a blueprint for a

music room, an art room, and a language laboratory.

■ (2) Scholarships for Economic Support

St. Ignatius School has a scholarship system that solicits and handles funds on its own, so as to enable children who wish to learn, to come to school. At present, scholarships are provided to students on the basis of donations we receive from Australian companies and Churches in Singapore, aside from the St Ignatius School funds that are obtained mainly from our Japanese collaborators. As of 2018, seventy students, constituting 10% of the entire students, have become recipients of scholarships. Accordingly, they are exempted from tuition (that is to say, regular tuition, expenses for uniforms and the clothes used in the gym, and other various expenses), as well as payments for schoolbags, shoes, and other garments worn by the students while commuting to school. By 2019 we have hopes to provide scholarships to ninety students, that is 13% of the current students, and in the future, we hope to increase the scholarships to about 30%. Nevertheless, the fact is that 30% is not a naïve figure which can be achieved by merely providing scholarships to 30% of the students. This is because our scholarship system is oriented towards students who desire to learn, who are able to pass the entrance examination, and who have a will to continue the school life. Both the children and their guardians are keen on entering our school. Yet, the system is such that scholarships are granted to students from families whose economic situation is strained, but who still desire to join our school.

■ (3) The Ulmera Project of Educational Support

The Ulmera Project received its name from the village where the school is located. St. Ignatius School supports the children of poor families of the locality, by enabling them to enter school. The school was opened in 2013,

but the number of children entering from the village where it was situated, was less than what we had expected. "If a good school were to be opened, and the word were to be spread that the scholarships would be provided to them, children would willingly come." Our such hopes were not realized. Hence, we explained our scholarship system to those coming to Church on Sundays, and urged them to take the school entrance examination, but still, the number of those from the village who responded, remained low. Despite the fact that children wishing to enter the school from the capital city of Dili revealed a marked upsurge, even so, at the third year after the opening of school, just only three students, commuted from the village, entered St. Ignatius School. Observing that St. Ignatius School strove to provide high quality education, families from urban areas however who were enthusiastic over the education of their children urged them to take the entrance examination, and score high points. We realized that if such a situation continued, St. Ignatius School would be alienated from the village, and what's more, it might turn out to be a risky project evoking nothing but a frustration for the villagers, since they would get no benefits from it.

Therefore, St. Ignatius School began a system of granting support to the children in their studies, referred to as the "Ulmera Project." We realized that the reason why children attending the school were few, was not just the poverty, but also factors such as low academic ability, indifference to the education, a desire to evade the task of dealing with the various entrance procedures involved, and so on. Hence, after holding a briefing session regarding school admission at a public elementary school in the village, we gathered the 6th grade elementary school students who desired to join St. Ignatius School, and for two hours daily from Monday to Friday, we conducted a free cram school for them. Here they were taught arithmetic and Portuguese, and meals were also offered free of charge. For

parents and guardians too, we conducted briefing sessions where we explained the process of admission, as well as the support they would get via scholarships. Those leading simple lives find it hard to see through changes in society, so we explained to them that the future awaiting for their children would differ from that of their own, and hence for their children, education was something critical. For those involved in the Ulmera Project, we offer our own approval criteria, and even if their entrance examination results failed to meet the standards of the general entrance examination, as far as possible, we accepted the candidates. Even after the announcement of acceptance, until they graduate from elementary school, we continue assembling the successful applicants and providing them with extra lessons, and even after their entrance into school, while they are in the first grade of Junior High School, we try to raise their academic ability by providing them with additional lessons after school hours. By such means, we seek to lead them towards imbuing within themselves the habit of studying, so that they may be able to do their homework and take the class tests.

In a project like this, our rapport with parents and guardians is crucial. Despite their poverty, we deal with the families in such a way, that they come around gradually to requesting us to offer a good education to their children. Yet, with regard to issues such as “the means of taking the entrance examination” and “the means of acquiring a scholarship,” we find that it is practically impossible to get them through the necessary procedures. Feeling cautious about documents arriving from village offices, they often tend to neglect applying for admission, and finally when they do arrive at school at the time of the deadline, they often come up with documents that are incomplete. As a backdrop to this, we also have to take into account the illiteracy of the parents. It is for this reason that we experience a lot of confusion regarding application forms for admission, as

well as scholarship application forms. Children are often being kept ready to sign for their parents, and we have even had cases where fathers made strenuous efforts to affix their signatures, resulted in joy for the families concerned. It is for this reason we often visit families, and try to establish trust relationships with them. We also have a bond of understanding and cooperation with the public elementary school of the village, where children wish to receive good education. There was a year when five students in the village could not enroll, since they could not pay 10 US dollars charged as matriculation fees. Later however, when information was sent out that they were exempt from it, a vice-principal from the public elementary school brought the students over to us one by one on his motorcycle, so that they might carry out the vital entrance procedures. Among such students, there were many who for the first time received a suitable education from their families.

Hence, we at St. Ignatius School feel that more than anything, our students have a right to learn, and we seek to realize literally a comprehensive educational program, that is positive and oriented to students of all social classes. This also means that since the number of students who can be enrolled in our school is limited, parents who until



The food occasionally provided by the government consists of a bowl of refreshment.

now felt they would be able to enroll their own children, would sometimes give up their children's place for other families' children. In fact, the idea of setting our sights on a good school conforming to the old image, is also persistent among us. Since the village students entering our school after receiving scholarships are low in academic ability, some teachers

expressed a view as follows, “This type of student selection criteria, will lower the average score of the successful students in the entrance examinations. Hence, the lowest score of the successful students has to be raised each year.” In fact, even members of religious congregations who have gained a good education after having studied abroad, and for whom consequently the image of a good school conforms to those of famous Catholic schools and universities the world around, sometimes make statements like, “They only talk of the poor.”

3. The Educational Ideology of a New School

Secondary education in nations like East Timor, a former colony that had gained independence, tends to possess the function of replicating its earlier social structures, including social classes. Since earlier times, children of elites tended to enter prestigious schools. After independence well-to-do social classes began to appear, and certain classes engendered the privatization of education. In such schools, students’ lives get confined into homogenized groups, depending on the financial situation of their respective families, and such students consequently fail to notice the contradictions visible in the society beyond their school walls. Consequently, St. Ignatius school endeavored to realize in visible form, both the spirit of Catholicism and mission of its founding mother, the Society of Jesus. It seeks to realize a new form of school education, a model symbolizing the benefits of good education, something that could not be done in the public school sector.

During the 35th General Congregation of the Society of Jesus that was held in 2008, it was declared that the challenges Jesuits face today are “establishing right relationships in the world, bringing reconciliation to a divided world, and working to recover true humanness.” Following this, in

the 36th General Congregation held in 2016, the mission of service for the sake of reconciliation was stressed, and the three challenges were presented, “reconciliation with God, reconciliation with human beings, and reconciliation with all creation (ecology).” That is to say, the Society of Jesus calls upon those who wish to be involved in its mission with self-awareness in offering “a new service for justice and peace,” as well as “a service for the poor and marginalized, a service for the creation of peace.”

Similarly, Jesuit schools including St. Ignatius school are Catholic institutions, and all Catholic schools today view their prime goal to guarantee all people the right to receive the education they need, in order to live. That is to say, we aim our schools to be the type that “show concern for the weakest human beings.” In order that this target be truly achieved, the Church has from before, made efforts for schools to realize the “Universal Declaration of Human Rights” and the “Declaration of the Rights of the Child,” and in this regard it also calls out for collaboration with international agencies.

Needless to say, schools are the first and the foremost places where students (each and every one) are nurtured, and not just the places where social reforms are targeted. Jesuit schools have paid respect on the type of education that “values each and every individual.” In other words, what was underscored so far is the service to souls (*cura personalis*), “more or greater” (*magis*), “the greater glory of God” (*Ad Majorem Dei Gloriam*), “men and women for others” and so on, all of which are facets typical of the Society’s own education. In recent years, the trend has been to realize our education in a way, that students be permeated with virtues we refer to as the four Cs’(4Cs’). These are Conscience (to listen to and follow the voice of conscience), Competence (people with aptitude), Compassion (people with tenderness) and Commitment (people who devote themselves to love and justice). Our educational strategy needs to be such that

students acquire such virtues, and our desire is that people of integrity cooperate with each other, and strive towards the creation of a better society.

This call may not end up simply as a cry, the Society of Jesus has been visibly responding to it in diverse ways, and in various social contexts. If we take for instance, the field of education, in the United States, the Cristo Rey schools and Nativity Schools (middle schools) have been started in order to cater children of immigrants, and in South America, we have schools for children of poor families, such as the Fe y Alegría. In certain research related to Cristo Rey High Schools, it is stated that few children of immigrants who join them can pass the entrance examinations of many famous universities, since their intellectual ability is roughly two years below that of other students. However, we evaluate the fact that immigrant children graduating from high school did endeavor to enter university. Also, the research on the Fe y Alegría conducted by the World Bank, has given us a new criterion of assessment. This is manifested by the questions, “what is a good education?” and “what is a good school?” Based on the philosophy of education for all, they assessed school education from the angle of “who are the ones who have an access to education?” and “to what extent can the intellectual ability of students be extended?” They take it for granted that, the average score of this enquiry into academic ability carried out at the Fe y Alegría, was below that of other schools. This research of the World Bank however, continues to declare as follows, “children who have been unable to have access to education can learn, and their academic ability is improving,” and, referring to the educational practices, they state, “the reason for this is because schools exist based on the Christian faith.”

4. The Fruit of Education accompanied by Hope

Students who commute to the school from the city also receive beneficiaries of scholarships. The father of one student was an officer in the Indonesian Armed Forces during the nation's occupation, but after independence, her father returned to their homeland. Another student had his father in prison, in conspiracy of collaborating with the colonizers during the independence conflict. A boy, due to his parental home in the mountains, had not even entered elementary school. Relatives however supported him, and consequently he for the first time became a fourth grader, and despite being around sixteen years of age, he had to enter the first year of middle school. These days, owing to their short life span, many children have parents who suffer in early deaths, and hence they come up to us with applications for scholarships. Also, even if they do not receive scholarships, there are many students hailing from their homes whose parents are civil servants, police officers, or teachers, because these are professions with low salaries, and since quite a few families borrow money for tuition, request the assistance of grandparents, or employ other such means, in order to send their children to our school. This is the reason why we seek to keep the tuition as low as possible, by relying on financial assistance from abroad. Since boys and girls from well-to-do families immensely feel the need to receive a good education, St. Ignatius School welcome them as well. Thus children having various backgrounds devote themselves to study at our school, and by leading a life of mutual support, they attain the ture experience. Our desire is that they nurture the bonds of youthful friendship regardless of interests, so that they will be able to judge for themselves, what is right, and mutually enhance their dignity, self-esteem, and human nature.

On observing the lives of our students, we notice two issues rising, namely their motivation to study and the course they take after graduation. Can the subjects dealt with in fulltime ordinary courses, (that is, liberal arts) provide students from the least developed countries a motivation to study? Also, what we concern about is the students from poor families. Viewed from the perspective of scholarly aptitude and finance, will they after graduation be able to go on to the university? In the sixth year since our school began, we noticed that students who had entered the first year of Middle School when it opened, had now advanced to the third year of High School, and hence, problems unique to youngsters had begun to arise among them. These include violence (in East Timor violence is allied to martial arts and has links to political activities as well), bullying, theft, and issues related to love relationships. Nevertheless however, we have realized that in East Timor the rapport with parents, for example his or her father and mother were estranged or divorced, exerts an influence on the lives of the young people at school.

As the grade level goes up, students from cities stay overnight at the homes of those in the village, and they themselves seem to realize the social disparities existing among them. Some girls commute to school on weekdays in fashionable attire, while others wear the same clothes every day. We have students being absent from class having no shoes to wear, we happen to see some students with no lunch. Some use the latest smart phones while others do not even have older models, and some live in homes with no electricity. In East Timor, while the grades of village children who receive scholarships remain low, those from relatively wealthy families attend English classes, and thereby acquire their academic abilities. We are eager to know how the students perceive such disparities existing among them.

I realize that Human Equality as a concept includes the nature and

aptitudes of people, as well as their feelings and emotions. After having taught fifteen years in Jesuit schools in Japan, I came to East Timor, and currently I teach over here. I have come to understand that the senses of students here as to what is 'good, bad, happy, or sad,' in no way differs from the senses of students in Japan. If such be the case, their ability to gain a grasp of Science, Mathematics, English or other subjects should also be the same, and if being given the suitable opportunities for study, East Timorese students too, ought to be able to acquire the necessary academic ability. If students realize that studying and gaining knowledge is an experience pleasant and happy, and if they learned to value themselves, they will be self-assured. In December 2018, our first batch of students graduated. Since the nation has not started good universities yet, these boys and girls are setting their goals overseas as well, hoping to enter some good universities.

5. The Institutu de São João de Brito

In January 2016, the Institutu de São João de Brito commenced in a rented classroom in the city of Dili, with twenty three students. Currently it is a four-year college for training high school teachers and comprises three departments, that is, English, Portuguese, and Religious Education. In May 2018, it was shifted to a separate university building, in an area adjoining St. Ignatius School. We are now in the third year since its opening, and the students number roughly a hundred. The institute seeks to turn out professionals manifesting qualities of leadership. That is to say, men and women whose knowledge of the subject is excellent, who can comprehend and reflect, who have a grasp of the teaching methodology, and who as teachers are permeated with an ethical outlook. The government of East Timor, considering the value of educational university

of this type, has even provided a site for this purpose.

On observing the students, we see many hailing from underprivileged families, and around 50% are beneficiaries of scholarships, from either the Society of Jesus or other sponsors. The reason for this is since the social status as well as salaries of teachers are low, gifted students whose families are relatively well off, do not view a teacher-training institute as their first choice of a university to enter. Hence, talented students who are financially strapped get scholarships enabling them to enter this university, and the fact that such measures will assist in rebuilding the nation's educational system, is undeniable. For one thing, it is true there are students who have entered the school without having received an adequate middle and high school education. However, to attempt to imbue them now with a suitable level of middle and high school academic ability, and later offer them a high school level education, would surely mean to force a double education upon them. Even more, students raised in the period surrounding the turmoil of the independence conflict, tend to view themselves seriously, in order that they may be able to envision their future in the way they ought to live, we encourage them with attitudes such as, "to live by facing the future, to accept oneself, to love the teaching profession," and so on.

In order to permeate teachers with qualities essential for the performance of urgent tasks, we have striven as far as possible to set up a curriculum, and provide the necessary facilities. Right from the sophomore year onwards, observation of classes and teaching practice began for the university students, at St. Ignatius School. Since they had not experienced many schools during their own middle and high school years, such activities served as an occasion for them to learn. They learn at St. Ignatius School how high the school students hold sports gatherings, cultural events, and also learn the roles of student council and committee

undertakings, staff meetings, meetings of guardians, and issues linked to school administrations. We had good faculty members, and also provided libraries, computer rooms, and language learning classrooms. Since necessity demands it, we have begun to consider creating in the future departments for training teachers in science and mathematics, as well as faculties for social sciences and the humanities. Therefore we need to gain the backing of the Association of Jesuit Colleges and Universities-Asia Pacific.

Conclusion

—A Human Globalization Oriented to Encountering People and having links with Life—

At first when being sent to East Timor, I was perplexed. The Bible contains teachings such as, “blessed are the poor in spirit, blessed are those who hunger and thirst for justice, do not steal, do not kill, do not commit adultery” and so on. However, even if I were to utter those words as a priest, and even if I were to describe my own bitterness or traumatic encounters of the past, and explain how I overcame them, yet, the fact remains that before my very eyes, men and women, who, despite having survived the horrors of the civil war, had witnessed people being put to death. Some made remarks like, “My life was saved by paying 20 US dollars,” or “I observed a man being killed because he could not pay 20 US dollars,” and some had witnessed the throats of others being slit. Since such a situation lasted until twenty years ago, what concerned me was, how do I convince people to forgive others from the bottom of their hearts, and be sincerely reconciled with them? However, the students of our school are youth belonging to a generation oriented towards the future. Hence, while school may be a place where they are informed of the painful

history of the past, we nonetheless desire that it serve also as a place focused on the future, where they may nurture the hopes and promises of the years to come. Where could we possibly invite people who earn a simple living by planting corn in fields made by slash and burn, or by selling firewoods? By being well educated, students would be able to compete with others and attain the lavish lifestyle that had so far eluded them, but, is that the target of this educational project? This indeed is a question we need to keep asking ourselves. An issue we often ponder over is, what sort of education do the East Timorese people need for their future? That would be the task of this educational project to be included in the curriculum, and to make this visible for a genuine educational setting.

I have come to realize that the purpose behind my being sent to the school in East Timor, was to strive for human globalization, namely, that “we as humans may cherish our mutual existence and dignity.” In actual fact though, what I have come to discern here is the truth that people are gifted with the same dignity and humanness, and that they lead lives by accepting and being accepted by others. More than offering support to the other person is a fellowship of mutual giving and receiving, which may enable us to live as human beings. I personally believe this process is an answer to the key questions that are linked to the human yearning for true happiness, as well as the desire to live in fidelity to one’s aspirations. Human globalization differs from economic globalism, in which it values ethical and spiritual issues such as justice, beauty, happiness, love, and human solidarity. It is a linking together of lives, an activity that surpasses nationality, race and social status. It is possessed with the yearning that transcends the framework of mind and body, and is an activity related to the salvation of the minds and bodies of others. On being involved in this type of work, we feel we have gone through a sort of transformation on

our own. We feel as though we are heading towards the sort of life we ourselves desired, a life where we have the freedom to appease our spiritual hunger.

Hence, the idea of “surpassing the current school education model that we are familiar with, and creating something new,” indeed offers challenges to our present-day knowledge, because it evokes within our minds, the issues such as, “what is a good education” and “what is a good school.” However, that is not all. It even goes a step ahead, because it offers society something new. Now that peace has returned to East Timor, I look forward to these two institutions serving as fresh symbols of hope for the future.

(Translated by Cyril Veliath)

The Future of Jesuit Education: Challenges and Promises of a Vision

Center for Global Education and Discovery Sophia University

Michael R. Polito

Introduction:

Jesuit Education, A Vision of Yesterday and Today

The success of Jesuit education over the last four hundred and fifty-plus years has been a courageous effort of hard work and prayer on the part of many. From the opening of the first Jesuit school in Messina, Italy in 1548, to Ignatius of Loyola's death in 1556, thirty-five Jesuit schools were launched across Europe. Two centuries later, an increase to more than eight hundred throughout Europe, Asia, and Latin America represented the largest organizational network of learning ever created. Although Jesuit education within the modern period experienced consolidation, faced with the rise of market economies and changing demographics, conditions today are challenging, yet favorable for renewal.

Speaking of the distinctive character of Jesuit education, Pedro Arrupe S.J. (1907-1991), 28th Superior General of the Society of Jesus, stated that every Jesuit school has the responsibility to operate out of its unique charism. A charism, as defined by the Catechism of the Catholic Church, is a grace of the Holy Spirit received for the benefit of the Church, the good of people, and the needs of the world. Taking concrete steps to live authentically a charism however requires judgment concerning what is being asked (that is, communicated through grace) and how it is to be done for the good of all (as measured by the standard of charity). Discernment therefore calls for a vision flexible enough to be adapted

locally, while maintaining rigidity strong enough to unify efforts globally. The ability of Jesuit education to thrive competitively in the course of its long history has been a result of this strong and flexible vision by which its champions established an educational mission passed down to the present day.

A mission can be defined as a intensely felt aim, ambition, or calling. In this sense, the word mission is associated closely with the word vocation, to be called to do something. Deeper, however, we discover that the Latin root for mission, *mittere*, means “to send.” So we have both calling and sending together conceptually within a single term. This is important to understand since a charismatic grace both inspires and compels, since it makes possible a special type of “seeing” that begins to exercise control over a person’s actions.

The word vision, from the Latin *videre*, meaning ‘to see’, denotes both the faculty of observation and perception, as well as, the ability to imaginatively and rationally interpret the world. In the latter sense, vision implies a way of understanding reality that is determinative; it is the means by which purpose is created, without which the ability to survive, whether as an individual or as an organization, would be greatly diminished. Human beings can differ in their seeing, both in awareness and interpretation. Just as men and women experience varying degrees of limitation physically, emotional and intellectual differences affect greatly a person’s ability to think about life and plan for the future. Further, serious moral blindness can lead to a life of unprincipled behavior, causing profound suffering and horrifying destructiveness. Maturity of vision on the other hand provides inspiration for engaging in vitally important work as a service to others. It is the means by which a plan of action is formulated and a pattern of behavior established, since it brings together values and attitudes that are mutually enhancing. Accordingly, Jesuits

often speak of “our way of proceeding.”

The heritage of Jesuit education began with the vision of Ignatius, as a distinctly Christian way of seeing the world. As Bishop Robert Barron S.T.D., writes, “Christianity is, above all, a way of seeing. Everything else in Christian life flows from and circles around the transformation of vision.” Ignatius’ transformation of vision taught him that God could be found in all things, since God was at the center of human existence. Communicated from that center, at the heart of each person, all other things were to be understood as created and used for the purpose of moving a person closer to God. This incarnational spirituality enabled Ignatius to see within the field of education a great opportunity for bringing others closer to God. The success of the first Jesuit school in Messina, followed by urgent appeals for other schools, proved to be a correct discernment of how God was calling and leading this small group of men to apply their charism to the conditions of the sixteenth century. Moving in the direction of education quickly became the primary activity of the Society of Jesus ever since; a form of evangelistic work—an apostolate—done in the service of the Catholic Church and the Catholic Christian faith, all for the greater glory of God (*Ad Majorem Dei Gloriam*).

Jesuit Higher Education

In a 2010 address to representatives of the nearly two hundred institutions comprising Jesuit higher education worldwide, Fr. Adolfo Nicolás S.J., thirtieth Superior General of the Society of Jesus, asked his audience:

“In this globalized world, with all its lights and shadows, would—or how would—running all these universities still be the best way we can respond to the mission of the Church and the needs of the world? Or perhaps, the question should be: What kind of universities, with what

emphases and what directions, would we run, if we were re-founding the Society of Jesus in today's world?"

This question reflects the belief of many that the "explosion of interdependence" brought about by globalization has created new, fundamental challenges for Jesuit education, particularly its colleges and universities, warranting an act of re-creation. The growing connectivity of people through international finance and trade, technology, and worldwide travel are unprecedented developments influencing everything from curricula to student enrollments to the economic viability of higher education institutions. In addition, the rise of identity politics, which feed upon superficial conceptions of the self, as well as, militant forms of both secularism and religious fundamentalism strain the social fabric of universities as intellectual communities committed to dialogue in the pursuit of truth. Moving forward in a manner that capitalizes on the immense potential of both the Jesuit educational tradition and its international and multicultural network of educators will require tackling imaginatively the most decisive problems first, so as to move beyond crisis.

Critical Issues

General agreement concerning the challenges faced by Jesuit higher education today may be said to prioritize the critical issues of cost, mission, and student formation as decisive for future advancement. The question of who has access to Jesuit education and at what financial cost to students and their families, the ability of executive leadership to maintain the continuity of the Catholic Jesuit education tradition as embodied in the apostolic character of its mission and religious vision, and the moral and intellectual formation of students in a pluralistic, interconnected, and technologically advanced global society are at the center of the debate.



Ateneo de Manila University



Georgetown University

Although each issue impinges upon the other, and therefore cannot fully be understood separately, an essay of this length and format precludes a comprehensive analysis. This essay therefore will focus on the critical issue of student formation since it covers the question of global competencies and the development of persons for the future health of humanity—in the words of Fr. Nicolás, “who our students become, what they value, and what they do later in life and work.”

Critical Issue: Formation

Formation touches upon the question of content and outcomes in Jesuit education. That is, by seeking to understand the importance of formation as a critical issue, we are inquiring into the practical purposes of higher education, such as intellectual, political, economic, and social development within liberal democratic societies. Within Jesuit higher education, priority is given to the moral and intellectual formation of each student as a means for the Church’s proclamation and witness to the Gospel of Jesus Christ. Jesuit higher education has a special responsibility for promoting the humanities since *eloquentia perfecta* is a principle belief behind Ignatian pedagogy and the Jesuit education mission of caring for the whole person.

Through a commitment to the development of the whole person, intellectual, moral, and spiritual (that is, *cura personalis*), the Church, and by extension Jesuit education, witnesses to the unity of faith and reason, the promotion of dialogue between persons and culture, and the concern for social justice. More fundamentally, this sharp focus calls attention to the Church's insistence on the sacred character of life associated with human dignity. While not ignoring the social dimension, that is, the need for family and community, and the responsibilities human beings bear for their societies and one another, the Church proclaims the inviolable and irreplaceable nature of human persons as foundational for thinking about morality and the greater social good, including the role of higher education in society. Themes, such as "preferential option for the poor" and "authentic human development", which have been expressed thoroughly in the social teaching of the Church, capture this central belief in the unique and unrepeatable nature of each individual as a person capable of self-understanding, self-possession and self-determination. Outcomes within Jesuit higher education therefore must flow from the promotion of individual persons who possess the intellectual and moral capacity for self-transcendence as creatures that bear the image of God and are directed to an ultimate, supernatural destiny. Care for the formation of students as ends in themselves and the kind of persons they become is the central guiding principle to providing what the Church calls "integral education." The person, stressed the "Pontifical Council for Justice and Peace" in its *Compendium of the Social Doctrine of the Church*, cannot be a means for carrying out economic, social or political projects. Education, which begins according to the Church in the primary community of the home, is progressed by Catholic institutions in accordance with the different stages of human development, and therefore seeks to guide each student towards responsibly realizing what the Church considers to be authentic human

freedom.

As a consequence, the topic of student formation as a critical issue within Jesuit higher education has to do broadly speaking with at least two significant changes evident in societies around the world in the past several decades. Firstly, radical shifts in public sentiments in many societies towards forms of inclusivity and plurality that relativize truth and deny the validity of transcendental claims to knowledge have impacted Jesuit campuses. As traditional ways of thinking about the human person and authority become delegitimized, shared mannerisms and norms of behavior within many societies are also greatly challenged, undermining social cohesion. Secondly, mounting threats to civilization and humanity's survival as a species, that were unthinkable less than a century ago, have become serious possibilities due to the rapidity and extent of environmental degradation as well as the development and proliferation of weapons and technologies of mass destruction. Jesuit higher education grappling with these issues is at the center of the prevalent culture wars erupting globally. These conflicts include debates over the necessary anthropological and moral foundations for peace and nonviolent living, the criteria by which resources and wealth are managed and allocated by financial systems established for the common good, and the impact of economic policy on the environment and public health, to name a few.

Formation: Men and Women for Others, with Others

While it is not possible to provide an exhaustive analysis of all issues and sides in these debates within a single essay, I would like to discuss two important topics, which I believe belong naturally to the content and quality of Jesuit higher education in the decades ahead. As Jesuit higher education seeks to fulfill its mission of forming men and women for others,

Jesuit colleges and universities will increasingly need to address through programs and courses the topics of environmental sustainability and conservation of natural capital provided by the Earth's ecosystems, and the topic of psychological and social recovery from traumatic stress in human populations. Peaceful coexistence will need to begin by educating the next generation of citizens on both the imperative of environmental protection and resource conservation as well as sound mental health, including the promotion of lifestyle choices that stabilize physiology and increase executive cognitive functioning. Both areas have the potential for dramatically increasing cooperation and altruistic behavior between persons, groups, and nations. Both areas of learning are also essential to integral human development, and therefore should occupy a central place within the future of Jesuit higher education given its Christian humanistic vision and apostolic mission.

Integral Human Development

In recent years, the Church has begun increasingly to articulate its social concerns for the flourishing of human society under the comprehensive notion of "integral human development." Proposed by Paul VI in his 1967 encyclical "Populorum Progressio" as the "authentic" and "complete" development of each person, all communities, and of the human race as a whole, Pope Saint John Paul II and Pope Emeritus Benedict XVI elaborated his ideas further. In the former's 1987 encyclical, "Sollicitudo Rei Socialis (On Social Concern)", and the latter's 2009 encyclical, "Caritas in Veritate (Charity in Truth)" the pontiffs write of duties arising from humanity's relationship to the environment as related to the subject of human development, as well as, liberation from various forms of human violence, including actions that cause emotional and

spiritual trauma and dysfunction. More recently, Pope Francis has brought concerns about the natural environment and the many forms of violence present in today's societies to a new level of public attention, particularly for Catholics, as the central message of his second encyclical, *Laudato Si'* (Praise Be to You; On Care For Our Common Home). Picking-up on Benedict XVI's thoughts in *Caritas in Veritate*, who explicitly connected "human ecology" and the natural environment, Pope Francis speaks further of an "integral ecology". Although the reason for the shift in terminology is unclear, it seems that by bringing together the words "integral" and "ecology", Pope Francis wishes to stress the interconnectivity and interdependency of life as living systems for the greater health of the planet. He writes, "There is an interrelation between ecosystems and between the various spheres of social interaction, demonstrating yet again that "the whole is greater than the part." Like his predecessors, Paul VI, Saint John Paul II, and Benedict XVI, Pope Francis' message concerns an integral human development requiring an ethical outlook on life that regards "justice" and "the common good" as central to forming men and women for others. Both justice and the common good as moral standards for action seek to remove all barriers and forms of violence from human life, since human flourishing is a fundamental right of every person, which extends to the ecosystems that make life possible. Jesuit higher education today cannot be provided genuinely without a wholehearted attempt to administer an educational paradigm that includes environmental sustainability and cognitive science into curricula as basic elements to a student's intellectual, social, and spiritual formation. These areas of learning pertain to justice and the common good in a most critical way today. If the Catholic Church sets before the world the ideal of a "civilization of love", its colleges and universities have a responsibility to develop a new general educational

core of study that can provide students with the latest advancements in knowledge of the planet and the human mind aligned to the great tradition of Catholic morality.

Two Important Moral Criteria Guiding Jesuit Education

In his 2009 encyclical “*Caritas in Veritate*”, mentioned above, Pope Emeritus Benedict XVI lays the foundation for his analysis of integral human development by speaking of justice and the common good as means of judgment. That is, a proper understanding of justice and the common good as norms, which we use in making moral decisions, is essential for guiding actions as practical expressions of truth and charity. In other words, I cannot decide on what is right to do, and therefore ethical, if I have not considered whether my choice is an expression of both equity and benevolence. For this I need to have a clear understanding of justices and goodness.

The Criteria of Justice: Justice is inseparable from and intrinsic to charity and truth. It is an integral part of love, writes Benedict. As a practical expression of love (charity), just actions recognize and respect the legitimate rights of individuals and groups, seeking to fulfill the requirements of duty, the obligation of protecting and promoting the wellbeing of others who, too, live in society. Justice is the first step, or “primary way”, in loving others, since it leads a person who is concerned with equity to give to other human beings what is required to them by their very existence. It also opens the way for further giving out of love by encouraging relationships of gratuitousness, mercy, and communion once the more basic demands of fairness have been met.

The Criteria of the Common Good: Additionally, says Benedict, the common good is an important consideration for justice, since no human

being stands alone. Each person is in relation to other individuals, building families and communities, which constitute society. By pursuing the good of “all of us” as a practical expression of charity and truth each person contributes to establishing society on the foundation of justice and peace. Acting in and through the juridical, cultural, and civil institutions that are expressions of civilization, the common good consequently takes on a *vocational* dimension. That is, to pursue the common good is to show an interest or concern for the proper functioning of the structures and organizations that mediate between people. Professional occupations (such as in education) therefore are also important means, “no less excellent and effective”, says Benedict, for rendering justice to others and bringing goodness into the world.

The Catholic Intellectual Tradition: The Whole World is Our Classroom

Belonging to the Catholic intellectual tradition, which is open inquisitively to all areas of human endeavor, Jesuit education is deeply intercultural and integrative, because it seeks justice and the common good as criteria for its actions. It fulfills the desire by the Catholic Church for dialogue between peoples, since the Church herself is universal (catholic means universal and a concern for the whole), as well as, to advance the conviction that faith and reason are mutually illuminating to experience. Therefore, while serving students from diverse religious and social backgrounds, Jesuit education is part of a tradition of higher learning that strives for wholeness and unity. The spiritual development of St. Ignatius of Loyola supplied the deep insight and conviction for “finding God in all things.” This vision of faith, given the favorable historical conditions of the 16th century towards education as noted by Catholic

historian John O'Malley, S.J., later supported the decision to move the newly formed religious order of the Jesuits in the direction of providing education as a way of serving God. It was reasoned that since schools, as social institutions, can be a powerful means for helping people develop both intellectually and morally, as well as, for preparing for positions of influence in society, both secular and religious, education based on Catholic convictions concerning the human person, can re-shape the world. In the service of faith, Jesuit education as a natural result grounded itself in and drew from a tradition of learning going back centuries to the first Cathedral schools, which had given rise to both lower grammar schools and schools of advanced learning that by Ignatius' time had developed into the first universities, such as in Bologna, Paris, and Oxford. The university, as an institution, arose *ex corde ecclesiae*, that is, from the heart of the Church and its intellectual tradition. In the service of the Catholic Christian faith, therefore, Jesuit colleges and universities today are continuing this history of higher learning throughout the world. They are communities in search of truth and the promotion of justice, which share a set of values and a spirituality that are fundamentally expansive, unifying, and constructive.

Protecting and Building a Peaceful World

The challenge today according to the Congregation for Catholic Education is a "courageous and innovative fidelity" to Catholic pedagogical vision that in many respects is threatened by relativism and cultural eclecticism based on the indiscriminate acceptance of certain styles of thinking and acting. Above, I have tried to indicate a few of the more critical issues facing Jesuit higher education in the years ahead. Likewise, I have also tried to emphasize the importance of the intellectual and moral

formation of students attending Jesuit higher education institutions who will be forced in their professional and personal lives to grapple with the complex and urgent threats humanity is now facing. The Jesuit approach to higher education moving forward, given its commitment to integral human development, which naturally includes considerations of justice and the common good towards persons and the environment, must demonstrate a concerted effort to educate all students in two critically important areas of learning: sustainable development, with an emphasis on environmental conservation and protection, and the effects of traumatic stress on individuals and human populations, which produce cycles of violence, aggression, addiction, dysfunction, and behavioral disorder. As a non-expert in these areas of study, I can only rely upon and point out what is now commonly known and accepted by experts in these fields.

Education for Sustainable Development: As the central challenge to the future of human life, sustainable development, which includes protection of the physical environment, must be understood and embraced by the next generation of those educated around the world. Renowned economist, Jeffrey Sachs, Director of the Earth Institute and Professor of Health Policy and Management at Columbia University, makes clear that the world economy today is not only remarkably unequal in the distribution of income, but also highly threatening to the physical basis of human life on the planet. Dependency by humans on “environmental services”, such as food and water, a stable climate and clean air (new research suggests that air pollution harms cognitive intelligence), atmospheric protection from solar radiation, and the material resources for survival, etc., are so elemental that the field of sustainable development, as an intellectual or analytical pursuit within systems science, also includes urgent moral questions, a normative side. The linkages among the economy, society, the environment, and governance highlight the profound

interconnectivity of life, a theme prevalent within Catholic social teaching. Further, connectivity and codependency are “intergenerational.” The unwillingness to move in the direction of a synergistic management of natural resources threatens the needs of both present and future generations. Stewardship and justice spread themselves out across time. Wasted resources and a polluted world today, amount to either formal or material cooperation with sin and evil, to be endured by others tomorrow. So both the analytical and normative sides of sustainable development and environmental protection should signal a serious responsibility on the part of all Jesuit colleges and universities (as well as high schools) to resist becoming morally culpable for a failure act through teaching. Social disorder and ecological disaster go together, according to Dr. Sachs. A basic awareness, says Pope Francis, of our mutual belonging however would enable the development of new convictions, attitudes and forms of life leading to the renewal of humanity. Laudably, Jesuit education has taken important first steps. Global Jesuit Education Initiatives include the International Jesuit Ecology Project supported by Loyola University of Chicago, which has created “Healing Earth”, a free, online environmental science textbook that addresses major ecological challenges from an integrated scientific, spiritual, and ethical perspective. In addition, important programs and departments in environmental studies have been launched at major Jesuit colleges and universities. Yet, much more work remains for integrating this field into all levels of education.

The Transformation of Traumatic Stress: Latest findings within the different branches of cognitive science point to the body and brain as comprising a common interactive system. The psychological effects of traumatic stress therefore impact the physiological development and functioning of the entire person, both brain and body, impairing a person’s ability to learn, stave off sickness and disease, control emotions, reason,

and govern behavior towards socially responsible ends. In fact, an individual's capacity for joy and intimacy, fundamental for establishing long-term relationships based on mutual bonding and trust, can be compromised significantly. In addition, the inability to collaborate with others often manifests itself chronically in negative and antisocial feelings towards self and society, psychophysiological states which prevent the full development of the whole person. Although global statistics for the impacts of traumatic stress on societies are difficult to ascertain due to the complexity of the issue, eminent psychiatrist and leading expert in the area of post-traumatic stress, Bessel van der Kolk, in more than thirty years of groundbreaking research by himself and others, points to a public health crisis of epidemic proportions. Contrary to what is commonly believed, individuals who undergo adverse life experiences in early childhood or adolescence, such as physical or sexual abuse, physical or emotional neglect, or family dysfunction, do not "outgrow" the effects, but rather carry them into their adult lives in a pervasive manner. Even for adults, the effects of combat in war or other singular traumatic events, such as natural disasters or violent assault, can manifest over time in high-risk behaviors, major health problems, or other harmful ways, subverting attempts to build a peaceful, global co-existence. Attentiveness to the discoveries on mental health made by cognitive brain science and related fields of study should be supported extensively within the field of education at all levels. Aptitude in interpersonal and group dynamics based on emotional intelligence has already been recognized and accepted as vitally important for success within business and commerce. The same level of public endorsement should be granted, beginning with educational institutions, for what we now know to be the impacts of trauma on the quality of life for individuals, their families, and society. Jesuit higher education has an obligation to face the issue head-on given its stated

commitment to social justice and the gospel of Jesus Christ. “Trauma,” says van der Kolk in his seminal work, *The Body Keeps the Score; Mind, Brain, and Body in the Transformation of Trauma*, “breeds further trauma; hurt people hurt other people.”

The Imperative of Authenticity

A final consideration might be to recognize the grave need for a rational framework for pursuing intellectually and morally the academic topics (such as above) recognized as essential for student development. Fr. Bernard Lonergan, S.J. is considered one of the greatest thinkers of the 20th century. As a philosopher, theologian, and economist, he sought, following in the footsteps of Saint Thomas Aquinas, common ground for dialogue between the different branches of knowledge, including the natural sciences, historical criticism, and classical theological reasoning. The fragmentation of the modern world is, in part, due to the loss of normativity that emerged from a growing awareness of contingency. Time and place influence our ability to grasp intellectually and with certainty phenomena, including human persons. Without getting into an extended discussion of Lonergan’s thought or the philosophical developments that led to the radical subjectivism of modern cultures about truth and morality, I would like to note for the sake of Jesuit higher education one possible way to begin moving beyond the relativism that chokes much thinking on college campuses, including decisions about the core curriculum and course offerings. For Lonergan, the key to discovering what is normative, from the contingent material of life, is “self-appropriation.” By self-appropriation, Lonergan means the hard work of willing to become increasingly aware of oneself and the reality of others in every act of consciousness. To do this is to live progressively a more

authentic life, authenticity being a necessary condition for insight and self-transcendence—growing-up intellectually, morally, and spiritually for the good of oneself and the world. The imperative to act authentically is being attentive in experiencing, being intelligent in understanding, being reasonable in judgment, being responsible in loving. As categories for thinking and discernment, individuals can be helped to live in a way that brings them closer to knowledge, truth, and goodness in spite of the contingent nature of existence and the limitations inherent in human finitude by reminding themselves of these transcendental imperatives. When I am consciously working towards bringing my experiencing, understanding, judging, and loving into alignment with my desire for knowledge, truth, and goodness, not by collapsing under the weight of complexity and limitation, but with a humility that strives forward undaunted, I am allowing myself to be moved towards new levels of wholeness, healing, and planetary health. The traditional framework of Jesuit education that demands a commitment to following the example of Jesus Christ, by using responsibly the gift of freedom, while confronting the obstacle of sin, is a demand for authenticity. Reemphasizing this traditional framework by using judiciously Lonergan's categories I think would be a helpful way for the Society of Jesus to build understanding and consensus across the Jesuit university network, as well as, among university leaders and faculty who either may not have the advantage of Catholic Jesuit religious training or may be from other faith traditions. Ultimately, the fact that nature and the universe is intelligible (the presupposition of all science) should give humanity hope for moving beyond the metaphysical, epistemological, and linguistic skepticism that denies the possibility of recognizing a realm of substance beyond appearances. And in moving beyond relativism, by extension, a way opens for speaking convincingly on the existence of the infinite and creative

mind of God, which thought the world into being.

Hope for the Future

Jesuit higher education today is facing hard challenges, which because they are so formidable, hold the promise for both spiritual renewal and apostolic growth. With every crisis comes opportunity for change, and therefore the potential to realize a greater good. As the world increasingly experiences levels of rapid interaction between once distant societies, chance presents itself to learn from others who may experience the world differently through the prisms of their own beliefs and histories. This, however, should not be an occasion to water-down valued convictions within the Catholic Christian faith, nor lead to a superficiality that relativizes truth and moral goodness as a way to achieve a false inclusiveness and multiculturalism on Jesuit campuses. A globalization of superficiality, as Fr. Nicolás makes clear, is antithetical to the Jesuit education tradition and the Catholic faith. All religions make exclusivist claims. It is in the nature of truth to make distinctions and differentiate clearly between belief and unbelief, good and evil, the nature of reality and that of the human person. As a community of learning, however, every Jesuit college and university is a place of shared life, a place of civility and conversation, which is supposed to be transformative for all. Without losing a sense of identity as a ministry of the Catholic Church, a journey towards a greater understanding and unity is sought by the entire community together, as a small step towards integral human development and peaceful coexistence. All of the work done by the many dedicated men and women in Jesuit higher education, past and present, lay and religious, as well as, by every student committed to “magis,” realizing the fullest possible development of their gifts and talents for the service of

others, is an offering of love most pleasing to God. In a time that calls for both discernment and renewal within the Catholic Church, and its many ministries, including Jesuit education, let us write upon our hearts and minds, as fellow companions in mission, who share a charism and vision, the words of Saint Ignatius: “*Ite, Inflammate Omnia*” — “go, set the world on fire.”

Depth, Universality, and Learned Ministry: Challenges to Jesuit Higher Education Today

Superior General of the Society of Jesus **Adolfo Nicolás, S.J.**

I am very happy to be with you this morning, on this remarkable occasion, as colleagues of nearly all of the roughly 200 institutions of higher education operating under the banner of the Society of Jesus gather to consider the importance of Jesuit education and its future. I am happy to greet all of you — collaborators in the mission and ministry of the Society, Jesuits, friends of the Society and of Jesuit higher education, and any students who might be present.

For the sake of simplifying language, I will use “universities” when referring to the wide range of higher education institutions represented in this assembly, ranging from specialized research centers to technical institutes, to colleges and to large, complex universities.

In the past two years in my present service, I have traveled to many parts of the world to encounter Jesuits and our collaborators, and I have always emphasized that I am as eager — in fact, *more* eager — to listen and to learn, rather than to speak from the lofty — and mythical — heights of Borgo Santo Spirito 4. I bring this same dialogical spirit to this meeting of Jesuit higher education. As I



listened yesterday to your discussion of regional challenges and the three frontier challenges that you selected to address, I could see that you already tackle many of the “serious contemporary problems” that Pope John Paul II identified for us in his apostolic constitution, *Ex Corde Ecclesiae*, and that you are doing so with the depth of thought, imagination, moral passion, and spiritual conviction that characterize Catholic and Jesuit education at its best.

What I wish to share this morning, therefore, should be taken as adding my perspective to what I hope will be an ongoing and ever deeper conversation on the future of Jesuit higher education. My own experience is that university people, especially university presidents, are not shy about sharing their points of view, so I am confident as you continue your consideration of important issues that your conversations will, at the very least, be spirited and insightful!

The theme of our conference — *Networking Jesuit Higher Education: Shaping the Future for a Humane, Just, Sustainable Globe* — involves a bold proposal. It suggests that we have today an extraordinary opportunity to have a hand in helping to shape the future, not only of our own institutions, but of the world, and that the way we can do that is through “networking.” That word, “networking,” so often used these days, is, in fact, typical, of the “new world” in which we live — a world which has as its “principal new feature,” what Pope Benedict XVI calls “the explosion of worldwide interdependence, commonly known as globalization.”

The 35th General Congregation also saw our interconnectedness as the new context for understanding the world and discerning our mission. I am aware that the word “globalization” carries different meanings and evokes different reactions for people of diverse cultures. There has been much discussion on both the positive features and the negative effects of

globalization, and I need not review them here. Rather, what I wish to invite us to reflect on together is this: How does this new context challenge us to re-direct, in some sense, the mission of Jesuit higher education?

You represent very different kinds of institutions from every part of the world, serving students, regions, and countries with widely divergent cultures, religions, resources, and having distinctive regional and local roles to play. Clearly, the question of the challenge of globalization for the mission of Jesuit higher education needs to be answered by each institution, in its unique social, cultural, and religious circumstances. But I wish to emphasize that it is also a question that calls for a common and universal response, drawn of course from your diverse cultural perspectives, from Jesuit higher education as a whole, as an apostolic sector.

How then does this new context of globalization, with the exciting possibilities and serious problems it has brought to our world, challenge Jesuit higher education to re-define, or at least, re-direct its mission? I would like to invite you to consider three distinct but related challenges to our shared mission that this new “explosion of interdependence” poses to us. First, promoting depth of thought and imagination. Second, re-discovering and implementing our “universality” in the Jesuit higher education sector. Third, renewing the Jesuit commitment to learned ministry.

I. Promoting Depth of Thought and Imagination

I will begin quite forthrightly with what I see as a negative effect of globalization, what I will call the globalization of superficiality. I am told that I am the first Jesuit General to use e-mail and to surf the Web, so I

trust that what I will say will not be mistaken as a lack of appreciation of the new information and communication technologies and their many positive contributions and possibilities.

However, I think that all of you have experienced what I am calling the globalization of superficiality and how it affects so profoundly the thousands of young people entrusted to us in our institutions. When one can access so much information so quickly and so painlessly; when one can express and publish to the world one's reactions so immediately and so unthinkingly in one's blogs or micro-blogs; when the latest opinion column from the *New York Times* or *El Pais*, or the newest viral video can be spread so quickly to people half a world away, shaping their perceptions and feelings, then the laborious, painstaking work of serious, critical thinking often gets short-circuited.

One can "cut-and-paste" without the need to think critically or write accurately or come to one's own careful conclusions. When beautiful images from the merchants of consumer dreams flood one's computer screens, or when the ugly or unpleasant sounds of the world can be shut out by one's MP3 music player, then one's vision, one's perception of reality, one's desiring can also remain shallow. When one can become "friends" so quickly and so painlessly with mere acquaintances or total strangers on one's social networks — and if one can so easily "unfriend" another without the hard work of encounter or, if need be, confrontation and then reconciliation — then relationships can also become superficial.

When one is overwhelmed with such a dizzying pluralism of choices and values and beliefs and visions of life, then one can so easily slip into the lazy superficiality of relativism or mere tolerance of others and their views, rather than engaging in the hard work of forming communities of dialogue in the search of truth and understanding. It is easier to do as one is told than to study, to pray, to risk, or to discern a choice.

I think the challenges posed by the globalization of superficiality — superficiality of thought, vision, dreams, relationships, convictions — to Jesuit higher education need deeper analysis, reflection, and discernment than we have time for this morning. All I wish to signal here is my concern that our new technologies, together with the underlying values such as moral relativism and consumerism, are shaping the interior worlds of so many, especially the young people we are educating, limiting the fullness of their flourishing as human persons and limiting their responses to a world in need of healing intellectually, morally, and spiritually.

We need to understand this complex new interior world created by globalization more deeply and intelligently so that we can respond more adequately and decisively as educators to counter the deleterious effects of such superficiality. For a world of globalized superficiality of thought means the unchallenged reign of fundamentalism, fanaticism, ideology, and all those escapes from thinking that cause suffering for so many. Shallow, self-absorbed perceptions of reality make it almost impossible to feel compassion for the suffering of others; and a contentment with the satisfaction of immediate desires or the laziness to engage competing claims on one's deepest loyalty results in the inability to commit one's life to what is truly worthwhile. I'm convinced that these kinds of processes bring the sort of dehumanization that we are already beginning to experience. People lose the ability to engage with reality; that is a process of dehumanization that may be gradual and silent, but very real. People are losing their mental home, their culture, their points of reference.

The globalization of superficiality challenges Jesuit higher education to promote in creative new ways the depth of thought and imagination that are distinguishing marks of the Ignatian tradition.

I have no doubt that all our universities are characterized by the striving towards excellence in teaching and learning and research. I want

to put this in the context of the Ignatian tradition of “depth of thought and imagination.” This means that we aim to bring our students beyond excellence of professional training to become well-educated “whole person[s] of solidarity,” as Father Kolvenbach noted. Perhaps what I mean can be best explained by reflecting a bit on the “pedagogy” in the contemplations on the mysteries of the life of Jesus in the Spiritual Exercises — which pedagogy Ignatius later applied to Jesuit education.

One might call this “pedagogy” of Ignatian contemplation the exercise of the creative imagination. The imagination works in cooperation with Memory, as we know from the Exercises. The English term used for the acts of the faculty of memory — *to remember* — is very apropos.

Imagine a big jigsaw puzzle with your face in the middle. Now Ignatius asks us to break it into small pieces, that is, to DIS-member before we can remember. And this is why Ignatius separates seeing from hearing, from touching, from tasting, from smelling, and so on. We begin to RE-member — through the active, creative imagination — to rebuild ourselves as we rebuild the scenes of Bethlehem, the scenes of Galilee, the scenes of Jerusalem. We begin the process of RE-creating. And in this process, We are RE-membering. It is an exercise. At the end of the process — when the jigsaw puzzle is formed again — the face is no longer ours but the face of Christ, because we are rebuilding something different, something new. This process results in our personal transformation as the deepest reality of God’s love in Christ is encountered.

The Ignatian imagination is a creative process that goes to the depth of reality and begins recreating it. Ignatian contemplation is a very powerful tool, and it is a shifting from the left side of the brain to the right. But it is essential to understand that *imagination* is not the same as *fantasy*. Fantasy is a flight from reality, to a world where we create images for the sake of a diversity of images. Imagination *grasps* reality.

In other words, depth of thought and imagination in the Ignatian tradition involves a profound engagement with the real, a refusal to let go until one goes beneath the surface. It is a careful analysis (dismembering) for the sake of an integration (remembering) around what is deepest: God, Christ, the Gospel. The starting point, then, will always be what is real: what is materially, concretely thought to be there; the world as we encounter it; the world of the senses so vividly described in the Gospels themselves; a world of suffering and need, a broken world with many broken people in need of healing. We start there. We don't run away from there. And then Ignatius guides us and students of Jesuit education, as he did his retreatants, to enter into the depths of that reality. Beyond what can be perceived most immediately, he leads one to see the hidden presence and action of God in what is seen, touched, smelt, felt. And that encounter with what is deepest changes the person.

A number of years ago, the Ministry of Education of Japan conducted a study in which they found that modern Japanese education had made great advances in science and technology, mathematics, and memory work. But, in their honest assessment, they saw that the educational system had become weaker in teaching imagination, creativity, and critical analysis. These, notably, are three points that are essential to Jesuit education.

Creativity might be one of the most needed things in present times — real creativity, not merely following slogans or repeating what we have heard or what we have seen in Wikipedia. Real creativity is an active, dynamic process of finding responses to real questions, finding alternatives to an unhappy world that seems to go in directions that nobody can control.

When I was teaching theology in Japan, I thought it was important to begin with pastoral theology — the basic experience — because we cannot

ask a community that has been educated and raised in a different tradition to begin with speculative theology. But in approaching pastoral theology, I was particularly puzzled by creativity: What makes a pastor creative? I wondered. I came to realize that very often we accept dilemmas where there are no dilemmas. Now and then, we face a true dilemma: We don't know what to choose, and whatever we choose is going to be wrong. But those situations are very, very rare. More often, situations appear to be dilemmas because we don't want to think creatively, and we give up. Most of the time, there is a way out, but it requires an effort of the imagination. It requires the ability to see other models, to see other patterns.

In studying that issue, I found one concept developed by psychologists particularly helpful: floating awareness. Psychologists study Sigmund Freud, Erich Fromm, and others from different schools of psychology to develop what they call "floating awareness." When psychologists encounter a patient and diagnose the person, they choose from different methods of helping people, deciding on the process that is going to help most. I think this is exactly what a Spiritual Father should do. And I wish we had this floating awareness when we celebrate the liturgy: the ability to see the community and grasp what it needs now. It's a very useful concept when it comes to education as well.

It strikes me that we have problems in the Society with formation because, perhaps, our floating awareness is not so well developed. For about twenty years or so, we have been receiving vocations to the Society from groups that we didn't have before: tribal groups, Dalit in India, and other marginal communities. We have received them with joy because we have moved to the poor and then the poor have joined us. This is a wonderful form of dialogue.

But we have also felt a bit handicapped: How do you train these people? We think they don't have enough educational background, so we give

them an extra year or two of studies. I don't think this is the right answer. The right answer is to ask: From where do they come? What is their cultural background? What kind of awareness of reality do they bring to us? How do they understand human relationships? We must accompany them in a different way. But for this we need tremendous imagination and creativity — an openness to other ways of being, feeling, relating.

I accept that the dictatorship of relativism is not good. But many things are relative. If there is one thing I learned in Japan, it is that the human person is such a mystery that we can never grasp the person fully. We have to move with agility, with openness, around different models so that we can help them. For education, I would consider this a central challenge.

Our universities are now teaching a population that is not only diverse in itself; it's totally unlike the former generation. With the generational and cultural change, the mentality, questions, and concerns are so different. So we cannot just offer one model of education.

As I said, the starting point will always be the real. Within that reality, we are looking for change and transformation, because this is what Ignatius wanted from the retreatant, and what he wanted through education, through ministry: that retreatants and others could be transformed.

Likewise, Jesuit education should change us and our students. We educators are in a process of change. There is no real, deep encounter that doesn't alter us. What kind of encounter do we have with our students if we are not changed? And the meaning of change for our institutions is "who our students become," what they value, and what they do later in life and work. To put it another way, in Jesuit education, the depth of learning and imagination encompasses and integrates intellectual rigor with reflection on the experience of reality together with the creative imagination to work toward constructing a more humane, just, sustainable,

and faith-filled world. The experience of reality includes the broken world, especially the world of the poor, waiting for healing. With this depth, we are also able to recognize God as already at work in our world.

Picture in your mind the thousands of graduates we send forth from our Jesuit universities every year. How many of those who leave our institutions do so with both professional competence *and* the experience of having, in some way during their time with us, a depth of engagement with reality that transforms them at their deepest core? What more do we need to do to ensure that we are not simply populating the world with bright and skilled superficialities?

II. Re-discovering universality

I would now like to turn to a second challenge of the new globalized world to Jesuit higher education. One of the most positive aspects of globalization is that it has, in fact, made communication and cooperation possible with an ease and at a scale that was unimaginable even just a decade ago. The Holy Father, in his address to the 35th General Congregation, described our world as one “of more intense communication among peoples, of new possibilities for acquaintance and dialogue, of a deep longing for peace.” As traditional boundaries have been challenged by globalization, our narrower understandings of identity, belonging, and responsibility have been re-defined and broadened. Now, more than ever, we see that, in all our diversity, we are, in fact, a single humanity, facing common challenges and problems, and, as GC 35 put it, we “bear a common responsibility for the welfare of the entire world and its development in a sustainable and life-giving way.” And the positive realities of globalization bring us, along with this sense of common belonging and responsibility, numerous means of working together if we

are creative and courageous enough to use them.

In today's university world, I know that many of you experience this breakdown of traditional boundaries in the contemporary demand that you internationalize, in order to be recognized as universities of quality — and rightly so. Already many of you have successfully opened offshore or branch campuses, or entered into twinning or cross-border programs that allow your students or faculty members to study or work abroad, to engage and appreciate other cultures, and to learn from and with people of diverse cultures.

When I travel, I am often asked why the number of Jesuits fully involved in social centers or social apostolate has come down; we are far less than we were before. This is true. But also in our schools we have far fewer Jesuits. And yet, at the same time, in our universities and our schools, we have many more programs than before with a social relevance. When I visited California last year — my first visit to the United States — I was greatly encouraged to see that in every one of our schools there was an outreach program, a broadening of horizons: bringing students to other countries, to other continents, to heighten their awareness and concern.

You have also been able to welcome more international students into your own universities, and all of these cross-cultural encounters and experiences surely enrich the quality of scholarship and learning in your institutions, as well as help you to clarify your own identity and mission as Catholic, Jesuit universities. Internationalization is helping your universities become better.

It is not this, however, that I wish to emphasize at this point. What I wish to highlight flows from your discussions yesterday. I will break down my argument into three points.

First, I am sure that all of you will agree with Pope John Paul II who, in *Ex Corde Ecclesiae*, observed that in addition to quality teaching and

research, every Catholic university is also called on to become an effective, responsible instrument of progress — for individuals as well as for society. For Ignatius, every ministry is growth, transformation. We are not talking about progress in material terms but about progress that supposes the person goes through a number of experiences, learning and growing from each of them. I know that, in different ways, every Jesuit university is striving to become what Ignacio Ellacuría, the Jesuit rector of the Universidad Centroamericana Simeon Cañas, who was martyred twenty years ago, called a *proyecto social*. A university becomes a social project. Each institution represented here, with its rich resources of intelligence, knowledge, talent, vision, and energy, moved by its commitment to the service of faith and promotion of justice, seeks to insert itself into a society, not just to train professionals, but in order to become a cultural force advocating and promoting truth, virtue, development, and peace in that society. We could say every university is committed to *caritas in veritate* — to promote love and truth — truth that comes out in justice, in new relationships, and so forth. We would be here all day if I were to list all that you do for your regions or countries, all the programs and initiatives in public education, health, housing, human rights, peace and reconciliation, environmental protection, micro-finance, disaster response, governance, inter-religious dialogue, and the like.

Second: however, thus far, largely what we see is each university, each institution working as a *proyecto social* by itself, or at best with a national or regional network. And this, I believe, does not take sufficient advantage of what our new globalized world offers us as a possibility for greater service. People speak of the Jesuit university or higher education system. They recognize the “family resemblances” between Comillas in Madrid and Sanatadharma in Jogjakarta, between Javieriana in Bogota and Loyola College in Chennai, between St. Peter’s in Jersey City and St. Joseph in

Beirut. But, as a matter of fact, there is only a commonality of Ignatian inspiration rather than a coherent “Jesuit university network”: Each of our institutions operates relatively autonomously of each other, and as a result, the impact of each as a *proyecto social* is limited. The 35th General Congregation observed that “in this global context, it is important to highlight the extraordinary potential we possess as international and multicultural body.” It seems to me that, until now, we have *not* fully made use of this “extraordinary potential” for “universal” service as institutions of higher education. I think this is precisely the focus of many of your presentations and your concerns here.

This brings me to my third and main point: Can we not go beyond the loose family relationships we now have as institutions, and re-imagine and re-organize ourselves so that, in this globalized world, we can more effectively realize the universality which has always been part of Ignatius’ vision of the Society? Isn’t this the moment to move like this? Surely the words used by the 35th General Congregation to describe the Society of Jesus as a whole apply as well to Jesuit universities around the world:

“The new context of globalization requires us to act as a universal body with a universal mission, realizing at the same time the radical diversity of our situations. It is as a worldwide community — and, simultaneously, as a network of local communities — that we seek to serve others across the world.”

To be concrete, while regional organizations of cooperation in mission exist among Jesuit universities, I believe the challenge is to expand them and build more universal, more effective international networks of Jesuit higher education. If each university, working by itself as a *proyecto social*, is able to accomplish so much good in society, how much more can we increase the scope of our service to the world if all the Jesuit institutions of higher education become, as it were, a single global *proyecto social*? So

it is expanding already the awareness that you and we all have.

Before coming here, I met with the Provincials of Africa in Rome; some other Provincials from Latin America were passing through as well. A couple of them mentioned, "Since you are going to Mexico for this meeting, can you tell the directors and the deans and the universities to *share* the resources they have? We who have only beginning institutions — if we could access the libraries and resources that are offered in universities with tradition and know-how and resources that we cannot afford, that would be a great, great help."

As you know, the Society of Jesus is moving from having a historical institute in Rome to having branches or small historical institutes around the world. I hope that these branches can network, because this is the time that every culture, every group can have its own voice about its own history — and not have Europeans interpreting the history of everybody else. In Rome, we are going to work in our own archives to copy, digitalize, and do whatever we can so that this can be shared with other centers. Likewise, it would be a tremendous service if the universities possessing tremendous resources of materials, libraries, etc., could open these to universities that could not hope to build a library in 10 years.

Your presence at this conference indicates your openness to a more universal dimension to your life and service as universities. My hope, however, is that we can move from conferences and discussions like those we had yesterday to the establishment of operational consortia among our universities focused on responding together to some of the "frontier challenges" of our world which have a supra-national or supra-continental character. The three discussion groups you participated in yesterday could serve as the start of three such consortia.

First, a consortium to confront creatively the challenge of the emergence of aggressive "new atheisms." In Europe they don't use this term. They

use “new aggressive secularism” and it is very anti-Church. Interestingly, Japan has been secular for 300 or 400 years, with total separation of church and state, but they have a secularism that is peaceful and respectful of religions. In Europe I have found a very aggressive secularism, not peaceful. Secularism without peace has to be anti-something or against somebody. Why have we come to that? We see it particularly in countries that have been most Catholic: Spain, Italy, Ireland. There, secularism goes against the historical presence of a church that was very powerful and influential. These new atheisms are not confined to the industrialized North and West, however; they affect other cultures and foster a more generalized alienation from religion, often generated by false dichotomies drawn between science and religion.

Second, a consortium focused on more adequate analyses and more effective and lasting solutions to the world’s poverty, inequality, and other forms of injustice. In my travels, a question that comes up over and over again is: What are the challenges of the Society? The only answer is: the challenges of the world. There are no other challenges. The challenge is looking for meaning: Is life worth living? And the challenges of poverty, death, suffering, violence, and war. These are our challenges. So what can we do?

And third, a consortium focused on our shared concerns about global environmental degradation which affects more directly and painfully the lives of the poor, with a view to enabling a more sustainable future for our world.

This third consortium could further network the already existing ecology network currently under the direction of the Secretariat for Social Justice and Ecology of the *Curia Generalizia*. We have been very blessed with very a imaginative and active Secretary, who is here. And we are now developing a section on social justice and ecology. So this would also

be a point of reference in this networking.

Let me end this section by reminding you that universities as such came very late into Ignatius' understanding of how the Society of Jesus was to fulfill its mission in the Church. What is striking is that, in the Constitutions, Ignatius makes clear why he is won over to the idea of what he calls "Universities of the Society": the Society of Jesus accepts "charge of universities" so that the "benefits" of "improvement in learning and in living ... be spread more universally." The more universal good is what prompts Ignatius to accept responsibility for universities. With all the means globalization makes possible, then, surely more effective networking in the manner I have described will allow us to spread the benefits of Jesuit higher education more universally in today's world.

III. Learned Ministry

In a sense, what I have described thus far as challenges to Jesuit higher education in this globalized world correspond to two of the three classic functions of the university. Insofar as universities are places of instruction, I have stressed the need to promote depth of thought and imagination. Insofar as universities are centers of service, I have invited us to move more decisively towards international networks focused on important supranational concerns. This leaves us with the function of research — the genuine search for truth and knowledge — but what is often called today "the production of knowledge" — a theme that, in today's university world, has generated much discussion on questions like the modes of research and its communication, the centers of knowledge production, areas of study, and the purposes of research.

I am sure you will agree that, if we are true to our Ignatian heritage, research in our universities must always ultimately be conceived of in

terms of what the 34th General Congregation calls “learned ministry” or the “intellectual apostolate.” (This is Jesuit jargon. And a tangential but important point to note is that the intellectual apostolate, sometimes a confusing term, applies to all Jesuit works and apostolates.)

All the virtues of the rigorous exercise of the intellect are required: “learning and intelligence, imagination and ingenuity, solid studies and rigorous analysis.” And yet, it is always “ministry” or “apostolate”: in the service of the faith, of the Church, of the human family and the created world that God wants to draw more and more into the realm of his Kingdom of life and love. It is always research that is aimed at making a difference in people’s lives, rather than simply a recondite conversation among members of a closed elite group. Again, I am sure that if I were to enumerate all the serious scholarly work and discussion being done in Jesuit universities to address “the serious contemporary problems” Pope John Paul II enumerates in *Ex Corde Ecclesiae* — that is, “the dignity of human life, the promotion of justice for all, the quality of personal and family life, the protection of nature, the search for peace and political stability, a more just sharing in the world’s resources, and a new economic and political order that will better serve the human community at a national and international level” — if I were to enumerate all that is being done, my allotted time would not be enough, and both you and I would faint in the process!

In keeping with my approach throughout this reflection, I would now like to ask what challenges globalization poses to the “learned ministry” of research in Jesuit universities? I propose two.

First, an important challenge to the learned ministry of our universities today comes from the fact that globalization has created “knowledge societies,” in which development of persons, cultures and societies is tremendously dependent on access to knowledge in order to grow.

Globalization has created new inequalities between those who enjoy the power given to them by knowledge, and those who are excluded from its benefits because they have no access to that knowledge. Thus, we need to ask: who benefits from the knowledge produced in our institutions and who does not? Who needs the knowledge we can share, and how can we share it more effectively with those for whom that knowledge can truly make a difference, especially the poor and excluded? We also need to ask some specific questions of faculty and students: How have they become voices for the voiceless, sources of human rights for those denied such rights, resources for protection of the environment, persons of solidarity for the poor? And the list could go on.

In this connection, the work-in-progress of the “Jesuit Commons,” which you will discuss tomorrow, is extremely important, and it will require a more serious support and commitment from our universities if it is to succeed in its ambitious dream of promoting greater equality in access to knowledge for the sake of the development of persons and communities.

Second, our globalized world has seen the spread of two rival “ism’s”: on the one hand, a dominant “world culture” marked by an aggressive secularism that claims that faith has nothing to say to the world and its great problems (and which often claims that religion, in fact, is one of the world’s great problems); on the other hand, the resurgence of various fundamentalisms, often fearful or angry reactions to postmodern world culture, which escape complexity by taking refuge in a certain “faith” divorced from or unregulated by human reason. And, as Pope Benedict points out, both “secularism and fundamentalism exclude the possibility of fruitful dialogue and effective cooperation between reason and religious faith.”

The Jesuit tradition of learned ministry, by way of contrast, has always combined a healthy appreciation for human reason, thought, and culture,

on the one hand, and a profound commitment to faith, the Gospel, the Church, on the other. And this commitment includes the integration of faith and justice in dialogue among religions and cultures. The training of the early Jesuits, for example, included the study of pagan authors of antiquity, the creative arts, science and mathematics, as well as a rigorous theological course of study. One only need consider the life and achievements of Matteo Ricci, whose 400th death anniversary we celebrate this year, to see how this training that harmoniously integrated faith and reason, Gospel and culture, bore such creative fruit.

Many people respond, “Please, don’t compare me to Matteo Ricci. He was a genius.” I take the point. But at the same time, the formation he received gave him the tools to develop his genius. So the question is: The formation that we give today — does it offer such tools? Are we that integrated? Are we that open in our training?

As secularism and fundamentalism spread globally, I believe that our universities are called to find new ways of creatively renewing this commitment to a dialogue between faith and culture that has always been a distinguishing mark of Jesuit learned ministry. This has been the mission entrusted to us by the Papacy in the name of the Church. In 1983, at the 33rd General Congregation, Pope John Paul II asked the Society for a “deepening of research in the sacred sciences and in general even of secular culture, especially in the literary and scientific fields.” More recently, this was the call of Pope Benedict XVI, to the Society of Jesus, its collaborators and its institutions during the 35th General Congregation. The Holy Father affirmed the special mission of the Society of Jesus in the Church to be “at the frontiers,” “those geographical and spiritual places where others do not reach or find it difficult to reach,” and identified particularly as frontiers those places where “faith and human knowledge, faith and modern science, faith and the fight for justice” meet. As Pope

Benedict observed, “this is not a simple undertaking” (Letter, No. 5), but one that calls for “courage and intelligence,” and a deep sense of being “rooted at the very heart of the Church.”

I am convinced that the Church asks this intellectual commitment of the Society because the world today needs such a service. The unreasoning stance of fundamentalism distorts faith and promotes violence in the world, as many of you know from experience. The dismissive voice of secularism blocks the Church from offering to the world the wisdom and resources that the rich theological, historical, cultural heritage of Catholicism can offer to the world. Can Jesuit universities today, with energy and creativity, continue the legacy of Jesuit learned ministry and forge intellectual bridges between Gospel and culture, faith and reason, for the sake of the world and its great questions and problems?

Conclusion

According to good Jesuit tradition, the time has now come for a *repetitio!* — a summing up. I have sought to reflect with you on the challenges of globalization to Jesuit universities as institutions of learning, service, and research. First, in response to the globalization of superficiality, I suggest that we need to study the emerging cultural world of our students more deeply and find creative ways of promoting depth of thought and imagination, a depth that is transformative of the person. Second, in order to maximize the potentials of new possibilities of communication and cooperation, I urge the Jesuit universities to work towards operational international networks that will address important issues touching faith, justice, and ecology that challenge us across countries and continents. Finally, to counter the inequality of knowledge distribution, I encourage a search for creative ways of sharing the fruits of research with the

excluded; and in response to the global spread of secularism and fundamentalism, I invite Jesuit universities to a renewed commitment to the Jesuit tradition of learned ministry which mediates between faith and culture.

From one point of view, I think you can take everything I have said and show that the directions I shared are already being attempted or even successfully accomplished in your universities. Then, one can take what I have said as a kind of invitation to the “*magis*” of Ignatius for the shaping of a new world, calling for some fine-tuning, at it were, of existing initiatives, asking that we do better or more of what we are already doing or trying to do. I think that is a valid way of accepting these challenges.

I would like to end, however, by inviting you to step back for a moment to consider a perhaps more fundamental question that I have been asking myself and others over the past two years: If Ignatius and his first companions were to start the Society of Jesus again today, would they still take on universities as a ministry of the Society?

Already in 1995, General Congregation 34 saw that the universities were growing in size and complexity, and at the same time, the Jesuits were diminishing in number within the universities. In 1995, when GC 34 spoke about the diminishing number of Jesuits in universities, there were about 22,850 Jesuits in the world. Today, in 2010, there are about 18,250 — about 4,600 fewer Jesuits. I need not go into further statistics to indicate the extent of this challenge. I am very aware of and grateful for the fact that, in the past fifteen years, there has been much creative and effective work aimed at strengthening the Catholic and Ignatian identity of our institutions, at creating participative structures of governance, and at sharing our spiritual heritage, mission, and leadership with our collaborators. I am also very aware of and delighted to see how our colleagues have become true collaborators — real partners — in the

higher education mission and ministry of the Society. These are wonderful developments the universities can be proud of and need to continue as the number of Jesuits continues to decline.

I believe we need to continue and even increase these laudable efforts of better educating, preparing, and engaging lay collaborators in leading and working in Jesuit institutions. I can honestly say that this is one of the sources of my hope in the service of the Society and of the Church. If we Jesuits were alone, we might look to the future with a heavy heart. But with the professionalism, commitment, and depth that we have in our lay collaborators, we can continue dreaming, beginning new enterprises, and moving forward together. We need to continue and even increase these laudable efforts.

I think one of the most, perhaps *the most*, fundamental ways of dealing with this is to place ourselves in the spiritual space of Ignatius and the first companions and — with their energy, creativity, and freedom — ask their basic question afresh: What are the needs of the Church and our world, where are we needed most, and where and how can we serve best? We are in this together, and that is what we must remember rather than worrying about Jesuit survival. I would invite you, for a few moments, to think of yourselves, not as presidents or CEOs of large institutions, or administrators or academics, but as co-founders of a new religious group, discerning God's call to you as an apostolic body in the Church. In this globalized world, with all its lights and shadows, would — or how would — running all these universities still be the best way we can respond to the mission of the Church and the needs of the world? Or perhaps, the question should be: What kind of universities, with what emphases and what directions, would we run, if we were re-founding the Society of Jesus in today's world? I am inviting, in all my visits to all Jesuits, to re-create the Society of Jesus, because I think every generation has to re-create the

faith, they have to re-create the journey, they have to re-create the institutions. This is not only a good desire. If we lose the ability to re-create, we have lost the spirit.

In the Gospels, we often find “unfinished endings”: the original ending of the Gospel of Mark, with the women not saying a word about the message of the angel at the tomb; the ending of the parable of the prodigal Son, which ends with an unanswered question from the Father to the older brother. These ambiguous endings may be unsettling, and precisely meant to provoke deeper, more fundamental questioning and responses. I therefore have good precedents to conclude my talk in this open-ended way. I hope I leave you reflecting to what extent the challenges I have offered this morning are about improving our institutions and the mission and ministry to help shape a more humane, just, faith-filled, sustainable world or are calls to, in some sense, re-found what Ignatius called “the universities of the Society.”

編集後記

『叡智を生きる』（新版）をお贈りします。上智大学創立100周年を機に2013年にこの小著は出版されました。この間、部分的な改訂を行ってきましたが、今回は学校法人上智学院がイエズス会の中高四校の法人と合併したことを受けて、全面的に改訂し、新版として出版することになりました。

自分を知るためには、自身の「由来」「現在の状況」「将来へのビジョン」を知ることが大切になります。それと同様に、自ら学ぼうとしている「イエズス会学校」や「イエズス会教育」が何であるかを知るためにも、この三つのことを知ることはきわめて重要なことになります。イエズス会の大学、中highで学び始める皆さんにこの小著が自分の学校をよりよく知るための手がかりとなれば幸いです。

最後に、執筆してくださった方々、翻訳してくださった方々にお礼を申し上げます。学生・生徒の皆さんがよりよい学校生活を送ることができますように、ともに祈りたいと思います。

編集者一同

Editorial Afterword

We are happy to present you a new edition of our publication, *Living in Wisdom*. This little book was first published in 2013, on the occasion of our commemorating the centenary of the foundation of Sophia University. This edition has been revised in parts, and owing to the fact that the Sophia School Corporation has since then been expanded to include the four Junior and Senior High Schools of the Society of Jesus, we decided to subject it to a thorough revision, and present it anew as a fresh publication.

In order to know oneself, it is crucial that we gain an insight into our origins, our current situation, and our vision of the future, and these same three factors are also of critical value, when it comes to acquiring an idea as to what it is that goes to constitute a Jesuit School or Jesuit Education. To those of you who intend pursuing your future study at a Jesuit school or university, we wish to state that if this publication of ours serves to enable you in some small way to acquire a better knowledge of your future institution, we would consider our efforts to be amply repaid.

To conclude, we hereby express our sincere gratitude to all who were in any way involved in typing, translating, or in the laying out of these manuscripts, and we pray that all you students have a happy and fulfilling experience in your respective institutions.

The Members of the Editorial Board

叡智を生きる 他者のために、他者とともに
(新版)

2019年4月1日 第1版第1刷発行
2020年4月1日 第2刷発行
2021年4月1日 第3刷発行

編者：上智学院カトリック・イエズス会センター

発行者：佐久間 勤
発行：Sophia University Press
上智大学出版

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1
URL：<https://www.sophia.ac.jp/>

制作 (株)きょうせい

〈検印省略〉

©Ed. Sophia School Corporation Catholic-Jesuit
Center, 2019 Printed in Japan

印刷・製本 きょうせいデジタル(株)
(5300286-00-000)

[略号：(上智) 叡智を生きる (新版)]

Sophia University Press

上智大学は、その基本理念の一つとして、
「本学は、その特色を活かして、キリスト教とその文化を
研究する機会を提供する。これと同時に、思想の多様性を
認め、各種の思想の学問的研究を奨励する」と謳っている。

大学は、この学問的成果を学術書として発表する「独自の場」を保有することが望まれる。どのような学問的成果を世に発信しうるかは、その大学の学問的水準・評価と深く関わりを持つ。

上智大学は、(1) 高度な水準にある学術書、(2) キリスト教ヒューマニズムに関連する優れた作品、(3) 啓蒙的問題提起の書、(4) 学問研究への導入となる特色ある教科書等、個人の研究のみならず、共同の研究成果を刊行することによって、文化の創造に寄与し、大学の発展とその歴史に貢献する。

Sophia University Press

One of the fundamental ideals of Sophia University is “to embody the university’s special characteristics by offering opportunities to study Christianity and Christian culture. At the same time, recognizing the diversity of thought, the university encourages academic research on a wide variety of world views.”

The Sophia University Press was established to provide an independent base for the publication of scholarly research. The publications of our press are a guide to the level of research at Sophia, and one of the factors in the public evaluation of our activities.

Sophia University Press publishes books that (1) meet high academic standards; (2) are related to our university’s founding spirit of Christian humanism; (3) are on important issues of interest to a broad general public; and (4) textbooks and introductions to the various academic disciplines. We publish works by individual scholars as well as the results of collaborative research projects that contribute to general cultural development and the advancement of the university.

Living in Wisdom

©Ed. Sophia School Corporation Catholic-Jesuit Center, 2019

published by

Sophia University Press

production agency : GYOSEI Corporation, Tokyo